

明治期来日アメリカ女性宣教師による トランスナショナルなキリスト教伝道

ーアメリカン・ボード宣教師イライザ・タルカット
(Eliza Talcott, 1836-1911)を事例としてー

石村 真紀

目次

序	1
第1部 19世紀後半アメリカおよび日本の社会とプロテスタントキリスト教	
第1章 19世紀後半の日米社会状況	9
第2章 アメリカン・ボードの日本伝道	18
第2部 アメリカン・ボード女性宣教師イライザ・タルカットの活動	
第3章 神戸—日本伝道最初の7年	27
第4章 岡山における活動	38
第5章 京都および広島における活動	56
第6章 休暇帰米中およびハワイにおける活動	69
第7章 神戸—日本伝道最後の9年	87
結語	100
年譜	103
参考文献	105

序

ミッショナリー・ムーブメント（伝道運動）¹ は、19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカプロテスタントキリスト教（以下、米プロテスタント）史を特徴づける大きな要素である。このムーブメントは、伝道を第一義とすることはいうまでもないが、加えて、当時のアメリカ社会が抱えていた社会問題の解決に、キリスト教会が一定の役割を果たしてゆくことによって、個人の魂の救済から社会全体の救済をめざすという米プロテスタント教界の方向性を具体化したものでもあった。

19 世紀前半の米プロテスタント教界においては、第 2 次信仰復興の流れの中で、国内フロンティアへの伝道活動が熱心に進められていた。また同時に、伝道活動への熱意を持った大学生が核となり、海外伝道の組織が誕生した。本論文で取りあげるアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下 ABCFM）も、ウィリアムズ大学の卒業生を中心に 1810 年に組織された、アメリカ最初の超教派の海外伝道団体である。ABCFM の伝道地はヨーロッパ、アジア、中東、アフリカ、オセアニア諸国に及び、19 世紀後半には明治維新によって鎖国を解いた日本もその対象となるに至った。

19 世紀後半から世紀転換期にかけてのミッショナリー・ムーブメントには、先立つ 19 世紀前半の福音伝道中心の活動と異なっている点としてアメリカの国内情勢を反映した社会改良（social reform）の要素が含まれている点が特徴づけられる。この時期は、アメリカ史の上での大きな変革のときであった。1865 年、国内を二分した南北戦争が終結し、アメリカ社会には大きな工業化・都市化の波が押し寄せた。19 世紀末、アメリカは世界第一の工業国となったが、それに伴い、都市への人口集中、全国的な鉄道網の発達、大企業の出現、新移民の大量流入など、これまでにない社会の大きな変化が生じることとなった。この変化は、国家としてのアメリカの発展に対する期待を抱かせる一方で、旧来の生活様式や価値観といった個人の生き方に関わる部分に大きな影響を与え、ゆるがせるものでもあった。また、社会の形態が変化した結果、貧困、格差、差別といった社会問題がさまざまな形で噴出し、その解決が図られねばならなかった。そこに注力したのが米プロテスタント教界であり、グラッデン（Washington Gladden, 1836-1918）やラウシェンブッシュ（Walter Rauschenbusch, 1861-1918）によって提唱された社会的福音（Social Gospel）の思想はプロテスタントの教義を社会問題解決の場面に展開させようというものであった。ミッショナリー・ムーブメントもそうした流れに沿って変容していった。それをふまえて、本論文では 19 世紀後半期のミッショナリー・ムーブメントの一例として海外伝道に着目し、その時期の中心課題である社会改良が海外の伝道地において実際に如何にして行われたか、伝道地の現実との関連を考察することを基本とする。伝道地で行われた社会改良が、本国アメリカのアングロサクソン優越主義

的社會改良の持ち込みではなく、伝道地ごとの視点からの改良を意図していたことを明らかにしたい。

これまでの先行研究においては、ミッショナリー・ムーブメントの特徴としての社会改良は、アングロサクソン優越主義やアメリカの膨張主義、帝国主義が産んだものという説明がなされてきた。このような解釈の前提となっている、プロテスタント史における海外伝道に対する見方は、時期によって3つの段階に分けることができる。すなわち、1990年代以前には、アーサー・シュレージンガー (Arthur Schlesinger Jr.) やウィリアム・ハッチソン (William R. Hutchison) に代表される、アメリカ社会の影響が伝道地に及ぶという一方向的な見方がなされていた²。1990年代以降、このような見方に対する批判として、ダナ・ロバート (Dana L. Robert) は、伝道地からアメリカ本国へのバックラッシュ、両地の相互関係を双方向から見ていくという視点から海外伝道を解釈する新たな見解を提唱した³。2000年代になると、この見方をさらに発展させた「越境史的視点 (Transnational History)」からの海外伝道研究が吉田亮らにより発表された⁴。また、19世紀以降の米プロテスタントと社会改良という視点からみた先行研究⁵については、いくつかの分野があげられる。なかでも、禁酒運動については最も多くの研究がなされており⁶、道徳改良⁷、医療⁸なども着目されてきた分野である。これらの先行研究においては、特に女性の社会改良への参画という点について1980年代以降のフェミニズムにかかる議論の活発化に呼応して、フェミニズムや女性の権利獲得の観点からの研究が中心となっている。その中には、女性が職業以外で社会に進出してゆく過程で形成された女性団体に関する研究もみられる⁹。また、前述の越境史の手法によって特に禁酒運動を中心に論じたイアン・ティレル (Ian Tyrrell) の研究¹⁰は、さらに新しい視点を提供するものである。

プロテスタント諸教派の海外伝道については、前述のシュレージンガーやハッチソンの研究のほか、Congregationalismの観点から長期にわたって包括的にとらえたジョン・フォン・ローア (John von Rohr) の研究、北米の諸教派の海外伝道をさまざまな視点から考察したウィルバート・シェンク (Wilbert R. Shenk) らの研究がある¹¹。特に女性の海外伝道に関しては、最初に女性に着目したロバート・ピアース・ビーバー (Robert Pierce Beaver)、女性宣教師による海外伝道の発展と衰退の流れを19世紀初頭から第一次大戦期まで俯瞰したパトリシア・ヒル (Patricia Hill) らの研究があげられる¹²。

ABCFMの日本伝道および宣教師に関する研究については、派遣宣教師とABCFM本部の間でやりとりされた書簡、報告書などの一次資料に基づいた研究が進んでいる¹³。研究の焦点としては、伝道の拠点となった神戸、京都、大阪の3ステーションを中心に、伝道、教育、社会福祉、医療といった個別のテーマ、あるいは宣教師個人の事績などがあげられるが、主として日本社会における諸問題との関係性の中での考察にとどまるものが多い。また、本論文でとりあげる社会改良に関連する研究は、宣教師・医師であっ

たジョン・カッティング・ベリー (John Cutting Berry, 1847-1936) あるいは京都看病婦学校で教鞭を執った看護婦リンダ・リチャーズ (Melinda Ann Judson Richards, 1841-1930)、岡山でセツルメント活動を展開したアリス・アダムス (Alice Pettee Adams, 1866-1937) らに関するものがあるが¹⁴、ミッショナリー・ムーブメントの視点からの研究はいまだ見られない¹⁵。

米プロテスタントの海外伝道を対象とした研究においては、宣教師個人を扱った場合、個人の事績を中心とした個別の事例研究に終わってしまうことになりがちであり、また一つの伝道地全般を扱うと伝道地の特殊事情に左右されることが多い。さらに、海外伝道の送り出し側と伝道地側の状況を平等に扱っていくことにも困難がある。本論文においては来日アメリカ人女性宣教師個人を事例として扱っているが、事例とした宣教師は後述のように特定の分野で業績を上げたのではなく、また伝道地でも複数の場所で活動し、一箇所でのみ活動したのではなかった。特に、ハワイという本国アメリカと海外伝道地の中間的な位置で日本人移民女性への伝道に携わったことは、越境史¹⁶的視点を重視する本論文の事例としてふさわしいといえることができるであろう。さらに日米両方の地で階層もさまざまな女性と関わり、また伝道地・日本では日本人男性への伝道を行っていたという、本国アメリカではなし得なかった活動を可能とした点も看過できないと考えた。

本論文においては、対象時期を 19 世紀後半から世紀転換期とする。中心的に扱うのは 19 世紀末であるが、19 世紀後半は海外伝道の方針変化の準備期であり、ABC FM の日本伝道が始まった時期でもあるため、この時期についても検討が必要である。

扱う事例は、ABC FM 日本派遣宣教師イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の伝道活動である。タルカットは、ABC FM が日本に派遣した最初の女性宣教師¹⁷であり、1873 年に神戸に着任、同じ女性宣教師ジュリア・ダッドレー (Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906) とともに現在の神戸女学院¹⁸となる女子寄宿学校を創立した。その後、岡山、京都、ハワイで伝道に力を注ぎ、京都看病婦学校、神戸女子神学校でも教鞭をとった。ABC FM の日本派遣宣教師としてのタルカットの活動については、これまで主として神戸と京都での教育活動に関する研究がなされてきた¹⁹。一方、タルカットは教育のみならず各地への伝道も来日初期から活発に行っており、ABC FM 関係の機関誌やその他の文献によってそれを知ることができる²⁰。むしろ、教育にたずさわるよりも伝道、特に女性対象の伝道活動や、のちに社会福祉事業に発展する孤児院設立の支援、病院訪問といった社会的弱者の救済となる活動を積極的に行っていた。そしてそれらの活動のさらなる展開として、バイブル・ウーマン (Bible woman、女性伝道者) の養成にも力を注いでいた。タルカットの日本での活動は 40 年にわたり、それはほぼ明治時代の期間に相当する。その間に日本社会の状況は大きく変化した。タルカットが伝道活動の対象とした、女性の置かれた立場、キリスト教に対する見方も社会の変化に応じて異なっ

たものとなっていき、そのことは必然的にタルカットの活動スタイルに影響を与えたと考えられる。ABCFM 宣教師としてのタルカットは、ABCFM の伝道方針に従うが、実際の伝道活動の場においては変化する状況に最適の伝道スタイルを求めたのである。またタルカットは、伝道対象を主として女性としながら、教育、看護、地域伝道、海外移民伝道とさまざまな伝道場面で活動してきた。その過程において、例えば看護の領域では病院での傷病兵訪問のように、伝道対象も男性へと広がっていった。タルカットの時代、女性には按手札を受けて牧師になることが認められておらず、それ故に女性宣教師は伝道活動に直接携わることができなかった。そのため、女性宣教師に期待されていた役割の主要な部分は「女性による女性のための働き」であり、男性を伝道対象とできる機会がなかったことに鑑みると、タルカットの活動は伝道地において大きな展開をみせていたと言える。

本論文ではまず第 1 部において 19 世紀後半の日米の社会状況とプロテスタントキリスト教について述べる。第 1 章では 19 世紀後半の日米の社会状況全般を概観し、それぞれの社会とプロテスタントキリスト教がどのような関係にあったかをみる。アメリカにおいては南北戦争、日本においては明治維新が社会全体の大きな変革点となっており、この変革点の前後での社会状況の変化を明確にする。そしてアメリカでは米プロテスタント教界の変化、日本では明治維新後に始まったプロテスタントキリスト教の伝道と社会との関係を全体的に捉える。続いて第 2 章では特に ABCFM の初期の日本伝道についてみていく。日本に入ってきた米プロテスタントの一教派である ABCFM の初期の伝道の特徴として教育、女性宣教師派遣と日本女性への伝道、医療と社会改良の萌芽的活動を指摘、その後の展開について整理する。これらをふまえ、第 2 部ではタルカットの ABCFM 女性宣教師としての活動を時系列に沿って検討する。まず第 3 章ではタルカットが来日して最初に活動を開始した神戸での 7 年間について考察する。この時期の主たる活動成果は、のちの神戸女学院となる「女学校」の創立とされているが、それだけではなく、すでに地域女性への伝道活動を行い、監獄訪問にみられる社会改良に繋がる活動、同僚女性宣教師に協力して日本人女性の伝道者(バイブル・ウーマン)養成も始めていたことを確認した。第 4 章では、岡山ステーションに転任したタルカットが地域女性への伝道を熱心に行い、神戸とは異なったスタイルの伝道活動を成功させていたことを示した。その背景には岡山の地域事情、自由民権運動との関わりがあった。また医療伝道と孤児院支援によって、さらに踏み込んだ社会改良活動を進めていたことも明らかにした。第 5 章では、京都ステーションに転任して京都看病婦学校で看護婦志望者のキリスト教教育にあたり、さらに日清戦争時の広島において陸軍病院で活動したタルカットの、同時期の女性宣教師には例のない伝道活動について考察した。京都看病婦学校で教鞭を執る傍ら、タルカットは同志社病院でも職員や患者に対する感話を定期的に行い、教え子を伴って近郊への伝道に出かけた。そして広島では、京都看病婦学校の関

係者との協働に加えて神戸の女学校卒業生の甲賀ふじの協力を得て当地での活動の幅を広げることができた。看護と医療の現場での伝道という、神戸とも岡山とも異なる伝道環境でのタルカットの活動について考察し、そのなかで特に男性を直接の伝道対象とした点も特徴として指摘した。第6章においては、日本派遣宣教師としては異色の経験となる、ハワイでの日本人移民伝道と、それに先立つ長期の休暇中のアメリカでの活動について考察した。タルカットは11年ぶりの休暇を得てアメリカに帰国、その期間は4年に及んだ。本国アメリカでの長期にわたる休暇中に、タルカットは日本伝道の現状について各地で講演し、ABCFM 関連団体で女性宣教師を支援するウーマンズ・ボードの機関誌に投稿するなどしてアメリカの特に女性クリスチャンに支援を訴えた。とりわけ日本におけるバイブル・ウーマンの活躍について強調し、自身が日本での活動の中で常に意識してきた日本人バイブル・ウーマンの理想型を示した。このことはウーマンズ・ボードの支援方針とも合致し、かつタルカット自身の伝道経験から得た成果の発揮であることを明確にした。また、ハワイでの伝道活動についてはこれまであまり取り上げられることがなかったが、現地の伝道組織ハワイアン・ボードの記録等を用いてタルカットの活動内容や役割を確認した。さらにタルカットはハワイにおいても神戸や京都での教え子と協働、バイブル・ウーマンとして活躍する彼女らと日本人移民の女性への伝道に注力したことを明らかにした。最後の第7章では、再び神戸を拠点としたタルカットの日本伝道最後の時期の活動について、神戸女子神学校での教育活動、日露戦争との関わり、各地方への伝道を中心に検討した。タルカットの宣教師としてのキャリアの総まとめとなるこの時期は、明治も末期となり日本社会の変容も著しい時期であった。そのようなときに、タルカットは自身の経験を生かした活動を続けながら後輩の女性宣教師や日本女性信徒にその成果を還元し、次世代へ繋ぐ足跡を残したことを示した。

考察のために主として使用した史料は、タルカットが ABCFM 本部に送った書簡および ABCFM 日本伝道関連文書のマイクロフィルム版²¹、ABCFM 機関誌『ミッショナリー・ヘラルド(*Missionary Herald*, 以下 *MH*)』、ウーマンズ・ボード(Woman's Board of Missions)機関誌『ライフ・アンド・ライト(*Life and Light for Woman*, 以下 *LL*)』、ABCFM 日本伝道団機関誌『ミッション・ニュース(*Mission News*, 以下 *MN*)』である。また、『七一雑報』、『基督教新聞』などのキリスト教関係紙や当時発行されていた日米の地元紙など新聞類も参考にした。

註

¹ 本論文においては、ミッショナリー・ムーブメントを地域、対象、方法を限定せず広く伝道活動全般と位置づけている。

- ² Arthur Schlesinger Jr., “The Missionary Enterprise and Theories of Imperialism” in John K. Fairbank, *The Missionary Enterprise in China and America*, Cambridge, Harvard University Press, 1974
William R. Hutchison, *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions*, Chicago, 1987
- ³ Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice*, Macon, Mercer University Press, 1996
- ⁴ 同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869-1890』現代史料出版、1999
David Thelen, “The Nation and Beyond: Transnational Perspectives on United States History” in *The Journal of American History*, Vol.86, No.3, 1999, pp.965-975
Ian Tyrrell, *Transnational Nation: United States History in Global Perspective since 1789*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, 2007 (邦訳 イアン・ティレル著、藤本茂生他訳『トランスナショナル・ネーション アメリカ合衆国の歴史』、明石書店、2010)
- ⁵ Ann Boylan, *The Origins of Women’s Activism, New York and Boston, 1797-1840*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2002. Keith Melder, *Beginnings of Sisterhood: The American Woman’s Rights Movement, 1800-1850*, New York, Schocken Books, 1977. Mary Ryan, *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865*, Cambridge, Cambridge University Press, 1981. Anne F. Scott, *Natural Allies: Women’s Associations in American History*, Urbana and Chicago, University of Illinois Press, 1993 などの研究がある。
- ⁶ Rumi Yasutake, *Transnational Women’s Activism: the United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1850-1920*, New York, New York University Press, 2004. Barbara L. Epstein, *The Politics of Domesticity: Women, Evangelism, and Temperance in Nineteenth-Century America*, Irvington, Columbia University Press, 1981. Ruth Bordin, *Woman and Temperance: The Quest for Power and Liberty, 1873-1920*, Philadelphia, Temple University Press, 1981
- ⁷ Barbara J. Berg, *The Remembered Gate: Origins of American Feminism, the Woman, and the City, 1800-1860*, Oxford, Oxford University Press, 1978
- ⁸ Virginia G. Drachman, *Hospital with a Heart: Women Doctors and the Paradox of Separatism at the New England Hospital 1862-1969*, Ithaca, Cornell University Press, 1984 (邦訳 バージニア・G.ドラックマン著、依田和美編『ホスピタル・ウィズ・ア・ハート 女性のための女性による病院の物語』、明石書店、2002)
- ⁹ Karen Blair, *The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914*, New York, Holmes & Meier Publishers, 1980
- ¹⁰ Ian Tyrrell, *Reforming the World: the Creation of America’s Moral Empire*, Princeton, Princeton University Press, 2010
- ¹¹ John von Rohr, *The Shaping of American Congregationalism 1620-1957*, Cleveland, Pilgrim Press, 1992. Wilbert R. Shenk ed., *North American Foreign Missions, 1810-1914 Theology*,

Theory, and Policy, Grand Rapids, Eerdmans, 2004

- ¹² Robert Pierce Beaver, *American Protestant Women in World Mission*, Grand Rapids, Eerdmans, 1968. Patricia R. Hill, *The World Their Household*, Ann Arbor, University of Michigan Press, 1985
- ¹³ 同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』、教文館、2004
Noriko Kawamura Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909*, New York, Routledge, 2004
小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』、東京大学出版会、2004
- ¹⁴ 田中智子「J. C. ベリーと伝道診療所—兵庫・飾磨県下における地域社会と医療宣教師」同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師』第3章
小野尚香「医療宣教師ベリーの使命と京都看病婦学校」前掲書第8章
同「京都看病婦学校と宣教看護婦リンダ・リチャーズ」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』10章
更井良夫『岡山県の生んだ4人の社会事業家：留岡幸助、石井十次、山室軍平、アリス・ペティ・アダムス』、日本基督教社会事業同盟、1973
Konomi Imai, “The Women’s Movement and the Settlement Movement in Early Twentieth-Century Japan : The Impact of Hull House and Jane Addams on Hiratsuka Raichō”, in *Kwansei Gakuin University Humanities Review*, 17, 2013, pp.85-109
- ¹⁵ 同時期、長崎で活動したメソヂストの女性宣教師エリザベス・ラッセルを事例として扱った、Karen K. Seat, *Providence Has Freed Our Hands” Women’s Missions and the American Encounter with Japan*, Syracuse, Syracuse University Press, 2008 があるが、ラッセル自身が教育のみに関心が高かったこともあり、社会改良の視点は見られない。
- ¹⁶ 越境史とは、従来の歴史研究に用いられた国家単位の一国史の手法に対して、複数の国家あるいは地域の相互交流、交差の成果に着目する歴史研究の手法である。本論文においては、宣教師の本国アメリカと伝道地である日本、さらにはその両方の接点となったハワイを対象としてそれぞれの影響、変容に着目している。
- ¹⁷ 宣教師の男女を区別して表す際、女性に関して従来は「婦人宣教師」と表現されてきたが、近年は「女性宣教師」が一般的である。本論文では「女性宣教師」に統一し、引用文についても「婦人宣教師」を「女性宣教師」と改めた。
- ¹⁸ 現在の神戸女学院の校名は、創立初期には定まったものがなかった。ABC FM 関連文書では Kobe Home、(Kobe) Girl’s School あるいは (Kobe) Boarding School と記されている場合が多く、日本語では女学校（おんながっこう）と呼ばれることが多かった。本論文では、1879年に「英和女学校」と称するようになるまでを「女学校」とするが、1875年の正式開校以前は内容に応じて「私塾」と「女学校」両方を使用する。なお、校名を神戸女学院としたのは1894年である。
- ¹⁹ タルカットに関する主な先行研究は、以下のものがある。
鈴木恒彌・若山晴子「タルカット書簡一訳および註」一、二『神戸女学院大学論集』24巻3号、25巻3号、1978、1979
同「イライザ・タルカット女史略年譜」『学院史料』第4号、1986
渡辺久雄「タルカット女史の鳥取伝道と鳥取英和女学校」『学院史料』第6号、1988

同「京都看病婦学校とタルカット女史」『学院史料』第7号、1989

²⁰ 例えば、ABCFM 関係機関誌の他、ABCFM の年次報告書 Annual Report、ABCFM 日本伝道団の年次報告書 Annual Report

²¹ *Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: ABC 16: Missions to Asia 1827-1919*, Research Publications, Woodridge, ca.1983

第1部 19世紀後半アメリカおよび日本の社会とプロテスタントキリスト教

第1章 19世紀後半の日米社会状況

1. アメリカの社会状況

19世紀アメリカ社会の状況は、南北戦争を境に大きく異なっている。19世紀前半、アメリカは大陸西方の領土を購入や征服等によって獲得、そこに新たに入植者を住まわせて定住を図り、人口や産業が一定の規模に達したところで州として連邦に加えていくという方法で著しい領土の拡張を実現した。それに伴い産業の面では、まず綿工業が1820年代から大規模な工場制へと発展、1830年代には機械工業や鉄鋼業といった重工業が急速な成長を遂げた。そのようななか、1828年に大統領に就任したジャクソン(Andrew Jackson, 1767-1845)の時代は、ジャクソニアン・デモクラシーとして特徴づけられる民主主義の高揚期とされる。これは政治経済だけでなく文化面にも影響を及ぼす広範囲な運動であり、同時期には奴隷制廃止、女性解放、平和、禁酒を訴える活動が盛んに行われるようになった。奴隷廃止運動と平行してみられるようになったのが、運動への女性の進出であった。1848年、ニューヨーク州セネカフォールズで開催された女性の権利大会は、奴隷廃止運動を通して出会った女性たちがリーダーシップを発揮して成功させた、全国規模の集会であった。この女性解放運動からさらに平和運動、禁酒運動へと女性を中心となって展開していった。また1830年代は公教育の制度充実が進んだ時期でもあった。公立学校が設立され、その教員として中流階級の教育を受けた女性が多数採用されることとなった。農業労働や工場労働者以外に、女性が恒常的に職業に就く機会が確保されたのである。1840年代になると、西部への領土拡大はマニフェスト・ディスティニーとして正当化され、カリフォルニアのゴールド・ラッシュと相まってアメリカは大陸内を西に向かって拡大を続けた。しかしこの西部への膨張が、奴隷制度などをめぐって緊張関係が続いていたアメリカ南北地域の対立を深めることとなり、4年にわたって国内が戦場となる南北戦争へと進展したのである。

南北戦争は1865年に終結し、戦時中からアメリカ社会はさまざまな面での変化を経験することとなった。特に、女性の社会進出という点については、男性が戦場にかり出されたことによりその補充という消極的な理由からではあるが、女性が就業できる職種が増え、結果として職業に就く女性の増加をみることとなった。また南北戦争期には、銃後の女性の組織として大都市に衛生委員会が置かれ、そこに参加する女性たちは看護婦のような役割から軍隊の必需品の調達、兵士と家族の連絡など、さまざまな場面で活動した¹。南北戦争期に力を発揮した女性たちは、組織運営に関するノウハウを手に入れ、さらに自立して活動してゆく自信を深めた。

1860年以降20世紀初頭までの40年の間に、アメリカは世界第一の工業国となり、

工業諸分野での技術革新が進むとともに交通網が発達、19世紀末には大陸横断鉄道の数は5本となった。商工業の発展によって、それを基盤とする都市も急速に拡大し、人口2,500人以上の都市人口は20世紀初頭に40%に達した²。アメリカ社会は大都市と大企業、全国市場が中心となり、さらなる発展への期待が高まる一方でかつての伝統的な生活様式や価値観が動揺する事態が生じることとなった。

大都市では、工業化に対応する莫大な労働力が必要とされた。その不足を補うために男性だけでなく女性や子供も労働力として期待され、長時間・低賃金での労働を強いられる状況であった。また、初期にはヨーロッパから、のちには中南米、アジア圏からアメリカに渡ってきた数多くの移民も、労働力として取り込まれた。厳しい条件の下での労働は人々を疲弊させ、さまざまな社会問題が生じる原因となった。飲酒、女性問題、子供の教育、衛生、医療さらには低賃金による貧困がもたらす諸問題が都市住民の生活を圧迫し社会全体の不安が増幅されたのである。

1890年、フロンティア消滅が宣言されると、国力を増し膨張を続けてきたアメリカは世界的な帝国主義の流れも相まって、国外への発展に向かうようになった。1898年の米西戦争によってグアムを獲得し、同時期にフィリピン、ハワイを併合したアメリカは、アジア進出の拠点を確認し世界進出へと向かうこととなった。

2. アメリカプロテスタントキリスト教の状況

アメリカ史のこのような流れの中で、プロテスタントキリスト教はどのような位置を占めてきたのだろうか。19世紀のプロテスタント史における重要なトピックとして、ミッショナリー・ムーブメント（伝道運動）があげられる。ミッショナリー・ムーブメントはその時期によって異なった性格を持っている。すなわち、19世紀前半まで、南北戦争以前の時期のミッショナリー・ムーブメントは主としてアメリカ国内のフロンティア地域を対象とし、フロンティアへ進出する開拓者あるいは少数の先住民への伝道活動であった。しかし19世紀後半、南北戦争後の混乱がおさまるなかで国内での伝道活動の進展が頭打ちになると、伝道への熱意は海外へと向かうこととなった。これは、アメリカ史上の国家的膨張の時期と重なっている。西部開拓の理論的裏付けであったマニフェスト・ディスティニーは、フロンティアが大陸西海岸に到達した後は、アメリカが太平洋を越えて拡大を図るためのスローガンとなった。

この19世紀後半に展開したミッショナリー・ムーブメントにおいて特徴的な事象として、中心となって活動したのが独身女性宣教師であったことがあげられる。海外伝道それ自体は19世紀前半から組織だっで行われていたが³、当初、実際に伝道に関わる女性は宣教師夫人に限られていた。宣教師夫人らは伝道地での家庭生活を支え、伝道地の人々にクリスチャン・ホームの見本を示した。さらに、宣教師夫人は男性の宣教師が簡単に接することが難しい場合のある、伝道地の女性や子供に、日々の生活を通して恒常

的に交わることができた⁴。宣教師である夫の赴任先において、宣教師夫人は自分の家庭に係る役割だけでなく、知らず知らずのうちに伝道地の人々に間接的な伝道活動をする、という役割も果たすことになっていったと言えよう。

しかし、宣教師夫人には家庭生活の維持、育児、家族の健康管理など配慮しなければならないことが多く、伝道活動に深くかかわることは事実上困難であった。その状況を改善するためには、そうした層に容易にアプローチできる宣教師側に女性の力が必要であるということになる。こうしたアピールは、伝道地の宣教師夫人からも届けられた⁵。そこで、伝道に専念できる独身の女性宣教師が求められるようになったのである⁶。このような状況は、後述するように ABCFM 日本伝道の現場においても起こっていた。ABCFM では早くも 1830 年代に独身女性宣教師を海外伝道に送り出し、以後その数は増していった。独身女性宣教師の数は年代や伝道地の状況によって異なるが、日本伝道においては女性宣教師の数が男性宣教師を上回る状態が長く続いた。

また、アメリカの女性クリスチャンは、献金を捧げて海外伝道の支援を早くから行ってきた⁷。海外伝道開始当初から、宣教師の旅費を補助するなど、グループでまとまった額の献金をしていた。この活動はやがて女性による伝道支援団体へと発展してゆくのである。ABCFM の場合、それはウーマンズ・ボード (Woman's Board) と称する団体であった。この団体の組織については後述するが、初期のウーマンズ・ボードは、4つの基本方針を打ち出していた⁸。第一に、女性が必要としていることに応えることを最優先すること、すなわち伝道地にある独身女性宣教師を支援し、伝道地で、有能なバイブル・ウーマン (Bible Women) が得られるようにすること。第二に、ABCFM への支援を減らさないように基金運営をすること。第三に、支援は個人に対して行うこと。各支部は特定の女性宣教師の特定の事業を支援するように定める。そして第四に、すべての活動が無償の奉仕で行い、経費を節減すること、である。ウーマンズ・ボードは、海外伝道全般を支援するのではなく、特に独身女性宣教師の派遣事業を目的としていた。ウーマンズ・ボードが主体となって、派遣する女性宣教師の選任を行い、派遣のための費用や伝道地での活動費用、給与をまかなうために献金を募った。伝道地での女性宣教師たちの活動を伝えるウーマンズ・ボードの機関誌 *LL* には毎号、その月に各教会がどのミッションのどの女性宣教師のどんな活動に対していくら献金をしたか、が一覧表として掲載されている。海外伝道場で実際に活動する女性、本国アメリカでそれを支援する女性が組織化され、海外伝道という共通の目的に持てる力を合わせて進んでいたのである。

米プロテスタントの伝道活動がアメリカ西部や海外へと広がっていた同じ時期、東部や北部では大都市の形成が進み、都市におけるさまざまな社会問題が深刻化していた。このような社会問題に対し、当時の米プロテスタント教界はどのように対応したのか。現実社会に救いを必要とする多くの人々が出現する状況に、教義として個人の魂の救済

を説いてきた米プロテスタント教会にも、個人の救済のみならず社会全体の救済を成し遂げ、社会問題の解決に教会が積極的に取り組まねばならない、という社会的福音 (social gospel) の教説が生まれた。先立つ時期である 19 世紀前半、米プロテスタント教界に起こった第 2 次大覚醒において、信仰の確かさの表現はすでに個人から他者へと向かう傾向にあった。伝道活動やキャンプ・ミーティングといった福音の他者への伝達が始まった。個人の魂の平安もさることながら、他者の救済をも同様に重視するものである。こうした米プロテスタント教界の流れのなかで、19 世紀後半の社会に大量に現れた社会的弱者といわれる人々の救済なくしては、社会の安定、善なる社会が実現されているとはいえない、とする社会的福音の考え方が起こった。その対象となるのは、貧困層の人々、子供、病人、罪人などであり、学校、病院、監獄などが伝道の場所であった。

この新たな伝道場に参加したのは、教会で熱心に活動していた女性たちであった。19 世紀後半、米プロテスタント教会では「女性の時代」と称されるほど女性信徒が教会での活動に参画していた⁹。特に、都市の中流階級の女性たちは信仰心のあらわれの一つとして教会を通じた慈善活動に参加し、献金を捧げた。女性の社会進出が本格化するにともなって、家庭にある女性も社会活動に参加しようとする意識が高まり、教会での活動がその入り口となっていたのである。

女性の社会活動への進出は、1820 年代に始まる。東部の大都市では、教会を中心とした女性が独自に運営する女性と子供を対象とした救済事業が興っていた。これらの活動は家庭にあった女性も特別な技量を必要とせず自然に参加できる分野であり、大都市における貧民救済事業の多くを担うものであった¹⁰。これは 19 世紀後半になるとセツルメント運動として、より組織的に展開されてゆく。

19 世紀後半、女性たちの活動は全国的な規模で展開されるようになった。禁酒運動にかかる婦人キリスト教禁酒同盟 (Women's Christian Temperance Union、以下 WCTU) は、この時期のキリスト教信徒女性の社会活動の代表例である。禁酒運動はもともと男性の間で起こった運動であるが、1873 年の女性による酒場占拠事件をきっかけにキリスト教信徒の女性の間で一大運動となって拡大した¹¹。飲酒による害は、キリスト教的道徳規範に反し、また家庭や社会に悪影響を及ぼすという点で、女性たちが団結してこれを改善しようとする恰好の対象となったのである。1874 年に結成された WCTU は第 2 代会長フランシス・ウィラード (Francis Willard, 1839-1898) の力によって全国規模に組織化され、女性によるキリスト教の道徳的社会的改良の成果を示した。また、この運動を通して禁酒法制定の気運が高まり、それは女性の政治への参画、参政権獲得の運動へと発展し、女性の社会的地位の向上をめざすものとなったのである。

19 世紀後半のミッショナリー・ムーブメントと社会改良活動への女性の参画に関連

して、同じ時期に女性が選択できる職業が増加したことにも着目したい。先に見た通り、19 世紀前半、働いている女性の多くは工場労働などに低賃金で就労している貧困層であり、中流階級の女性の職業として認められていたのは、教員であった。1830 年代に始まる公教育制度の充実により、新たに整備された公立学校には教員が多数必要となった。当時、教育機関が整備されるまでは家庭で子供の教育にあたるのは母親（女性）であったため、公立学校で特に低年齢の子供の教育に当たる教員もまた女性が適任との見解が一般的であった。そのため、教育を受けた中流階級女性は、教職に就くことが多くなった。また同じ時期、女性の中等教育機関としてセミナリー（seminary）が設立され、そこに学んだ中流階級の女性が教員となるという流れもできていた。このセミナリー出身者の中には宣教師に志願する者もあり、一定の教育を受けた女性たちが職業の一つとして宣教師を選ぶようになったのである。

前述のように、南北戦争中に女性は銃後の社会でより多くの職業に進出する機会を得た。看護婦¹²をはじめとして、医師、事務員など男性が出征して少なくなった職業にも女性が就いた。女性も、特別な技能を必要とする職業に就く機会ができ、南北戦争後の 19 世紀後半になると自ら専門的な教育を受けて教員、医師、看護婦などの専門職に進出した。このように専門知識を持った女性たちのなかには信仰心が篤く、その知識を生かして宣教師になろうとする者もあった。伝道地からも専門知識を持った女性宣教師派遣が求められるようになり、そのような女性たちにも宣教師という選択の幅が広がったのである。同様に、社会改良の現場も、専門職の女性たちの活躍の場であった。

3. 日本の社会状況

アメリカ史において 19 世紀の転換点になった南北戦争とほぼ同じ時期に、日本では明治維新というやはり大きな歴史上の転換点を迎えていた。1853 年のペリー浦賀来航に始まる諸外国からの開国の圧力と、200 年以上に及ぶ幕藩体制の揺らぎによって、徳川幕府による支配は徐々に崩壊し始めた。幕府、朝廷、諸藩の政治、経済、外交をめぐる争いは各地での武力闘争へと発展、江戸幕府の崩壊と新体制樹立に繋がっていった。大政奉還によって天皇を頂点とする体制を樹立した明治維新政府は版籍奉還・廃藩置県によって旧藩の勢力を縮小し、学制、徴兵制、地租改正のいわゆる三大改革を実施して、新しい国家の急速な近代化を進める基礎を築いた。このうち最初に実行されたのが学制の発布であるが、その背景にはすでに幕末に庶民からの教育要求があったこと、江戸時代に寺子屋が普及して教育機会が提供されていたことがあった。その間、江戸幕府は外交交渉のために何度か海外に使節団を派遣、この使節団が西欧諸国の文明文化を実地に見聞して国内にもたらすこととなった。

一方、1868(明治元)年に五箇条の御誓文とともに掲げられた五榜の掲示の第三札には、「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ」とキリスト教禁教が明示されていた。明治新政

府は天皇を頂点とする体制の基礎として「祭政一致」を掲げ、神祇官が全国の神社を統括して神道を国教化する方針を打ち出していた。その最初の政策は同年の神仏分離令であるが、すでに人々の生活に深く入り込んでいた仏教だけでなくキリスト教についても厳しく排除する姿勢を明確にしたのである。その結果、長崎・浦上のカトリック信徒が西日本の諸藩に配流され、改宗を迫られた信徒が殉教するという事態が起こった。この高札に対しては諸外国からの非難が集中し、1873(明治6)年によく撤去されるに至った。この件にみるように、明治政府は宗教に関してはその自由を権利として認めておらず、その後も長くこの状態は続いたのであった。

きわめて早急に諸改革を進めた明治新政府であったが、1877(明治10)年の西南の役にいたるまで、新しい階級とされた士族の様々な抵抗が続き、維新による社会の混乱に巻き込まれた人々は一揆という手段で窮状を訴え、社会状況の安定は容易ではなかった。しかし明治10年代になると国内情勢が整い始め、内政面では国会開設運動、外交面では不平等条約の改正という重要な課題解決に向かうこととなった。1885(明治17)年、内閣制度が発足し伊藤博文が初代内閣総理大臣に就任した。1889(明治22)年の大日本帝国憲法、衆議院議員選挙法、貴族院令の発布により立憲民主主義の体制が整い、翌1890(明治23)年、第1回帝国議会が招集された。一方、条約改正論議は容易には進まず、1889(明治22)年には改正交渉は頓挫するに至った。この影響で文明開化・欧化主義は色を失い、反動で国粹主義が喧伝されるようになった。翌1890(明治23)年に発布された教育勅語は、特にキリスト教系の教育機関にとっては大きな影を落とすものであった。

1894(明治27)年に勃発した日清戦争は、明治に入って最初の対外戦争であった。朝鮮半島をめぐる長年係争を続けてきた日本と清国は、アジア権益をめぐるイギリスの思惑も絡む中で開戦、この戦いに勝利を収めたことで日本は一躍、国際的な地歩を固めたかに見えた。しかし直後の三国干渉により帝国主義列強の対立に巻き込まれざるを得ず、以後、富国強兵路線を突き進むこととなった。日清戦争の勝利は長きにわたった条約改正交渉を進展させる要因となり、1899(明治32)年、日英通商航海条約以降に成立した改正条約が実施された。またこの年は、宗教をめぐる重要な事項が定められた年でもあった。内務省は省令により宗教の宣布及び堂宇会堂設立に関して氏名等の届け出を義務付けた。さらに私立学校令が公布され、同時に文部省が発した訓令第12号によって公認の学校における宗教上の儀式・教育が禁止されたのである。世紀転換期にさしかかり、明治の日本は国内外の重要課題に次々に直面する状況になっていた。

幕末から明治にかけての時期、日本の女性の立場にも徐々にではあるが変化が生じていた。江戸時代、身分制度、家父長制によって女性の社会的立場には制限が多かったが、男女平等に学ぶことのできる場である寺子屋の普及によって、女性もある程度の学力を身につけることができていた。そのため明治時代に入り学制が公布されて初等教育の制

度が整うと、庶民も男女を問わず一定の教育水準に達することとなった。教育の普及により女性も社会的な関心をもつ機会が増加したものと考えられ、家庭内から外へ、女性の活動の場に広がりが生じはじめた。明治維新によって流入した欧米の思潮も都市から地方へと伝播、自由民権運動のような政治的・社会的な活動に関心を持つ女性も現れるようになっていた。

4. 日本におけるプロテスタントキリスト教の状況

江戸時代、周知のように日本国内にはいわゆる隠れキリシタンとしてカトリックを信仰する人々が存在した。ペリーらの来航により諸外国と条約が締結されて外国人が来日するようになると、まず日本に在留する外国人に対してキリスト教が解禁された。そして1859年、米国監督教会宣教師ウイリアムズ (Channing Moore Williams, 1829-1910)、米国長老教会宣教師ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911)、米国オランダ改革派教会宣教師ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880)、同フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898)、同宣教師シモンズ (Duane B. Simmons, 1832-1889) が来日、プロテスタントキリスト教宣教師来日の嚆矢となった。次いで1861年に米国バプテスト教会宣教師ゴープル (Jonathan Goble, 1827-1896) が来日、ヘボンは横浜に施療所を開き、同年に来日した米国オランダ改革派教会宣教師バラ (James Hamilton Ballagh, 1832-1920) は横浜居留地内で聖書講義を開始した。バラは1865年に日本最初のプロテスタントの洗礼式を行い、1872 (明治5) 年には日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会設立に立ち会った。これらの宣教師らが横浜、長崎、東京で活動の範囲を広げるなか、1869 (明治2) 年に ABCFM 宣教師グリーン (Daniel Crosby Greene, 1843-1913) が横浜に来航した。グリーンは後述するように神戸を伝道の拠点と定め、活動を開始した。その後もプロテスタント各派の宣教師来日が相次ぎ、大都市、開港地を中心にプロテスタント伝道が行われるようになった。この初期のプロテスタント伝道の特徴として強調されているのが、プロテスタント各派が協力して活動していたという点である。先に述べた日本最初のプロテスタント教会は無教派で、その設立と同年に各派合同で開催された第1回宣教師会議では、新約聖書の共同翻訳と讃美歌編集事業の開始が決議されている。

教派協力的に始まったプロテスタント日本伝道であるが、その活動は伝道のみによる信徒の獲得から出版、教育、医療、看護、社会福祉といった伝道と結びついた諸事業へと展開した。特に女子教育に関しては、早くも1870 (明治3) 年にオランダ改革派教会のキダー (Mary E. Kidder, 1834-1910) が現在のフェリス女学院となる「ミス・キダーの学校」を開き、これに続いて各教派が女子のための教育機関を創設していった。明治初期に官立の女子教育機関設立が遅れていたこともあり、1898 (明治31) 年の時点でも官立の25校に対しプロテスタントキリスト教各派による女子教育機関の数は65校¹³

と、この分野で大きな位置を占めていたことがわかる。

1873 (明治 6) 年、キリスト教禁制の高札が取り下ろされると宣教師の伝道活動は開港地や大都市から徐々に日本全国へと範囲を広げていった。伝道活動により各地に教会が設立され、信徒となった日本人の手で運営されるものも増加した。1878 (明治 11) 年には東京で第 1 回全国基督教信徒大親睦会が開催され、同年には日本基督教伝道会社も設立された。このころ、日本国内は自由民権運動が最も高まりを見せた時期であり、明治政府が欧化政策を進めた時期でもあった。自由民権運動は、平等という思想上の共通点からキリスト教と親和性があり、日本人信徒が運動に関わっている事例をみることができる。欧化政策は多くの日本人がキリスト教に関心を持つきっかけを与え、信徒増加の要因となった。この信徒増加には、同じころにプロテスタントキリスト教界内で起こったリバイバルも影響を与えている。日本人信徒の数が増え、日本人のみで教会を実質的に支えていくことが可能になると、宣教師や海外伝道団体の力によらずに教会や関係事業を運営する自給論が主張されるようになった。そうした流れの中では、各派の組織や合同の再編が提案されるなど、次第に日本のプロテスタントキリスト教界独自の体制が築かれ始めたのである。

註

¹ Sydney E. Ahlstrom, *A Religious History of the American People*, New Haven, Yale University Press, 1972, p.679

² 有賀貞・大下尚一編『新版 概説アメリカ史』、有斐閣、1990 年、107 頁。

³ ABCFM の創立は 1810 年である。

⁴ R. Pierce Beaver, *All Loves Excelling: American Protestant Women in World Mission*, Grand Rapids, Eerdmans, 1968, p.53

⁵ Fred Field Goodsell, *You Shall Be My Witness*, Boston, ABCFM, 1959, pp.156-157

⁶ Beaver, op.cit., p.54

⁷ 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』、東京大学出版会、1992 年、44 頁

⁸ Goodsell, op.cit., pp.161-164

⁹ すでに 18 世紀末から 19 世紀にかけて起こった第二次大覚醒の時期から、女性の教会活動への参加は増加していた。当時のアメリカ中流階級女性のジェンダー概念形成、キリスト教との関連については以下の先行研究がある。Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood*, New Haven, Yale University Press, 1977. Ann Douglas, *The Feminization of American Culture*, New York, Knopf, 1978

¹⁰ 小檜山、前掲書、36 頁

¹¹ Ahlstrom, op.cit., p.867-872

¹² 現在では「看護師」とするべきところであるが、本論文では当時の用語として「看病婦」または「看護婦」を用いる。

¹³ 『女学雑誌』第 470 号、明治 31 年、18 頁

第2章 アメリカン・ボードの日本伝道

1. 日本伝道の開始

ABCFM の日本伝道は 1869 (明治 2) 年、宣教師グリーンへの派遣に始まった。ABCFM の創立は 1810 年であるが、最初に宣教師を派遣して現地伝道組織であるミッション (mission) を設立したのは 1813 年、西インドのマラタであった。その後、セイロン、ヨーロッパ、北米先住民対象、ハワイ、トルコ、中国、タイ、インド、アフリカなど世界各地に次々とミッションを開設した。日本伝道は、ABCFM 創立からすでに 50 年以上を経過してから開始されたのである。明治維新直後、キリシタン禁制が続いていたなかでの宣教師派遣であったが、他の伝道地でのノウハウの蓄積があったため、日本伝道は伝道地の研究、伝道の方法の検討などが入念に行われた上で始められた。その結果、ABCFM は他のアメリカのプロテスタント各派よりも日本での伝道開始の時期が約 10 年遅かったにもかかわらず、日本人受洗者数、系列学校の生徒数、神学生数、日本人の伝道者数、日本人の献金額において他派を上回っていた。吉田亮によると、1888 (明治 21) 年のキリスト教日本伝道に関する統計では、日本伝道を行っている海外伝道組織 27 団体のうち ABCFM は前記の各項目で他派をしのいでいる¹⁾。また ABCFM についてみれば、日本ミッションは 1880 年代に入って急激にその規模を拡大、1886 (明治 19) 年には ABCFM の海外各伝道地で最大人数の宣教師を有するまでになった²⁾。

最初の日本派遣宣教師グリーンには、「文書や教育活動ではなく直接的な宣教に従事すること、日本人牧師を育成して現地人による自給独立教会を組織すること、伝道地の決定はグリーン本人が行うこと、日本語習得に励み直接の伝道活動ができるようになるまで聖書や他教科を教えてもよい、他派の宣教師と親睦を保つこと、ボードに恒常的に連絡をすること、ボードの財政使用を会計として正確に履行すること」³⁾ という使命が ABCFM 本部から与えられていた。すなわち、ABCFM が日本伝道開始にあたって目標としたことは、日本人へ直接に伝道を行うことと日本人による教会の設立運営であった。従って、日本人に対する教育については伝道にたずさわる牧師養成に特化され、そのための教育施設であるトレーニング・スクール (training school、伝道者養成を目的とする学校) の早期設立のみが認められていた。

グリーンは来日すると、すでに他派の宣教師が伝道を始めていた東京、横浜ではなく、神戸に拠点を定めた。グリーンに続いて 1871 年にギューリック (Orramel Hinckley Gulick, 1830-1912)、デイヴィス (Jerome Dean Davis, 1838-1910)、72 年にベリー (John Cutting Berry, 1847-1936)、ゴードン (Marquis Lafayette Gordon, 1843-1900) が夫妻で来日、神戸、大阪、京都で活動を開始した。彼らの来日時にはキリシタン禁制は解かれておらず、活動の範囲は限定されていたが、1873 (明治 6) 年に切支丹禁令の高札が取り下ろされると、市中へ出て本格的な伝道につながる活動に着手した。

2. 日本伝道の展開

ABCFM のジャパンミッション (Japan Mission : 日本における伝道組織、以下日本伝道団とする) は、1872 (明治 5) 年に第 1 回年次総会 (Annual Meeting) を開催した。年次総会は日本伝道団のメンバー全員による年一回の会合で、役員を選出ほか重要事項の決定や諸報告がなされるものである。ABCFM 自体も年次総会によって支持者からの意見聴取、伝道に関する諸決定を行うという形態をとっている。

日本伝道団第 1 回年次総会では伝道団の規約 (Constitution) が定められ、以後はこの規約に基づいて活動を進めることとした。規約は、その後の伝道活動の拡大に伴って実情に沿うように改訂された。1874 (明治 7) 年の年次総会では、規約の中に、「女性宣教師の事業に関する議題には伝道団所属の独身女性にも投票権を与える」⁴ という条目が追加された⁵。このことは、日本伝道団の活動に独身女性宣教師が大きく関わるようになっていったことを示しているといえる。

また、日本伝道団の委員も年と共にその種類が増加している。日本伝道団創設当初は議長、書記、会計などの基本的な役割分担であったものが、1870 年代のうちに出版委員、学校訪問委員、聖書及びトラクト協会通信委員、各ステーション (Station : 各地の伝道拠点) の会計が付け加わり、1880 年代に入ると伝道事業委員、建築委員、業務促進委員などのようにますます細分化した⁶。これは派遣宣教師の人数の増加のためでもあるが、同時に、日本伝道団の事業が伝道を基本としながらも多様な形態をとるようになり、また日本国内各地に着実に伝道の基盤を作っていたことを表していると考えられる。

ABCFM 日本伝道団のステーションは、まず神戸に置かれ、その後、前述の第 1 回年次総会を開催した 1872 (明治 5) 年には京都と大阪に新しいステーションを開設した。以降、独身女性を含む宣教師が次々と派遣されるようになり、京阪神の 3 ステーションから各地への伝道、教育機関の開設、日本人の公会 (教会) 設立へと展開した。

3. 女性宣教師の派遣

伝道開始当初は既婚男性宣教師が派遣された日本伝道団に、1872 (明治 5) 年、ABCFM 本部から独身女性宣教師派遣の打診があった。それに対して日本伝道団のメンバーは「まとまった人数の女性宣教師を本部が派遣してくれるなら歓迎すること、本部の任用する女性宣教師には伝道団がその受け入れ体制を整える」⁷ ことを同年の年次総会で決議して、ABCFM 本部へ回答した。それを受け、早速 1873 (明治 6) 年にタルカットとダッドレーが着任した。

ABCFM においては、設立以来、伝道地に送り出す女性は宣教師の夫人に限り、独身の女性宣教師は認められていなかった。ABCFM の活動が始まった 19 世紀前半は、前章でみたようにいまだ女性が家庭の外に出て活躍できる場が多くはなく、プロテスタン

ト教会においても、女性は信徒として献金や奉仕活動を通して間接的に伝道活動に関わる状況であった。しかし日本伝道が始まった 19 世紀後半には、女性が職業について社会進出を果たすとともに、クリスチャン女性たちが独自の組織を結成し、社会的な活動に乗り出す機運が高まった。ABCFM によって海外伝道に派遣された女性宣教師を実際に支援したのは、ウーマンズ・ボードと称される、組合派教会 (Congregational Church) の女性団体であった。ウーマンズ・ボードはアメリカでもっとも歴史の古いプロテスタント教派別女性団体で、1868 年にボストンに本部を置き東部諸州を統括するウーマンズ・ボード・オブ・ミッション (Woman's Board of Missions、以下 WBM) と、シカゴに本部を置き中西部諸州を統括するウーマンズ・ボード・オブ・ミッション・オブ・ジ・インテリア (Woman's Board of Missions of the Interior、以下 WBMI) が相次いで設立された。さらに 1873 年にはサンフランシスコを拠点とするウーマンズ・ボード・オブ・ミッション・オブ・ザ・パシフィック (Woman's Board of Missions of the Pacific、以下 WBMP)⁸ が設立され、女性信徒による海外伝道支援団体として、ABCFM と協力して独身女性宣教師派遣に関わったのである。タルカットとダッドレーは、このようにして結成されたばかりのウーマンズ・ボードの支援を受けて日本に派遣された、最初の独身女性宣教師であった⁹。

独身女性宣教師派遣にあたっては、1866 年に ABCFM 総幹事 (General Secretary) に就任したナサニエル・クラーク (Nathaniel George Clark, 1825-1896) の尽力があった。クラークの就任以前の ABCFM では、伝道地においては宣教師夫人が家庭生活によって理想のクリスチャン女性のあり方を示す、という方針があり、また伝道地の治安の問題から独身の女性宣教師を派遣することは避けられてきた。しかし、宣教師夫人が自ら伝道地での女性宣教師の有用性を訴えるようになり¹⁰、女性や子供が伝道対象としてクローズアップされると、必然的にそれに対応する女性宣教師のニーズが生まれた。クラークはこのような流れの中で、ウーマンズ・ボードのような教会の女性信徒の力を結集して女性宣教師を支援する団体を組織して ABCFM との協力体制を構築することが、海外伝道の将来にとって有効であると構想したと考えられる。クラークは就任の翌年 1867 年に団体の設立を提案し、それに呼応したボストンの女性たちによりウーマンズ・ボードが設立されるに至った。日本に女性宣教師が早い段階から派遣された背景にはこのような時宜にかなった団体の創立があったのである。

日本に派遣された独身女性宣教師は、1873 (明治 6) 年に 3 名が着任して以来ほぼ毎年増え続け、宣教師夫人と合わせると数の上では常に男性を上回る人数が活動していた¹¹。しかし、女性宣教師は ABCFM 組織内では男性宣教師と同等ではなかった。女性宣教師は宣教師補佐 (Assistant Missionary) として扱われ、この点では宣教師夫人も同じであった。待遇も男性に比べ低く、先に見た日本伝道団の規約の中でわかるように、伝道団の意思決定の際の投票権にも制限があった。このような状況にありながらも海外

伝道を志して伝道地に派遣される多くの女性宣教師を、経済的にも精神的にも支援しようとするのがウーマンズ・ボードであった。ABCFMの日本伝道は、初期から女性宣教師の力を得ることによって伝道事業のひろがりを実現し、さらにウーマンズ・ボードを通して女性宣教師を後押しする本国の女性や子供信徒の結集は、米国内における海外伝道への関心を高めることにも貢献したと考えられる。

4. 教育事業

ABCFM日本伝道団が手がけた伝道に係る諸事業は、教育、医療、福祉、出版などに大別できる。なかでも教育については、日本伝道開始当初から英語教育の場として事業の萌芽があった。先に見た ABCFM の方針の通り、英語を教えることで日本人と接触し、その後の伝道に結びつけようというねらいである。1872(明治5)年、グリーンらはもと三田藩士の助力により神戸の宇治野町に家を借りて英語学校を開設、英語、聖書と各種教科を教えた。これは地元の青年たちの希望によるもので、英語を学び、キリスト教を通して文明の進んだアメリカについての知識を深めようとするものであった¹²。一方、宣教師たちにとって、英語を教えることは自身の日本語習得の助けになり、日本人と接する機会を確保するためにも格好の手段となった。

しかし1873(明治6)年2月にキリシタン禁制が解かれると、英語を教えて日本人と接触するという学校の目的は、不要なものとなった。ところが、この英語学校で学ぶ者の中からキリスト教を求道する者が現れ、英語学校としての存在意義は失われたものの、キリスト教伝道者養成の機関へと転換できる可能性が生じてきた。本来、ABCFMは日本伝道団の教育事業の中心は学校教育ではなく伝道者養成を目的とした教育としてきたところから、教育事業は京都ステーションへ場所を移して同志社の創立へと発展していった¹³。

その一方で、この英語学校は、女子教育という新たな方向へ向かうこととなった。来日後すぐにこの英語学校で教鞭をとったタルカット¹⁴と、三田への伝道活動において女性や子供への伝道に携わったダッドレーは、英語学校の消滅と相前後して同じ神戸の花隈村で女子と子供を対象とした私塾を開くことになった¹⁵。タルカットとダッドレーには当初から女性と子供への教育・伝道という使命があったので¹⁶、英語学校を基礎として作られた教育事業の流れが女性・子供対象のそれへとつながっていったことは自然ななりゆきであった。タルカットは1874(明治7)年5月にABCFM本部に宛てた書簡において、女子のための寄宿学校形式の教育機関で、教育と生活全般に宣教師の影響を恒常的に与えていくことの必要性を訴えた¹⁷。これを受けて日本伝道団でも、その直後に開催した年次総会で、日本伝道における女性への伝道は女性が主体的に行い、そのために日本人女性を訓練していくことが必要であると決議した¹⁸。また同時に、それに必要な女性宣教師の派遣と女子寄宿学校の設立についても決議した。このように、

ABCFM の日本伝道においては本部の指示に一部相反するようなかたちであるにもかかわらず、早い段階で女子のための教育機関の設立が始まったのである。この女子教育事業の流れは、京都、大阪の各ステーションでも、それぞれのステーションの事情の相違による形態の違いはあったものの、その後の ABCFM 日本伝道団の主要な事業として行われていくこととなった。その内容も、教育と女性伝道者の養成から女性の社会進出に伴うプロフェッショナル教育の分野へと展開し、後述する医療伝道とセットになった看護教育、また幼児教育を行う学校が設立されるに至った。

5. 女性への伝道

先述のように、日本での伝道活動が本格化するに従って、伝道の対象として家庭にいる女性や子供が注目されるようになった。宣教師の来日直後、関心を持って接触してくるのは主として士族の男性であった。彼らの目的は、西洋文明の吸収、英語の習得などであり必ずしも信仰の対象としてキリスト教をみていたのではなかったと考えられる。しかし、宣教師のもとで西洋の知識や英語を学ぶうちに聖書を読み、キリスト教に関心を持ちやがては信仰へと導かれる者が現れた。そしてその信仰は家族やかつての家来、身近な人々へと広がりを持ち始める。そうした広まりの中で、男性と同様に女性や子供もキリスト教に触れ、信仰の道へ連なるきっかけが与えられることとなった。

キリシタン禁制が解かれ宣教師が各地に伝道に赴くようになっても、伝道先で開かれる集会に女性が出席することは難しかった。そこで、女性への伝道を進めるために女性宣教師が、集会を持つだけでなく個々の家庭を訪問するようにした。タルカットは 1874 (明治 7) 年 5 月 16 日付のクラーク宛書簡に次のように記している。

(略) わたくし共の周囲の家々は、全てわたくし共に門戸を開き、聖書に関する話が、あるいは黙認され、あるいは求められております。¹⁹

ダッドレーもまた、同年 6 月 20 日付書簡で次のように報じている。

わたくし共はしばしば生徒たちの家族を訪れ、友人の数に入れられるようになりました。わたくしは、数か月の間に、わずかではありますが、共に聖書を読むことができるようになり、何軒かの家では、家族たちも一緒に読んでおります。

(略) 当地では、婦人たちを捜しにゆかねばなりません。この人たちは、わたくし共が出向いていって説き伏せませんと、決して出ては参りません。それと申しますのもこの人たちにとりましては、人前で公然と男の方と会合を持つということは、お国ぶりに叶わぬことでございますから。²⁰

各家庭を積極的に訪問しての伝道により、女性宣教師に対する日本人女性の信頼度もしだいに高まったとみられる。ダッドレーは同じ書簡に、さらに次のように記している。

わたくしが三田から戻りました時、二、三の母親がわたくしに申しました—自分の娘たちをあなたに連れて行ってもらいたい、そして自分にできるよりもよく、娘たちを教え導いてほしい—と。また、該地滞在中、日に二度会っておりました少女たちは、泣いて、わたくしについて来ようとさえいたしました。²¹

坂本清音によれば、女性がこのように直接に伝道活動に携わることは、宣教師の本国アメリカでは男性の牧師にしか許されていないことであった²²。しかし ABCFM 日本伝道においては、初期からダッドレーやマーサ・バロウズ (Martha Jane Barrows, 1841-1925) がデイヴィスやアッキンソン (John Laidlaw Atkinson, 1842-1908) ら男性宣教師とともに三田、兵庫、明石、遠くは今治、松山、丸亀、土佐に伝道、各地で女性のための集会を主催し家庭への伝道も行っている。大阪においても、女性宣教師が積極的に市中への伝道活動や家庭訪問に向かった事例が LL に報じられている²³。女性宣教師は、宣教師補佐という立場でありながら実質的には初期の女性への伝道活動のほとんどを担っており、その活動の成果の大きさから、日本伝道団の男性宣教師も一目置いていたとみられる。

こうした女性への伝道活動において重要な役割を担うようになるのが、バイブル・ウーマンであった。バイブル・ウーマンとは、伝道地で言葉や習慣の問題を抱える宣教師を助けて伝道活動を進める働きをなす現地女性である。ABCFM の他の海外伝道地においても、特に男性宣教師の入り行きにくい伝道場面で活躍しており、日本では女性宣教師による家庭にある女性の訪問伝道に力を発揮した。後述するように、日本伝道ではバイブル・ウーマンの養成が一つの事業となっていく。

6. 医療伝道の展開

初期の ABCFM 日本伝道においては、医師の資格を持つ宣教師による医療伝道も重要な要素のひとつであった。ABCFM の派遣宣教師として最初に来日した医師はベリーであるが、引き続きゴードン、テイラー (Wallace Taylor, 1835-1923)、アダムス (Arthur Herman Adams, 1847-1879) と医師の資格を持つ宣教師が次々と着任した。

ベリーは当初、神戸で外国人のための病院 (International Hospital) で医療に従事したが、就任の条件として病院で日本人も恒常的に診察することを提示し、了承を得ていた。そして、彼は病院で日本人も共に毎日の礼拝を守った²⁴。その後 1 年ほどでベリーはその職を辞するが、田中智子によれば、このころベリーは、自身の持っていた総合的な医療施設設立の構想と兵庫県令・神田孝平の企図する兵庫県病院改革計画の進展の

間でその両立を実現させてゆく途上にあった²⁵。ベリーの構想する総合的医療施設は、診療だけでなく医学教育機関、地域の医療センターとしての機能を併せ持ち、その基盤としてキリスト教（伝道）があるというものであった。組織構造の点では、ステーションを拠点として各地に伝道しアウトステーション（outstation：伝道出先拠点）を広げてゆくという ABCFM 日本ミッションの形態と類似しており、その手法を医療の分野で展開したと言えよう。

1873（明治 6）年 7 月から神戸病院（兵庫県病院から改称）に勤務することとなったベリーは、週に 3 日診療を行い、その傍ら医療活動を通じた開拓伝道に力を注いだ。神戸周辺の三田、明石、加古川、姫路へ診療と伝道集会を兼ねて出かけ、地元の医師や教育者と交流をもった。その成果として伝道先に病院が開設され、キリスト教に関心を持つ人々の集団が形成されることとなった。またこのように神戸を中心として展開された医療伝道の手法は、さらに西方の岡山へと展開していった。

医学教育を重視していたベリーは、医師だけではなく協働者である看護婦²⁶の養成についても視野に入れていた。前述の女子への教育事業の流れの一つとして、看護婦のような女性に期待される職業のプロフェッショナル教育が注目されるようになり、看護技術習得とあわせてキリスト教教育も行う専門教育機関が計画されることとなった。この計画は、京都において医学教育を構想していた新島襄²⁷のそれと合致し、新島とベリーは協力して医学教育機関、病院、看護婦養成機関の設立をめざした。

1884（明治 17）年 5 月 19 日付でベリーの発表した “Statement” には、キリスト教に基づく医学校、病院、看護学校設立の趣旨が記されている²⁸。その中でベリーは、看護学校設立の目的を、日本人医師と協力して地域医療にあたることとならんで、バイブル・ナース（Bible nurse）としてキリスト教の真理と慰めを接するすべての人々と共有することであると述べている。このアピールをうけたものとみられる記事が、1885（明治 18）年 3 月の LL に掲載されている。 ”To the young ladies” と題した日本派遣女性宣教師を求める記事で、日本において新たな伝道拠点となるであろう場所がまた、日本女性に対する医療の拠点ともなるであろうと述べている²⁹。

このように、日本ミッションの医療事業は、現実の問題解決に貢献でき、新しい知識としても求められる度合いの高い分野であったがゆえに容易に日本社会に受け入れられ、キリスト教を基盤とする事業であっても抵抗を受けることが少なかったと考えられる。また、女性の職業として看護婦のニーズが高まったこと、看護婦の仕事はキリスト教の精神を自然に反映するものであることもこの分野の伝道事業が伸展しやすかった理由であるといえる。

ベリーの活動は医療分野にとどまらず、社会福祉の範疇に相当する、収監囚人の環境改善にも大きな功績があった。ベリーと神戸監獄の関わりは、前述の神戸病院の助手が囚人の脚気治療に出向いたことに始まる。1873（明治 6）年秋にベリーは神戸監獄を視

察、囚人に対する非人道的な待遇を目の当たりにし、兵庫県令・神田公平に対しその改善を提言した。さらに、各地の監獄の視察が可能となるよう神田に依頼した³⁰。ベリーは大阪監獄も見学し、のちに飾磨、京都の監獄視察と合わせた『獄舎報告書』を提出して囚人の収容環境改善について訴えた³¹。

このとき収監されていた囚人の中から、罪を悔い、キリスト教に救いを求める者が現れた。囚人の渡辺亀吉は凶悪な犯罪者であったがベリーの来訪により改心し、出所後に神戸監獄の用務員となり、のちに岡山においては岡山孤児院の事業に重要な存在となった。

後に述べる ABCFM の岡山伝道では、医療伝道がきっかけとなり社会福祉的な活動が日本人キリスト教信徒の間に起こった。このことから見ると、初期の ABCFM 日本伝道における医療分野の中に社会福祉活動への展開が胚胎していたものと考えられる。

註

¹ 吉田亮「総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』、現代史料出版、1999年、2頁

² *ibid.*

³ 吉田、前掲書、10頁

⁴ ABCFM Japan Mission Minutes of Annual Meeting, 1874

⁵ 吉田、前掲書、13頁

⁶ 吉田、前掲書、15頁

⁷ *ibid.*

⁸ WBMP は、ハワイで 1871 年に組織された Woman's Board of Missions of the Pacific Islands と、アメリカ本土の WBMP が合併して成立した組織である。

⁹ コネチカット州出身のタルカットは WBM 所属、イリノイ州出身のダッドレーは WBMI の支援を受けていた。

¹⁰ Fred Field Goodsell, *You Shall Be My Witness*, Boston, ABCFM, 1959, pp.154-155.

¹¹ 吉田、前掲書、17頁

¹² 茂義樹『明治初期神戸伝道と D.C.グリーン』、新教出版社、1986年、105頁。

¹³ 同上、113頁。

¹⁴ 1873年2月17日付 N.G.Clark 宛 J.D.Davis 書簡

¹⁵ 1873年11月15日付 N.G.Clark 宛 J.D.Davis 書簡

¹⁶ ABCFM Japan Mission Annual Report, 1873

¹⁷ 鈴木恒彌・若山晴子「タルカット書簡一訳および註(一)」『神戸女学院大学論集』第24巻第3号、1978年、83頁。

¹⁸ 吉田、前掲書、42頁。

¹⁹ 鈴木・若山、同上、81頁。

- ²⁰ 若山晴子「ダッドレー書簡一訳および註（一）」『神戸女学院大学論集』第28巻第3号、1982年、65頁。
- ²¹ 若山、同上。
- ²² 坂本清音「ウーマンズ・ボードと日本伝道」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』、現代史料出版、1999年、140頁。
- ²³ たとえば *LL* 1877年2月号371頁には、大阪ステーション所属の女性宣教師ウィーラー (Justin Emily Wheeler, ?-1878) が、子供が小さいため聖日礼拝に出席できない女性の家を訪問して、共に聖書を読んでいる、という報告がある。
- ²⁴ 1872年7月19日付および8月17日付 N.G.Clark 宛 J.C.Berry 書簡
- ²⁵ 田中智子「明治初年の神戸と宣教医ベリー—医療をめぐる地域の力学—」『キリスト教社会問題研究』第52号、2003年
- ²⁶ 現在は看護師という呼称であるが、歴史的背景から本論文では看護婦または看病婦とする。
- ²⁷ 新島襄(1843-1890)は群馬・安中藩士の家に生まれ、1864年アメリカに脱国、アーモスト大学及びアンドーヴァー神学校を卒業。1874年に按手礼を受け、ABC FM 宣教師となり日本に帰国。1875年に同志社英学校を創立。女学校、同志社病院、京都看病婦学校を設立。私立同志社大学設立運動に奔走中、病に倒れ逝去。
- ²⁸ 小野、前掲書、328頁。
- ²⁹ *LL*, March, 1885, pp.94-95.
- ³⁰ John C. Berry, "Prison Reform", *MN*, February, 1910, p.101.
- ³¹ *ibid.*

第2部 アメリカン・ボード女性宣教師イライザ・タルカットの活動

第3章 神戸ー日本伝道最初の7年

1. 来日まで

イライザ・タルカットは、1836年にアメリカ・コネティカット州ロックヴィルの羊毛工場を経営する家庭に生まれた¹。幼少期に両親が亡くなり、1852年に同州ファーマントンのミス・ポーターズ・セミナリーを卒業後、同校で教職に就いた。その後しばらく家庭にあったが、1857年再び同州ニューブリテンのノーマルスクールのシニアコースに学んだ。コース修了後は断続的に教職に就き、1863年に職を辞した。その後、叔母の看病にあたった時期を経て、1872年に ABCFM の集会に出席、トルコ伝道に携わる宣教師の話聞いて海外伝道に関心を持ったという²。所属教会の牧師の推薦を得て ABCFM 海外派遣宣教師に志願したタルカットは、その年のうちに日本派遣を命ぜられ、同年12月2日附で同州ニューロンドンからボストンの ABCFM 本部宛に最初の書簡が発信された。36歳で宣教師に志願するまでのタルカットの生涯については不明な部分が多いが、その中で、セミナリーやハイスクールでの教職や親族の介護経験がある点は、のちの日本におけるタルカットの活動に大きく関係していく。

本章においては、タルカットの ABCFM 日本派遣宣教師として最初の任地となった神戸における活動について、女性への伝道を中心にみる。1873(明治6)年3月に着任してから1880(明治13)年9月に新設の岡山ステーションに移るまで、ABCFM が日本に最初に派遣した女性宣教師のひとりとしてタルカットは日本語学習、前任宣教師の活動の補助を手始めに、英語教室、集会の開催、家庭訪問と活動の幅を広げていった。なかでも英語教室は女子のための私塾となり、さらには女子のための寄宿学校として ABCFM の正式な活動と認められて開校し、現在の神戸女学院へとつながった。着任時神戸におけるタルカットの業績は神戸女学院の創立という点に注目が集まるが、その後のタルカットの40年近い日本での活動において、神戸女学院に直接かかわった期間は長くはない。また直接かかわっていた間も、学校業務以外の伝道活動にかなりの時間を割いていた。そこで、この時期のタルカットの活動の教育以外の部分に着目し、その後のタルカットの日本での活動を方向づけたであろう、女性への伝道の着手について明らかにする。

2. 神戸での活動開始

1872(明治5)年末には、タルカットはジュリア・ダッドレーとともに ABCFM から日本に派遣される最初の女性宣教師となることが決まっていた。生涯にわたって協働することになるタルカットとダッドレーは、1873(明治6)年3月にサンフランシスコ

から横浜に向けて出帆、同月 31 日に神戸に到着した。その直前の 2 月には切支丹禁制の高札撤去が始まっていたが、開港地の神戸においてもいまだ政府による洋教探索が執拗に行われているという状況であった。また、2 人の女性宣教師派遣の連絡が先任の宣教師たちに事前に伝わっていなかったためタルカットは当面の住居がなく、一時的に大阪の O.H.ギュリック家に寄寓することになった。後のハワイ日本人移民伝道に続く O.H.ギュリックとタルカットの関係はここから始まる。

1873(明治 6)年 4 月 12 日附でタルカットは神戸着任の様子を次のように報告している³。

(前略)私たちの今朝の祈祷会のテーマは「女性のための活動」でした。なされるべきことのうちのほんの少しだけに手をつけ始めたところですので、早く準備ができるようにしたいと思っております。(中略)一日の中でいちばん興味深い時間は、毎朝、使用人たちが残りの家族と一緒に聖書を読むために集まる時です。他の人たちもしょっちゅうやってきます。彼らが初めてやってきて、ミスター・デイヴィスの語るキリストの言葉を聞いて驚いたり納得したりする様子を見る時、私は大切な真実に新たに気がつくように感じております。路上で出会う少女たちの多くはたいへん魅力的で、私は彼女たちと早く話してみたいものと待ち望んでおります。ここにいることをたいへんありがたく思い、この暗い国に、祝福された福音の光をあてることができると願っております。

タルカットの神戸での活動は、このように使用人や市井の人々への伝道の興味関心から始まっていった。

C.B.デフォレスト (Charlotte Burgis DeForest, 1879-1973) は、「この時期に日本人の友人を簡単に増やす方法は『誰でも身につけたがる英語』を教えることで、男性だけでなく、少ないとはいえ女性や少女たちも学びたいと思っていた⁴」と書いた。タルカット、ダッドレーはまず、日本人青年と先任宣教師によって設立されていた宇治野英語学校⁵において日本人に英語を教える手伝いをし、来日から半年後の 11 月、女性に英語を教える私塾を開設した。この私塾は旧三田藩士の前田兵藏、白洲退蔵の持ち家を利用したもので、タルカットはこの塾を「24 人の少女と女性のための学校」と報告している⁶。私塾について、1874 年の ABCFM 年次報告書には「ミス・ダッドレーとミス・タルカットのもとにある女子のための学校は、11 月の開校以来、その規模においても有益さにおいても拡大し続けており、現在の在校生は 25 名である。学校の生徒、支援者どちらも関心事がとてもはっきりしているので、我々は神戸に女子寄宿学校を設立する時が到来したと確信した。この学校における宗教的な影響力は最もきわだっている」と記載され⁷、ABCFM が日本伝道において女子教育機関として公認し

た最初の事例となった。そして 1875 (明治 8) 年 10 月、女子のための寄宿学校として正式に開校することになる。

学校教育以外の活動においても、タルカットとダッドレーは日本女性との関わりを深めていた。ダッドレーは特に、神戸での伝道開始直後から宣教師と関係の深かった三田へしばしば伝道に出かけた。1875 (明治 8) 年の ABCFM 年次報告書には三田伝道について次のように記されている⁸。

神戸の 18 マイル北にある三田での働きは、急速に興味深いものとなっている。伝道団は、最も有望な兆しとしてこの地について次のように報告した。「我々の医療者たちが毎月訪れるのに加えて、今年のはじめから三田には時折訪問をしている。そして 9 月からは月 2 回、主日礼拝のためにミスター・ギューリックが訪れている。それ以外の主日礼拝は通常、神戸教会の会員が執り行っている。これに加えて、ミス・ダッドレーは現在 4 か月近くを三田で過ごしており、多くの人々に影響を与えることのできるめったにない機会を得ている。そこでの彼女の女性や家族に対する働きは、家庭にいる人々への影響という点において、伝道団の誰よりも大きい。彼女は 40 人の子どもたちに関わっており、子どもたちに及ぼすキリスト教の影響の効果を考えると驚くばかりである」。このような様々な働きの結果、去る 7 月 27 日に 16 名の会員を以て三田に教会が設立された。

同じ年次報告書には、タルカットの活動について以下のような記載がある。

患者の診察と聖書の頒布を目的とした医療旅行は、播州地方の都市である加古川と姫路に 2 か月に一度定期的に行われてきた。患者は毎回 125 人から 200 人やってくる。伝道は 8 日から 10 日間続く。伝道補助者が医療者を伴ってきて、日に 2 回、礼拝の時を持つ。年間 75 回から 80 回ほどの礼拝を守り、一度の旅行の間に 6、7 日、聖書解説者がつく。ベリー夫人が一度、ミス・タルカットが二度、医療者ととともにこの旅行に参加し、もっとも喜ばしい結果を得た。有能な女性の助け手を医療者が定期的に同伴することができれば、伝道の成果は倍増するであろう⁹。

播州への医療旅行についてはタルカットの ABCFM 本部宛書簡¹⁰でも触れられているが、*MH*に掲載されたベリーの書簡¹¹に、より詳しく知ることができる。

ドクター・ベリーの 10 月 13 日附書簡は、ミッションの女性たちの価値ある働きについて次のように言及している： 「私は、播州への旅行以上に興味深い出来

事をこれまでに話したことはないだろう。ミス・タルカット、ミセス・ベリー、現地のクリスチャン女性一人、男性のヘルパー一人が、私に同伴してくれた。読者に興味をもって読んでいただけるであろうこの旅行は、女性たちが教えることによって特に成果を上げられたものである。彼女たちの一画はいつもにぎわっている。朝の礼拝の直後からお昼まで、そして夕食のすぐ後から夜まで。人の話をよく聞く聴衆、その多くは母親たちだが、彼らに向かって救いの物語が何度も何度も語られる。このことは本当に、この旅行で最も興味深いところである。それほどなので、私はこれから女性の働き手と一緒に、また助けてもらうことなしには内陸の旅行に行きはしないだろう。」

「しかし、彼女らがほかで有用でないわけではない。学校でも病院でも、現地の友人たちの中の病人に親切に接し、家庭訪問でも最も有益な影響を与えている。私には、我々の伝道団の独身女性メンバーほど、役に立つ援助をしてくれる働き手はいないと思われる。そして、日本の教会で素早く収穫を得るには、このような有能な働き手をどんどん増やすことが必要である。今まで以上のご支援をお願いしたい。」

同年の *MH* の別の号には、「CALL FOR MORE WOMEN」と題して、日本伝道団の宣教師アッキンソンの書簡の一部が紹介されている¹²。

日本における「女性による女性のための働き」の領域は広大である。誰がそれをするのか。我々の妻か。我々の妻と、当地の独身女性宣教師か。それは無理なこと。我々の妻は家庭のことで手一杯である。この異国の地での子育ては危険がいっぱいで大変な仕事であり、母親たちの心身に重くのしかかる。独身女性宣教師には学校の仕事があり、そこでの入念な作業は、気力を奪うような気候のこの土地に必要な力のほとんどを消耗させる。デイヴィス兄はもっと男性(宣教師：筆者註)をと求めたが、それにも多くの理由がある。私は、もっと女性(宣教師：筆者註、以下同)をと求めることを余儀なくされる。女性は、宣教師として、他の国ではできないような働きが日本ではできる。ここでは家庭が女性(宣教師)のために喜んで開かれている。男たちも、女性(宣教師)が女たちに語ったことばを聞く。彼らはおそらく常に聞いているのだが、しばしば目に見えないところにいる。しかしミス・タルカットとミス・ダッドレーは、襖越しに多くの男に語りかけることができている。女性(宣教師)は数多くのよい牧会ができる。もし永続的によい環境が保障されるなら、ぜひなされなくてはならない業である。だから兄弟よ、送るならもっと女性(宣教師)を。

ここに見るように、タルカットとダッドレーの働きは特に女性への伝道について非常に有効だったことが日本伝道団で認められ、ABCFM 年次報告に取り上げられることによって ABCFM 全体に周知されるに至った¹³。その結果、ダッドレーの従妹のパロウズが新たに女性宣教師として神戸に赴任することとなった。

翌 1876 (明治 9) 年の ABCFM 年次報告書では、神戸での新しい活動として以下の記載がある。

活動を新たに特徴づけるものとして、家庭訪問を定期的に行うために 4 名の女性が雇われた。そのうち 2 名は無償で引き受け、2 名は少額の報酬を受け取っている。2 名はミス・タルカットの監督下であり、2 名は O.H.ギューリック夫人が指導している¹⁴。

タルカットが播州への旅行に日本人女性を伴っていたことは既に見たとおりであるが、神戸の隣の兵庫への伝道においても力を発揮した日本人女性がいた。三田出身の甲賀ふじである。甲賀は三田藩士の娘で、藩主・九鬼隆義の勧めにより ABCFM 宣教師 J.D. デイヴィスの家庭で働き、タルカットとダッドレーの来日初期からその助け手となった。甲賀はその後、両人と生涯深く関わることになるが、その最初の貢献として兵庫伝道での子どもたちへの働きがあった¹⁵。これらの事例から、女性宣教師とその助け手としての日本人女性が日本伝道にもたらす効果の大きさは、早い段階から特に神戸において男性宣教師の間で実感され、それに対応するべく、日本人女性の公的な採用となったと考えられる。このような状況のもと、宣教師を助けて伝道の担い手となる日本人女性、いわゆるバイブル・ウーマン¹⁶を専門的に養成しようという機運が必然的に高まったといえることができる。

3. 活動の変遷

1881 (明治 14) 年の ABCFM 年次報告書の日本伝道団報告に初めて、「女性のための働き」という項目が掲げられた。「学校」の項に続いて記載されており、「学校」の中に神戸の女学校について次のような報告がある¹⁷。

神戸の女学校には年間を通じて 56 名の生徒が在籍した。うち教会の信徒 16 名、寮費と授業料を払っている者 27 名、校内で教えるか寮母として働く、あるいは宣教師の家庭で働いて寮費と授業料を賄っている者 16 名である。6 名は何らかの補助を受けており、3 名は伝道団から、3 名は個人からである。2 名は完全に補助を受けており、1 名は伝道団から、1 名は個人からである。すべての生徒に教科書と文房具が支給されている。これらの事実から、この学校がどのように維持されて

いるかがわかる。教育の多くはミス・クラークソンが行い、他に京都(同志社：筆者註)の卒業生、兵庫の教会に関係する何人かの男性教師、11 人の上級生が担当している。

続く「女性のための働き」にはこれを受けて次のように記されている¹⁸。

これらの学校における若い女性たちに対する教育の他に、家庭にある女性の精神的な平安のために、個人による直接的な活動も行われている。実際、そうした働きへの求めはとて多く急を要しているので、アメリカ人教師たちは学校業務との関係を保つのが難しくなっている。福音を求める人々、あちこちにおいてそれを聞き入れる準備のできている女性たちに福音を直接示すような奉仕ができることは、壁に囲まれた教室の中に閉じ込められるよりも魅力的に過ぎるのである。そうした奉仕、現地の女性たちにキリスト教教育の利点を描くことのできる女性を育てることの重要性は、見逃されてはならず、またこれらの教師たちの熱心な望みを十分満足させるものである。ミス・タルカットは岡山で、ミス・バロウズ、ダッドレー、ギューリックは神戸ステーションで、さらに大阪の女性宣教師たちも学校業務の時間をやりくりして、心を込めて女性への働きに従事している。

この報告の時点でタルカットは神戸から岡山に移っており、ダッドレー、バロウズも女学校の校務を離れて女性への伝道とバイブル・ウーマンの養成にあたらうとしていることがわかる。これまで見てきたように、神戸では 1874 (明治 7) 年以降女学校の創立・運営と女性への伝道を女性宣教師たちが一手に引き受けて担い、女学校の入学者が増えれば増えるほど 2 つの活動の両立が困難になっていた。バロウズに続き 1877 (明治 10) 年には V.A. クラークソン (Virginia Alzade Clarkson, 1850-1940) が神戸に着任、生徒数が増え続けていた女学校の教育面の整備に手が付けられることとなった。創立当初の、聖書の学びと学科の教育を緩やかに行う体制から、女子の教育組織へと移行していく時期に進んでいたのである。この移り変わりに関して、前任のタルカットらと後任のクラークソンとの間に見解の相違があり、両者の対立から前任者たちが女学校を去ることになったとされているが、1879 (明治 12) 年の ABCFM 年次報告書には次のように報告されている¹⁹。

神戸ホームからは報告がなく、統計が少し記録されている。それによれば年度を通して 43 名の生徒が在籍し、うち 7 名が教会の信徒である。学校はミス・クラークソンの管轄下であり、他の女性宣教師たちは教育の手伝いをしているが、ほとんどの時間を女性のための特別な働きに費やしている。その活動は神戸と兵庫だ

けでなく隣接の地域にも及び、大いに恵まれたものである。

この簡単な記載と、女性宣教師らを平等に評価する表現から、日本伝道団内においてこの問題が慎重に扱われていたことが見てとれる。デフォレストは神戸女学院の75年史である *The History of Kobe College* において、双方の ABCFM 本部宛書簡を引用してこの問題について詳しく記述しているが、その中で「最終的に起こったことを注意深く述べている」として、当時同志社にいた宣教師デイヴィスの本部宛書簡を示した²⁰。

過去2年の間に2, 3回、伝道団のメンバーによって、ミス・クラークソンを母国に帰すか他のステーションに異動させて神戸ホームを去らせようとする動きがあった。神戸ホームには創立者である3人の女性宣教師がおり、彼女らはホームと強く結びついていて、しかしその企ては反対にあった。伝道団の中に、なにかしなくてはならないと思っているメンバーがいなかったからではなく、ミス・クラークソンに独自のやり方で自分の思うとおりの学校をつくるチャンスを与え、他の女性宣教師たちは手を引いた方がよいのではないかと思うメンバーがいたからである。大多数は、伝道団は全員の合意なしに過激な方法に訴えるべきではないと感じており、それで、自然と少数派の要望が明らかになるまで、流れに任せていた。この方法は、ミス・タルカット、ダッドレー、バロウズがこの問題について発言したり行動を起こしたりする気持ちをなくしていくことができる、よい方法であった。彼女らは全員ホームから離れ、学校はミス・クラークソンが望んだとおりの彼女の手にある。そして、我々の卒業生の一人である吉田氏(吉田作彌: 筆者註)が彼女と協働しているので、学校は成功するだろう。ミス・クラークソンには、ここでの経験からもっと分別をもってほしいと思っている。そして有能な教師になってほしい。彼女は、そして学校はよい雰囲気の間を持つべきであり、それを必要としている。

こうして女学校から離れたダッドレーとバロウズは、1880(明治13)年10月、花隈村の鈴木タイロウ宅を借りて生徒6名をもって女性伝道者養成クラスを開いた²¹。女子伝道学校(Woman's Evangelistic School)、後の神戸女子神学校の始めである。先に見た ABCFM 年次報告書にある、現地の女性育成とはこのことであると考えられる。このクラスは、ダッドレーの体調不良・一時帰米、クラークソンの病気によるバロウズの女学校応援などのために2年ほどで一時中断を余儀なくされるが、1884年には新たな建物を得て神戸女子伝道学校として正式に開校するに至った。のちにタルカットも教鞭を取ることになるこの学校について、ここで少し見ておきたい。

ダッドレーは、始まったクラスについて次のように報告している²²。

女性たちのためのクラスは小さく、全部でわずか6名ではありますが始まりました。ゆっくり、確実であることが常に安全な道です。私たちは、マタイによる福音書を毎朝、コリント信徒への手紙を週3回午後に学んでおります。同時に、実際的な話をし、機会があれば伝道の働きに出かけております。ほとんどの女性たちは、部分的にはありませんが聖書についてかなりの知識を持っております。将来、必ずや教会でよい結果をもたらすことでしょう。

この最初の生徒6名は全員が既婚者で、未亡人または事情があつて離婚した女性たちであつた²³。神戸や明石といった近隣の者もいたが、今治からも2名が参加していた。四国にはかねてよりダッドレーが伝道旅行に赴いており、それがきっかけとなつたとみられる。最初に伝道者を目指した女性たちが未亡人や離婚経験者であつたことは、当時の日本社会においてこれらの女性たちが、より切実にキリスト教に救いを求める状況にあつたためと考えられる。夫と死別、離婚した女性は家という単位から切り離されてしまい、社会的にも精神的にも全く弱い立場に追い込まれるからである。そのような女性たちがキリスト教に救いを見出し、伝道者として自立の道を歩むこともできれば、まさに「女性による女性のための働き」の実現が可能となると言えよう。

また、女子伝道学校に集まった女性の中には、牧師夫人となる者も少なくなかつた。竹中正夫によれば、女子伝道学校が存在した1880(明治13)年から1941(昭和16)年までの間の卒業生のうち17%が牧師夫人となつた²⁴。初期の卒業生が牧師夫人となるケースが多いのは、女学校も同様であつた。岡本道雄によれば、女学校の1895(明治28)年までの卒業生133名のうち23名が牧師夫人であり²⁵、女子伝道学校と同じ割合となる。女性宣教師が創立した学校において同じような傾向がみられる。女性伝道者養成に力がそそがれつつあつた一方で、牧師夫人として伝道を支える女性も重視されていたのである。

この女性伝道者養成を目指した学校について、ABC FM 日本伝道団は1885(明治18)年の年次報告書において以下のように報告している²⁶。

女性の働きに関して、未婚の女性が学校で学ぶほかにも活動の機会を得ていることを示す最良の事例として、神戸ステーションからの以下の詳細な報告がある。女性の働きーミス・ダッドレーとミス・バロウズはこの活動に全力を注いでいる。近隣の教会や離れた場所への伝道旅行における継続的な活動のほかに、彼女らは5か月の間、学校を運営している。それぞれの家の近くでクリスチャンとしての

働きに自分の時間の全てあるいは一部を捧げたいと思っているクリスチャン女性たちを、5 か月間徹底して指導するためである。

5 か月間の在学期間中の女性は 25 名で、そのうち 15 名は離れたところから来ている。(費用の)援助があるのは 5 名だけで、他は完全に自費で支弁している。6 名は、夫が京都の神学校に在籍している。10 名は学校の近所に住んでおり、通学生である。女性たちは、学ぶことで明らかに大きな利益を得ている。毎日だいたい 3 時間半が新旧約聖書の学習に充てられる。また自然神学、生理学、衛生学、実用化学の講義が行われ、これらの科目はそれぞれ、神戸の女学校の卒業生、兵庫教会の牧師、神戸の公立医学校の教授が受け持っている。

生徒たちは今後のために講義の内容をしっかりと書き留める。一人の例外を除いて、生徒たちは上級の学校で学んでいないので、このようにしっかりとノートを取ることはたいへんな労力を要する。彼女たちは非常な熱意を示し、真摯に勉強に取り組むので、これらの学びが将来の自分たちの働きの助けになるという確信を得た。読んだ聖書の箇所、彼女たちはぴったりと赤インクで注釈をつける。彼女たちは今はちりちりになっているが、学んだことを家庭や近隣で他人のために役立てたいという深く誠実な願望を持っていることが証明されている。この女性たちの多くは、キリストの大きな刈り入れの場で無償奉仕者となることである。

女性宣教師たちの働きは、家庭においてキリスト教を浸透させるに極めて重要である。日本の女性たちは、また男たちも、他人にはめったにしないのだが、彼女らに心を開き自分たちの罪や悲しみを打ち明ける。救われて高揚したたくさんの女性たちが、女性宣教師が与えられた善意とめぐみに感謝している。彼女らによって祝福された家庭は決して少なくはない。この崇高な働きのために、もっと多くの女性宣教師を送ってほしい。

ダッドレーとバロウズの働きに関する詳細な報告が ABCFM 本部に対してなされており、日本伝道団が家庭や近隣社会で活躍できる女性伝道者の養成および女性宣教師の働きの重要性を強く訴えようとしていたことがわかる。

4. 小括

Noriko Kawamura Ishii が指摘したように²⁷、タルカットは当初から、日本社会にそぐわない過度に西洋化した女性を育てることがないように気を配り、まずは、妻や母として当時の日本社会において女性が果たす基本的な社会的役割を全うし、家庭を通してキリスト教を広めていくクリスチャン・リーダーを育てることが、この時点での日本女性への伝道の最良の方法と認識していた。家庭婦人として信仰を守り、教会で

の活動に励むあり方は、女性宣教師を海外伝道に送り出したウーマンズボードを組織運営したアメリカの女性たちのそれと重なる。タルカットは、いまだ家庭から出ることの難しい場合が多い日本の女性の現状を理解しつつ、本国アメリカの女性たちの信仰生活をモデルとして、日本女性への伝道活動を進めようとしたと考えられる。神戸での活動を通してこのような知見を得たタルカットは 1880 (明治 13) 年秋に岡山に転任するが、状況は神戸とは異なっていた。次章では、岡山においてタルカットが展開した女性への伝道活動について検討する。

註

- ¹ タルカットの生涯に関しては、MM1911 年 12 月号(タルカット追悼記念号)、タルカットの妹ローラ(Lora E. Learned)による *Eliza Talcott, The Florence Nightingale of Japan*, Pioneer Series, Boston がある。また、神戸女学院第 5 代院長 C.B.デフォレスト(Charlotte Burgis DeForest)が作成した史料集 *Eliza Talcott, Founder of Kobe College*, Kobe College, 1919 にはタルカットについての各種の史料がまとめられている。この史料集については、渡辺久雄「デフォレスト先生と史料集」『学院史料』第 4 号、1986 年、4-11 頁に詳しい。さらに、タルカットを含め同時期の神戸女学院について女性宣教師を中心に幅広く考察した研究として Noriko Kawamura Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909*, Routledge, 2004 がある。
- ² 学齢期から宣教師に志願するまでのタルカットについては、註 1 史料のほか飯謙「来日以前のイライザ タルカット - 新史料」『学院史料』第 24 号、2010 年、23-34 頁。
- ³ 1873 年 4 月 12 日附神戸発
- ⁴ C.B.DeForest, *The History of Kobe College*, p.2
- ⁵ この英語学校については創設に参画した 8 名の日本人の一人、松山高吉が自筆した『旅日記』に記述がある。溝口靖夫『松山高吉』に採録。
- ⁶ 1874 年 5 月 16 日附神戸発
- ⁷ 64th Annual Report of ABCFM, October, 1874, p.60
- ⁸ 65th Annual Report of ABCFM, October, 1875, p.58
- ⁹ *ibid.*, p.60
- ¹⁰ 1874 年 12 月 1 日附神戸発
- ¹¹ *MH*, January, 1875, p.17
- ¹² *MH*, July, 1875, pp.198-199
- ¹³ 67th Annual Report of ABCFM, October, 1877, p.66 においては、日本伝道団の報告の中に「学校—女性たちの働き」として 1 項目が設けられている。そこではゴードンが特に神戸と兵庫での女性宣教師の活躍ぶりを次のように報告している。
「兵庫の教会の設立に集まった 16 人のうち 11 人が女性だった。これは、通常、キリスト教信徒の多くが男性である日本においては特筆すべき数字である。この例外的な出来事は、ミス・ダッドレーと当地の女性宣教師たちの努力のたまものである。これらの事実にかんが

み、日本伝道団は去る4月の臨時会合において、すでに京都のために願ひ出ている4名に加えて大阪に2名、神戸に2名の女性宣教師派遣要請を決議した。」

¹⁴ 66th Annual Report of ABCFM, October, 1876, p.76

¹⁵ 1875年11月20日附 N.G.クラーク宛 J.L.アッキンソン書簡

¹⁶ バイブル・ウーマン(Bible Woman)の語が ABCFM 日本伝道団の関係文書に登場する最初は、1876年の神戸ステーション年次報告である

¹⁷ 71st Annual Report of ABCFM, 1881, p.75

¹⁸ *ibid.*, p.76

¹⁹ 69th Annual Report of ABCFM, October, 1879, p.77

²⁰ DeForest, *The History of Kobe College*, p.13. 1880年8月7日附 N.G.クラーク宛 J.D.デイヴィス書簡

²¹ 聖和史刊行委員会編『THY WILL BE DONE 聖和の128年』、関西学院大学出版会、2015年、22-23頁

²² 1880年12月3日附神戸発

²³ 『神戸女子神学校五十年記念』、神戸女子神学校、1930年、2-3頁

²⁴ 竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』、教文館、2000年、33頁

²⁵ 岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院－婦人宣教師の教育活動とその影響について－」神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史 各論』、神戸女学院、1981年、222頁

²⁶ 75th Annual Report, October, 1885, pp.74-75

²⁷ Noriko Kawamura Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909*, Routledge, 2004, pp.92-93

第4章 岡山における活動

1. ABCFM の岡山伝道とタルカット

ABCFM の岡山伝道は、1875(明治8)年、医師でもある宣教師テイラーの岡山県病院への招聘にその始まりを求めることができる。*MH*に掲載されたテイラーの報告には、「地元の医師らと連絡をとり、県で三番目に位置する役人により、内陸部への旅行許可をとることができた。(中略)医療伝道活動によって、新規開拓を見込んでいる¹⁾とある。しかし、このテイラー招聘は契約期間が短く、妻子の居住の許可も下りないというものであったため、これをきっかけにしての伝道開始には至らなかった²⁾。その後、神戸ステーション所属の宣教師らが岡山まで足を伸ばし、森田久万人、金森通倫ら同社卒業生の日本人伝道者がこれに加わって活動した³⁾。岡山での宣教師居住の許可が下りるまで、岡山への伝道はこのような形式で続けられていた。

この間、岡山とキリスト教を結びつけることとなった重要な人物の一人として、県の役人であった中川横太郎の存在があった。守屋友江によれば、前述のテイラーの報告にある「県で三番目に位置する役人」が中川のことであり⁴⁾、この点から中川が ABCFM の岡山伝道を実現させる最初の足がかりを作ったといえる。中川自身は終生クリスチャンにはならなかったが、彼の妻ゆきはのちに岡山教会が設立された際、最初に受洗し、妾の炭谷小梅はタルカットとの出会いによってキリスト教に導かれ、バイブル・ウーマンとして活躍し、石井十次の岡山孤児院の協力者となった。中川は 1875(明治8)年に岡山県令に就任した高崎五六にその手腕を買われ、県の近代化政策に関わっていたとされる⁵⁾。

1879(明治12)年、ベリーの岡山県立病院医学顧問就任により岡山に独立したステーションが開設されることとなり、ベリー、オーティス・ケーリ(Otis Cary Jr., 1851-1932)、ジェームズ・ペティー(James Horace Pettee, 1851-1920)の三夫妻、女性宣教師ジュリア・ウィルソン(Julia Wilson, 1845-?)が初代メンバーとして着任した。ケーリによる最初の岡山ステーション年次報告には、テイラーの県病院就任の失敗によりいったん後退せざるを得なかった岡山における伝道拠点設立が、1878(明治11)年、中川横太郎と神戸ステーションの宣教師アッキンソン、ベリーとの偶然の邂逅により実現に至った経緯が記されている⁶⁾。同じ年次報告には、以下のような記載もある。

1878年11月14日、ミスター・アッキンソンとドクター・ベリーは岡山に至った。彼らは何人かの医師と、医療活動を援助しようという地元の名士たちに会った。その時、ドクター・ベリーは政府に雇われるのではなく私立の病院を作ろうと計画したのである。県令は、そのような計画が岡山で始められることを歓迎し、自分の力の及ぶ限りの援助を約束した。彼はドクター・ベリー以外の2人の宣教師を中等学校の教

師として雇用したいと考えた。

さらに、女性宣教師ウィルソンは訪問看護婦 (visiting nurse) として就任することとなった、との記述もある。

ベリーとケーリ夫妻、ウィルソンは4月に着任、県令の好意で彼の持ち家に仮住まいし、そこで集会を行うことも許された。ケーリは前述の年次報告書の中で、このような扱いについて感謝する一方で、「われわれの働きが、現状の政治体制に敵対するものではないとみなされているのであろう」と分析している⁷。

岡山ステーションの開設については、*MHI*1879年4月号に “The Opening at Okayama” と題して記事が掲載され⁸、神戸、大阪、京都といった当時の大都市以外に開設された日本伝道団第4番目のステーションとして脚光を浴びたことがうかがえる。記事の中には

ミス・ウイルソンには、生徒70名が在籍する女学校の校長から、生徒との関わり、授業時間、聖書の使用などについて彼女の自由にしてよいという条件で、女学校で働いてほしいとの強い招請がきている。日本での伝道の歴史の中で、今回の岡山のように、これほどまでに宣教師の働きが効果的にできるように開かれたところはない。

との記述もあり、女性宣教師への期待が高かったこともうかがうことができる。また、明治12年4月4日附『七一雑報』には、

米國醫師ベレー氏は岡山の病院へ聘せられて去一日當地發足、同宣教師ケレー氏は同地有志者の取立たる學校教師に聘せられて同二日出帆（中略）同宣教師のペテ氏もケレー氏と共に學校に行かれる筈にて（中略）同女教師のウエルソン氏もベレー氏を助けて病院に働く筈にて（中略）何れも五ヶ年在留の許可を受け兼て傳道をされる由

と報じられている。

このように、ベリーの医療活動から始まりステーション開設にまで至った岡山の伝道であるが、翌1880(明治13)年5月の岡山ステーション年次報告⁹には次のような記載が見られる。

穏やかではあるが効果的な活動が、女性に対して行われている。ミス・ウイルソンによって始められた集会は、彼女が体調を崩して続けられなくなったあとも、ステーションの他の女性たちが受け持っている。目下のところミセス・ペティーがこ

の集会を担当し、平均7名の出席者がある。ミセス・ベリーはほとんどの期間、女性のための集会を2つ主宰し、このうちの1つはミセス・ケーリに引き継がれている。平均出席者はそれぞれ10名および7名である。伝道活動の中で最も気がかりなのが、この女性に対する伝道活動である。われわれは幸いなことに、一般的な集会を主導してもらえる何人かの働き手を持っているが、他のステーションでよき力となることが証明された、女性に対する伝道活動は、我々の間ではいまだ展開できていない。宣教師夫人たちはその持てる力を喜んでつぎ込んでいるが、彼女らの時間はほとんどが他にしなければならないことをするために使われてしまい、加えて彼女らのうち2人は日本語を自由に話すことができない。ミス・ウィルソンの病気により、ステーション唯一の独身女性がいなくなってしまった。ボストンの諮問委員会は、我々の元に新たな働き手を送ることをしないと決定したが、そうであっても、宣教師夫人が必要な日本語を習得できるまで待つことは喫緊の助けにはならないであろう。岡山において、女性への伝道の機会が大きく広がっているのはまさに今であり、周辺のいくつかのアウトステーション（ステーション内の出張伝道拠点：筆者註）においても同様である。現在、積極的に活動するにふさわしく、そうしたいという希望を持っている何人かのクリスチャン女性がいるので、彼女らのリーダーとなる人材が求められている。我々が求めているのは、生来の素質があり、指導力に富み、クリスチャン女性に助言をすることができ、同時に、いのちのことばを求めている人々に伝えることのできるリーダーである。この要望にいかにして応えられるのか。我々がこの問いをミッション全体に投げかけたのは、これが単に一人の目の前にある問題ではないことを強く認識してもらいたいためである。この問いが答えられずに放置されることは、ミッションの働きすべてに大きな損害を与えるのである。

ケーリのこの報告をみると、発足したばかりの岡山ステーションですでに女性への伝道が活発に行われ、その任に当たっていたウィルソンの体調不良によって活動に支障を来していることが明らかである。ウィルソンは、同年10月に開催された ABCFM 第70回年次総会記録¹⁰によれば、

ミス・ウィルソンは、体調不良のため伝道への熱意と献身を満足することができなくなり、帰国を余儀なくされた。彼女は伝道活動を再開できないおそれがある。

とあり、1880（明治13）年に帰国、その後伝道の現場に戻ることはなかった。そして、その後任者として神戸ステーションからタルカットが転任することとなったのである。同じ年次総会記録に、“Work for Women”と題して、以下のような記載がある¹¹。

女子のための学校での教育に加えて、家庭にある婦人たちの精神的な幸福 (spiritual welfare) のために、より多くの活動が個別に、直接的に行われてきた。そのような活動の機会はいたるところでみられ、その結果、よろこばしいことに、多くの女性が教会に集まってきた。新しい岡山ステーションで、このような形態の伝道の必要性が高まってきたため、ミス・タルカットは神戸の学校の運営をミス・クラークソンに任せ、この新しい土地に居を移した。

タルカットの岡山赴任は、このような事情のもとに決定されたのである。

1881 (明治 14) 年 4 月の岡山ステーション年次報告¹²において、ケーリはタルカット着任について次のように報告している。

初秋、よろこばしいことに我々はミス・タルカットを新しいメンバーとして迎え入れた。着任以来、彼女はとても豊かで有益な機会を見つけ、十分に利用している。毎週 5 つの集会を開き、家庭訪問をし、アウトステーションへ出かけて関心を持っている女性たちを助け、入院患者を見舞い、等々。他の女性たちも同様の活動をしているが、彼女ほど広範囲にわたってはいない。

また、同じ年次報告の医療伝道に関する項目では、

多くの反対勢力の圧力にもかかわらず、ミス・タルカットに導かれた 2 人の教会員のクリスチャン女性は、牧師と教会役員の手助けを借り、病院がクリスチャンの活動の場としてたいへん実り多いところであるとの認識をもたらした。

との記述がある。前年の年次報告で、女性への伝道のエキスパートを求める切実なアピールを行ったケーリであるが、タルカットの着任によってその状況が一気に改善された様子を報告することができたのである。

タルカットが岡山に転任した 1880 (明治 13) 年秋は、ABC FM の岡山伝道の一つの成果である岡山教会の設立をみたときでもあった。10 月 13 日の設立式にはタルカットも出席しており、当日に受洗して入会した者 27 名と他教会から転入した者 6 名の合計 33 名の会員により、初代牧師・金森通倫のもと、信徒による独立自給を旨として教会は設立された。

同じ時期、岡山ステーションの伝道は、ベリーの医療活動をきっかけとしてのアウトステーション設立というパターンによって進展をみていた。さきにみた 1880 (明治 13) 年の岡山ステーション年次報告¹³によれば、

医療活動の最も重要な成果の一つは、いくつかの近隣の町へ伝道の道が開かれる大きな助けとなったことである。キリスト教にほとんど、あるいは全く関心のない者でも、医療宣教師は歓迎し、のちにいくつかのアウトステーションの歴史に見られるように、福音を説くための入り口となった。

とあり、岡山ステーション開設初期には、宣教師らはベリーの医療活動によって開かれたアウトステーションを足がかりに、あるいはベリーに同行してさらに地域伝道へと向かったと思われる。このようにして開かれたアウトステーションは高梁、西大寺、河辺、下津井、倉敷などである。このうち西大寺は、当初は伝道が困難と考えられていたが、タルカットの訪問によりキリスト教への関心が高まったと報告されている。しかしタルカットは 1882 (明治 15) 年、神戸英和女学校校長クラークソンの病氣帰米により校長代行をつとめることになり、急遽神戸ステーションに転任となる。同年の ABCFM 第 72 回年次総会記録¹⁴には、日本伝道団の岡山からの報告として、

ミス・クラークソンの帰米に伴って、ミス・タルカットは神戸の学校での彼女（クラークソン：筆者註）の役割を引き継ぐために、岡山での重要な働きを中断した。ミス・タルカットがすぐに任を解かれて、岡山に戻ることができるよう期待されている。

とあり、1883 (明治 16) 年 4 月の岡山ステーション年次報告¹⁵には

ステーションのメンバー表に、ミス・タルカットを不在者と記さざるを得ない。彼女を失ったことがどれほどの損失であるか、また女性への伝道がどれだけ打撃を受けていることか。既婚女性たちが一生懸命につとめているにもかかわらず、誰かこの仕事に専念できる人材が非常に求められている。

と記されている。

守屋によれば、この時期の岡山ステーションはメンバーの減少、県外にアウトステーションを開拓するなど、伝道に関して大きな転換期を迎えていた¹⁶。タルカットの転出に続いてベリーも 1884 (明治 17) 年に病院建設の募金活動のために帰米、1885 (明治 18) 年にはペティーが夫人の病氣のため一時帰米する。それに伴って 1880 年代半ばからメンバーの入れ替わりがあり、当初のメンバーで引き続き在任するのは 1886 (明治 19) 年に再来日したペティーのみとなった。ベリーは、募金活動を終えて再来日したあとは京都ステーション所属となったため、岡山ステーションには医療宣教師がいなくな

り、必然的に岡山ステーションの伝道スタイルにも変化が生じることとなった。1882（明治 15）年に神戸ステーションに転任したタルカットはその後 1883（明治 16）年末に賜暇帰米、1885（明治 18）年 9 月に再来日した際はふたたび岡山ステーション所属となるが、この間、岡山ステーションには独身女性宣教師は不在となっており、女性への伝道活動も停滞していたものと考えられる。県外への伝道活動は、鳥取、尾道、三原に視察が行われ、このうち鳥取には引き続き伝道が継続された。1887（明治 20）年 3 月のケーリによる岡山ステーション年次報告には、アウトステーションと県外への伝道として以下のような記述がある¹⁷。

多くの祈祷会、聖書研究会、日曜学校、説教集会、そして特にミス・タルカットらによる家庭訪問が、教勢の維持と拡大に重要な位置を占めている。

伝道旅行については、特にギュリック夫妻が九州方面に時間を割き、また蝦夷地へも足を延ばした点以外は、これまでと同様に続けられた。ミス・タルカットは岡山県内伝道のほかに鳥取に一度出かけた。鳥取では上代氏が熱心な働きをなし、何人かが受洗に至った。

ミスター・ケーリは日向地方に出かけ、高鍋では 7 名が受洗した。この地では伝道者が一人育っており、ここから送られる報告は好ましいものである。

九州については、新たにステーションが設立されることとなり、この報告にあるギュリック夫妻が転任して 1887（明治 20）年に熊本にステーションが開かれた。また、鳥取には引き続きタルカットと 1888（明治 21）年に岡山ステーションに着任したアイダ・マクレナン（Ida McLennan, 1857-1951）が伝道に訪れ、1890（明治 23）年にステーションが開設されるにいたった。

2. 明治初期岡山県の状況

岡山県は 1871（明治 4）年、廃藩置県及び藩府県統合により備前一円を県域として定められ、1876（明治 9）年に現在の岡山県の姿になった。岡山のほか津山、笠岡といった当初の県庁所在地、高梁などが旧藩の城下町で人口の集まる地域である。明治初期の岡山において、特にキリスト教伝道に関連する政治経済的要因として、①初期県令の西洋の新知識に対する理解、②自由民権運動の盛り上がり、③衛生・福祉に対する認識の深さ、などの点が指摘されてきた¹⁸。

明治維新という社会体制の激変のなかで、地方政治については中央政府の強力な統制は急速には浸透せず、実務面ではそれぞれの地方自治体の長の裁量によるところが大きかったとみられるが、岡山県ではキリスト教伝道についてこの点がプラスの方向に働いた。1875（明治 8）年に岡山県令となった高崎五六は、岡山県での地租改正事業進展の

ため、時の内務卿の大久保利通が特に任命した人物である¹⁹。高崎は着任早々、県庁の人事再編を行って県令の指示が迅速確実に実行されるように改革し、立ち後れていた地租改正を断行した²⁰。このような辣腕県令であったが、一方では、前述のテイラーの県病院雇入れ交渉のように早い時期から医療政策を進めるなど、新しい知識や制度の導入には積極的であったとみられる。テイラーの雇用は実現しなかったが、その後、ベリーの名があがった際には住宅の提供、礼拝の承認などベリーの雇用のために好条件をつけ、さらに同僚宣教師のケーリ、ペティーを私立・池田学校の英語教員として雇用してもいる²¹。ベリー自身、岡山の伝道地としての7つの利点の第一に、伝道の計画に対する県高官の好意と協力をあげ、続いて、ケーリおよびペティーの英語教員就任とその学校のキリスト教主義化の公認、自身の県病院顧問就任と伝道活動継続の容認、住宅確保、5年間の契約締結といった具体的な内容を示している²²。田中智子によれば、高崎県令には県の医療体制充実もさることながら、県政刷新諸政策のなかで県病院に対する県当局の優位を確立するという思惑もあったが、結果的には ABCFM 宣教師らにとって諸条件が都合よく整い、岡山伝道を開始しやすくなったことは確かである。

一方、高崎県令は自由民権運動に対しては強硬な姿勢を崩さなかった。『岡山市百年史』によれば、高崎県令は 1879 (明治 12) 年 9 月、全国の県会議員が連合して国会開設を政府に認めさせようという運動を厳しく中止させ、民権運動の沈静化を図った²³。岡山県の自由民権運動とキリスト教の関係については、一色哲の研究²⁴に詳しいが、ちょうど岡山ステーション設立時期にあたる 1879 (明治 12) 年 3 月に岡山県会が開会、県会議員の中には地方の高梁選出の柴原宗助、津山選出の立石岐といった、のちにクリスチャンとなる医師が含まれていた。彼らは医療伝道で地方にやってきたベリーら ABCFM 宣教師の受け入れ先となり、一方で県会議員を中心とした国会開設請願運動にも関わっていた。一色によれば、高梁ではベリーの近代的な医療技術に関心を持った柴原が伝道の間を提供し、その同じ場で国会開設請願にかかる演説会やオルグが行われていた²⁵。1879 (明治 12) 年 11 月 13 日附『山陽新報』には、11 月 4 日から 3 日間、「高梁裁縫校」でベリー、中川横太郎、金森通倫が説教を行い、最終日の 6 日には地元の結社「開口社」の社員の演説に引き続き「岡山谷川達海氏」が国会開設論を演説したとの記事が掲載されている。

また、岡山には 1882 (明治 15) 年 5 月、日本最初の女性結社である「岡山女子懇親会」が結成された²⁶。この結社は女性民権運動家・岸田俊子 (中島湘煙) を招いての講演会に出席した 30 名の女性を中心に約 2 年半にわたって活動したことが知られている。会員の中にはのちに民権運動家として名をはせる景山 (福田) 英子とともに、岡山教会の信徒の石黒織尾、炭谷小梅の名が見られる。その他の会員も年齢層の幅が広く、独身者既婚者の両方が所属しており、社会的階層も一様ではない。当初は自由民権運動への理解を深める集会であったが、しだいに男女平等の実現、女性への教育活動の場へと発

展した。しかしこの結社は、高崎県令の圧力により解散を余儀なくされた²⁷。短期間とはいえ、岡山に最初の女性結社が存在し、そのメンバーにクリスチャンが含まれていたことは注目に値する。クリスチャンという点からみれば、1880(明治13)年設立の岡山教会の初代信徒の中には、山陽自由党員が2名含まれていた²⁸。このうち石黒涵一郎は前述の石黒織尾の夫である。

3. 明治初期岡山県の社会事業

明治初期の日本において、現代の社会改良・社会福祉に相当する概念は、慈善事業あるいは社会事業という用語で表されるが、この時期の社会事業の特色は旧士族・農民の生活困窮層増加に対する事業であり、公的扶助については家族あるいは住民相互の救済が不可能である場合のみ行われる、という方針に基づいていた。赤松力によれば、1874(明治7)年に布告された恤救規則の運用は非常に厳しく、この規則による困窮者の人口1000人あたり救護率は1876(明治9)年で0.1%、1884(明治17)年で0.2%にすぎなかった²⁹。またこの規則の適用には地域格差があったが、岡山県は1884(明治17)年の被救護者総数6,981人のうち705人を占め、最も多い³⁰。岡山県において規則適用者の数が多いのは、この規則が江戸時代に各藩で実施されてきた方法を公認した形をとっていたため、すでに藩政時代に救済制度を持っていた県ではそのまま運用したものであった。すなわち、規則適用者数が多い県は以前から困窮者救済の制度が整っていたことを意味する。

また、公的扶助制度の不足を補っていたのは民間によって運営される慈善事業、社会事業施設であった。岡山県で初めて設立された民間慈善事業施設は、山陽新報社主筆・小松原英太郎らによる岡山協力救貧院である。1879(明治12)年5月14日附『山陽新報』には、発起人が集まり役職および規則を決定した、と報じられている³¹。岡山協力救貧院は松方デフレによる経営難から1885(明治18)年に閉鎖されたが、岡山県下初の救貧事業として他の事業への影響も大きかったものと評価されている³²。

一方、岡山協力救貧院とほぼ同時期に、キリスト教徒により岡山福音救済院が開設されたことが知られている。1884(明治17)年2月26日附『山陽新報』は「今回岡山区紙屋町二〇番地に於て岡山福音救済院と云へるを設置し、専ら世の貧窮困苦、疾病薄命者を救済せらるゝよし。今、其の旨趣及規則、規約を得たれば左に之を掲ぐ。」と報じた後、「岡山福音救済院設立ノ旨趣」と「岡山福音救済院規則」を掲載し、また翌2月27日附で「岡山福音救済院規約」も掲載されている。この「規則」および「規約」から特徴的なものを以下に抜粋する。

「岡山福音救済院規則」第二条 目的

一、本院ノ目的ヲ左ノ三項トス

第一項 疾病又ハ艱難ノ者ヲ訪ヒ、友愛ノ情ヲ尽シテ憤然忍耐ノ精神ヲ起サシム可キ事

第二項 米穀、薪炭、衣類等ノ必需品ヲ以テ貧窮困苦ノ者ヲ救済スル事

第三項 内外科ノ医術ヲ以テ患者ヲ其家ニ、或ハ本院附属病院ニ於テ治療スル事

「岡山福音救済院規約」

第三条 委員

一、本院委員ハ基督教徒ニ限ルヘシ

第六条 書記

一、撰挙方法ハ会計ニ同シ、書記ハ本院ノ諸通信及ヒ救済ノ事務ヲ掌リ、疾病貧困ノ者ヲ訪フテ道ノ話ヲ為シ、凡テ本院ノ救済ニ係ル事件ヲ調査シテ、月報及ヒ年報ヲ製スヘシ

但シ時宜ニヨリ婦人ヲ撰挙スルコトモアルヘシ

第七条 巡察委員

一、岡山市街及ビ近村ヲ区画シテ、毎区巡察委員一名ヲ置キ、貧者或ハ病者ヲ訪ヒ、其情景ヲ書記ニ報道シ、凡テ基督教ノ安慰ヲ以テ、専ラ友愛ノ情ヲ尽ス可キ者トス

ここに抜粋した項目から、岡山福音救済院はキリスト教徒によって運営され、内科外科の診療を行う病院が附属していたことがわかる。また、岡山市及び近郊への巡察を行って、貧困者や病人を訪問することを主要な活動のひとつと位置づけている。さらに、この巡察の実施と報告の作成を担当する書記には婦人が就任することもある、と明記しており、前述した岡山協力救貧院の役員がすべて男性で山陽新報社関係者によって占められていることとは対照的である。しかし、赤松が指摘するように岡山福音救済院については実情がわからず、委員の名も不明である³³。『岡山教会百年史』にも特に記載がなく、同時期の ABCFM 岡山ステーション年次報告にもそれらしい組織についての記述は見られない。設立時期から推し量って、岡山福音救済院に岡山教会の信徒や ABCFM 宣教師が関わっていたと考えられるが、それを証明する史料を見いだすことはできない。

以上のように、明治初期に2つの民間慈善施設が存在し、また藩政時代からの救貧制度確立、県政における早い時期からの病院設立・近代医学受容の動きは、岡山県がこの分野で先進的であったことを示しているといえよう。

4. タルカットの伝道活動 —1880(明治13)年から1882(明治15)年—

タルカットの岡山ステーション在任期間は、途中の賜暇帰米期間を挟んで前半の2年たらずと後半の5年に分かれる。岡山に赴任する直前は自ら創立した神戸の女子寄宿学校で校務に携わっていたが、学校の規模が大きくなり女子の教育機関としての充実が求

められるようになるに従って、学校には女子教育と校務に通じた宣教師の必要性が高まっていた。タルカットは、学校の開校1年後にあたる1876(明治9)年10月18日附でABCFM本部に宛てた書簡の中で、すでに次のように記している³⁴。

わたくし共は、只今、この家におります22名の生徒とこれとほぼ同数の通学生とをかかえております。わたくしは、神戸の娘さんを数名お断りしてしまいました。と申しますのも、市外からの者がもう2名は確実にやって来るようになっておりますし、おそらく、ほかにもまだ居りましょうから。(中略)

わたくしは学校業務を楽しんでおります。けれども時折、どなたか学校を出たての方が勉強を受け持って下さったらどんなにか嬉しいでしょうと考えます。只今ヴァッサーにおります友人が来たがっておりますので、この方に働く用意ができた暁には、まさにわたくし共の待ち望んでいる人となることでしょうと期待をしております。

タルカットが、来日後、女子のための私塾運営と伝道活動の両方に携わってきたことは前章に見たとおりである。来日翌年1874(明治7)年のMHに掲載されたデイヴィスの報告³⁵には、

我々の活動は各方面で熱心に求められている。ミス・ダッドレーは我々の神戸の教会の女性信徒一人と一緒に、三田で12日間すごしたところである。そこでの女性たちの関心の高さはすばらしい。最後の二晩、100人を超える聴衆が集まり、そのほとんどは女性だった。そしてこのことは、ミス・タルカットとミス・ダッドレーがここ神戸の学校と家庭であげている成果とともに、この地では女性のためのすぐれた働きが、女性によってなされるものだということを我々に確信させた。

とあり、タルカットの二元的活動がすでに男性宣教師も一目置くまでに行われている様子がうかがわれる。また、前章に紹介した通りタルカットはベリーの播州への伝道旅行に同行し、ここでもベリーの高い評価を得た。

これらの記事に見られるように、医療という人々の間に入ってゆきやすい手段を持っていたベリーでさえ、タルカットら独身女性宣教師の日本人女性に対する影響力の大きさに驚き、女性への伝道は女性に任せようとする姿勢すら見られる。タルカット自身は、この播州への伝道旅行について、ABCFM本部へ次のように書き送っている³⁶。

わたくしは只今、ベリー博士夫妻と播州への診療旅行に出かけたいと思っておりますが、校務を一週間ばかりギュリック夫人にお預け(もし夫人が引き受けて下さ

いますならば) しておいてそういたしましたものか、決めかねております。
わたくしの思いは、9 月にあちらで会いました貧しい婦人たちにひかれております。
わたくしにもう一度やって来るようにというこの人々の懇願は、単に儀礼的なものではなかったように思えます。

1874(明治7)年12月1日附のこの書簡にある「9月にあちらで会いました」に相当するのが、前述のベリーという「播州地方への旅」であるが、タルカットも当地の貧しい女性たちのことを思い再訪を考えていることがわかる。このように、タルカットは岡山赴任以前からベリーに同行し、病人や家庭の女性たちへの伝道に力を発揮していたのである。なお、この書簡の抜粋は1875(明治8)年4月の *MH* に掲載され、「日本伝道の光の部分」と紹介されている³⁷ところからも、タルカットの伝道成果が ABCFM においても注目されていたと見ることができる。

岡山赴任に先立ち、タルカットは1880(明治13)年4月に岡山へ短期間の伝道を行った³⁸。その後7月5日附で ABCFM 本部へ宛てた書簡でこのことに言及し、また岡山赴任についての感慨を述べている³⁹。

すでにお聞き及びのことと存じますが、クラークソン女史が神戸の学校の全面的責任をおわれることになりました。そしてわたくしは、この秋岡山に参ります。
わたくしは暫時、ここを退いた時に十中八九赴くべき所として、京都に注目しておりました。けれども、出発の用意はすでに整っております。ウィルソン女史が健康を害しておいでのことやパームリー女史⁴⁰が京都入りを志願なされたことが、岡山に参ることにつきましてのわたくしの逡巡に決着をつけたようでございます。このことは、この学校事業をあとにしてゆくということにとどまりません。それは、わたくしの、日本における最初の自立的住家を去ることであり、そうして、数年間共に働いているうちに、わたくしが頼りにすることができるようになってきた人々を去ることでございます。

けれども、わたくしは喜んで出立いたします。岡山には、働き手たちの気持ちの良い会がございます。そしてわたくしは、過ぐる4月に少しばかり、彼の地をそれとなく見に参りました時に予感したことでございますが、この方々はきっと歓迎して下さることでしょう。

前章に見たように、タルカットが神戸在任中に得た伝道活動の成果、それは女子寄宿学校設立だけでなく、ともに活動するクリスチャン女性を育て、その女性たちがクリスチャンとして家庭から社会へと力を発揮してゆくことであった。日本に赴任して最初に育てた神戸の女性たちを見守り続けることができなくなる一方で、岡山にも同じような

場が与えられているとの確信のもとにタルカットは岡山行きを決断したとみられる。当時、岡山ステーションで独身女性宣教師が切望されていたことは先に見た通りであり、タルカットの赴任は願ってもない結論であった。

前半の岡山在任中、タルカットが ABCFM 本部に宛てた書簡は 1881 (明治 14) 年 8 月 23 日附日光発のもののみであり、この書簡の中には岡山伝道に関する具体的な記述はみられない。そこで、この時期の ABCFM 総会年次報告と *MH* 記事からタルカットの活動を追ってみると、まず *MH* 1881 (明治 14) 年 2 月号に、「岡山に教会設立」と題して、日本伝道団からの書簡の引用が掲載されている⁴¹。記事には、岡山教会設立式の模様と並んで、次のような記述がある。

ミスター・ペティーは 10 月 30 日付の書簡に以下のように書いている。(中略)
ミス・タルカットは二人の既婚女性とともに病院を定期的に訪問し、子どもたちからの花を届けたり、福音書や、“The Life of Christ, Pilgrim’s Progress” や『七一雑報』の合冊のような本を貸したりしている。彼女らは機会があれば、患者たちと話をすることもある。

また同年 6 月号には、「岡山—光と影—」として次のような記事が掲載されている⁴²。

ミスター・ペティーの岡山からの 2 月 19 日付書簡では(中略)ミス・タルカットは、将来有望な新しい集会を始めた。その目的は、コリント書の学習を通して、我々の最良のクリスチャン女性の活動力を高めることにある。(後略)

さらに、1881 (明治 14) 年の ABCFM 年次総会記録に、“Work for Women” と題して掲載された日本伝道団の報告については、前に見たとおりである。この年次総会記録には、女性宣教師が学校教育をさしおいて日本人女性への伝道活動に力を注ぐことを暗に戒める表現が見られるが、*MH* に掲載された日本ミSSIONの男性宣教師の記事からは、実際の伝道場においては女性宣教師の活動が女性信徒の獲得だけでなく、クリスチャンとして自立して活動できる女性信徒の養成につながっているという事実を認識してもらおうという意識が読み取られる。このような伝道現場の成果と意識が、ABCFM の中でも次第に公認されるものとなったとみられ、タルカットの神戸応援を報告した 1882 (明治 15) 年の年次総会記録には、前述のようにタルカットの岡山帰任が待たれる旨の表現がなされている。

5. タルカットの伝道活動 —1885(明治 18)年から 1890(明治 23)年—

1882 (明治 15) 年の神戸転任、1883 (明治 16) 年末の賜暇帰米を経て、タルカット

は1885(明治18)年9月に岡山ステーションに再赴任した⁴³。タルカットの不在中、岡山ステーションでは1882(明治15)年に高梁教会、1883(明治16)年に笠岡教会、1884(明治17)年に天城教会の設立を見⁴⁴、またベリーの帰米と京都転任という大きな変化があった。1886(明治19)年4月19日附岡山発のタルカットのABC FM本部宛書簡⁴⁵には

私はまもなく鳥取へ出発しようとしております。岡山を離れるのは容易ではございませんが、鳥取からの私どもへの招請が大きいのです。

とあり、また書簡に笠岡に関連する記述が見られる。しかし、続く8月16日附比叡山発の書簡には

私はミス・ダッドレーの女子神学校の仕事を手伝っており、この冬も、あるいはミス・バロウズが戻られるまで、続けるべきかと存じます。

と記しており、岡山ステーションに戻ったものの、神戸ステーションでも活動する、という状況であったと見られる。このあとタルカットの本部宛書簡は1890(明治23)年4月まで書かれていないが、この間のタルカットは岡山県内への伝道のかたわら、新たに鳥取伝道に携わっていたことは、先に見たとおりである。特に1888(明治21)年秋から翌年にかけては3か月、マクレナンとともに鳥取にとどまり伝道活動に従事している。

一方、同じ期間のタルカットの動静については、『石井十次日誌』⁴⁶によっても知ることができる。石井十次は、日本人キリスト教徒による民間社会事業のさきがけである岡山孤児院の設立者として知られているが、宮崎の出身で岡山県甲種医学校に入学するべく1882(明治15)年に岡山に来た。宮崎で彼に医学の道を勧めた地元の医師がキリスト教信徒であったため、石井は岡山教会を訪ね、1884(明治17)年に金森通倫牧師から受洗した。石井の日誌は1882(明治15)年に始まるが、タルカットの名が最初に現れるのは1887(明治20)年4月3日である。その二日後の4月5日には、次のように記している。

(略) 本日途中偕楽園タルカツ氏に面会教師予に語るにヨハネ伝第十三、十七、の吾人に必用なることを持って予同氏が鋭眼に感服せり聖霊に満たされし人とは蓋し同女教師をいふか

また、石井が岡山孤児院の前身である「孤児教育会」を創設した9月22日の直後9月

25日には、

本日タルカツ女教師にも面會し孤兒教育院のことを話しをけり

とある。以後、「日誌」には特に1887(明治20)年から1890(明治23)年にかけて、頻繁にタルカットの名が現れる。当初、石井はタルカットに主に信仰上の問題を相談していたが、同時にしばしば孤兒院への寄付金や孤兒への学資援助を受け取っている⁴⁷。さらに、孤兒院運営、キリスト教関係者への募金方法などについてもタルカットの意見を仰いでいた。「日誌」にはタルカットが岡山を離れ京都、比叡山に滞在している間にも手紙で相談をしたとの記述があり、石井がタルカットに物心両面にわたり非常な信頼を寄せていたことがわかる。タルカットは1890(明治23)年秋に岡山から京都に転任するが、その後も岡山孤兒院を訪問、また石井も京都のタルカットを訪ねている。

石井に孤兒院開設を決意させたきっかけとなったといわれる、元囚人の渡辺亀吉もまた、タルカットとのつながりがあった⁴⁸。渡辺は幼少時より犯罪を繰り返し、神戸監獄に入っていた1876(明治9)年ごろ、獄中で八木和市という人物に会った。八木は入獄中、病気のため一時神戸病院に入院、そこでタルカットに接し回心したという。八木は再び神戸監獄に戻った際、渡辺の房を訪れ福音を語った。八木によって渡辺も信仰に至り、強盗罪を自白して罪を減等され神戸監獄で働くようになった。渡辺はその後、自身が幼少時に孤兒になり悪の道に走ったため、孤兒が同じような道をたどることがないようにと救済を思い立ち、神戸監獄の吏員をしながら孤兒の世話をしていた。その渡辺に邂逅した石井十次は、医学の道を捨てて孤兒救済を決意し⁴⁹、渡辺も岡山にやってきて石井の孤兒救済事業を手伝うこととなった。

さらに石井十次との関連では、岡山孤兒院の支援者であり彼を常に支え続けた炭谷小梅も、タルカットの岡山での活動をきっかけに信仰の道に入り、その後もタルカットと深く関わりをもった人物である。炭谷小梅は岡山に生まれ、幼少時に両親を亡くして孤兒となった。養親に育てられ若くして常磐津の師匠として身をたてていた。その後、芸者となり先に述べた中川横太郎に身請けされて妾となった。タルカットとの出会いによってキリスト教に接することとなり、信仰について学ぶに従って妾という自身の立場に疑問を抱き、苦慮した末に中川と別れて信仰の道に入ることを決意した。それによって中川との間に生まれた娘とも別れさせられるという不幸にみまわれるが、タルカットの計らいによって神戸に学び、1881(明治14)年、33歳の時に岡山教会において受洗するに至った⁵⁰。中川の側からみれば、自身が岡山に持ち込んだキリスト教が妾の炭谷小梅との関係を全く変えてしまう結果になったのである。炭谷は岡山教会の長老として活躍、タルカットの伝道に同行してその助けとなったことが、石井十次の日誌にたびたび記録されている。また炭谷は先述の岡山女子懇親会にメンバーとして名を連ねており、

キリスト教に導かれたことから妾とは全く異なる人生を歩むことになったのである⁵¹。石井紀子によれば、炭谷小梅は最も有力なバイブル・ウーマンとして活躍、岡山教会においては牧師や宣教師に勝るとも劣らない活動で貢献した⁵²。

岡山孤児院は日本の社会福祉史の上でも先駆的な事業であるが、その設立、運営にはこのようにタルカットの伝道活動が多方面から影響を与えていた。タルカットの岡山ステーション在任後半期においては、前半期におけるベリーの医療伝道との協働が孤児救済という具体的な社会改良活動と結びついてゆくことになった。

6. 小括

タルカットの岡山における伝道活動は、近郊のアウトステーションへの医療伝道を中心とし、かつ、鳥取、四国、中国地方への伝道旅行にもでかけるという形態をとっていた。そして、伝道先では女性のための集会を開き、そこにはタルカットが「貧しい」と表現する層の女性も出席していた。女性のための集会には、常に多くの出席者があったことがステーション年次報告などから明らかである。また、伝道には教会信徒の女性を協力者として伴っていた。岡山での活動においてタルカットは日本人女性の伝道者の養成と、女性の集まりやすい環境の創出を同時に実現していたのである。タルカットが岡山で行った伝道のスタイルは、教会と学校教育を中心とした都市型伝道ではなく、みずから各地の女性のもとへ出かけて行って多様な層の女性と接触しながらリーダーになる女性を育てるといふ、独自のスタイルであると言えよう。

タルカットの伝道に従った信徒女性は独身者ばかりでなく既婚者もいた。女性は、初めから伝道の専門家を目指すのではなく、家庭においても自らが実践者となって役割を果たすこともできるとタルカットは考え、日本の女性に適した、クリスチャンとしての活動方法の一つとして進めていこうとした。また、社会改良という点からみても、伝道活動を通して女性にその意識を伝え、それを受け取った女性たちはリーダーとして他に伝えていくことができた。これは、第1部でみた同時期のアメリカの社会改良の活動に中流階層の女性たちが参画するというスタイルを日本に合ったかたちで生かしている。さらに、現地での伝道者の養成という ABCFM の方針に、女性の伝道者という要素を加えたのである。ここでもアメリカの女性クリスチャンの活動を意識しながら、自身の伝道活動で得た経験から日本の女性のめざす方向を示したとすることができる。

岡山におけるタルカットの活動は、女性による女性への伝道の可能性の開拓に自立支援、孤児院支援など、社会改良というミッションナリー・ムーブメントの特徴となる要素を含み、タルカットはそれを自身の伝道活動の中で実現した。当時、本国アメリカで提唱され始めた社会的福音の思想に基づく、プロテスタント教会による社会改良の流れをタルカットは意識していたと思われる。それを、日本国内では諸条件の揃っていた岡山においてタルカットは展開することができた。本国のプロテスタント教界の潮流を自身

の活動のうちに持ち、伝道地にあったスタイルで結実させるべく日本人女性の助けを得ながら活動を続けたのである。

註

¹ *MH*, October, 1875, p.296

² *MH*, January, 1876, p.21

³ *First Annual Report of Okayama Station*, June, 1879

⁴ 守屋友江「アウトステーションからステーションへー岡山ステーションの形成と地域社会」同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』、教文館、2004年、102頁

⁵ 一色哲「キリスト教と自由民権運動の連携・試論ー岡山と高梁を事例に」『キリスト教社会問題研究』第43号、1994年、150頁

⁶ *First Annual Report of Okayama Station*, June, 1879

⁷ *ibid.*

⁸ *MH*, April, 1879, p.142

⁹ *Second Annual Report of Okayama Station*, May, 1880

¹⁰ *70th Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, Boston, 1880, pp.80-81

¹¹ *do.*, p.20

¹² *Third Annual Report of Okayama Station*, April 1, 1881

¹³ *Second Annual Report of Okayama Station*, May, 1880

¹⁴ *72nd Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, Boston, 1882, p.67

¹⁵ *Fifth Annual Report of Okayama Station*, April 1, 1883

¹⁶ 守屋、前掲書、117頁

¹⁷ *Ninth Annual Report of Okayama Station*, March 31, 1887

¹⁸ 工藤英一『日本キリスト教社会経済史研究 明治前期を中心として』、新教出版社、1980年 守屋、前掲書

¹⁹ 岡山県史編纂掛編『岡山県史稿本 下』、岡山県地方史研究連絡協議会、1967年、89頁

²⁰ 守屋、前掲書、103頁

²¹ 岡山における ABCFM 宣教師と公との関係については、田中智子「明治初期における医学・洋学教育体制の形成とキリスト教界ー岡山県とアメリカン・ボードー」『キリスト教社会問題研究』第54号、25-64頁、2005年に詳しい。

²² *MH*, April, 1879, p.142

²³ 岡山市百年史編さん委員会編『岡山市百年史 上巻』、ぎょうせい、1989年、102頁

²⁴ 一色哲「キリスト教と自由民権運動の連携・試論ー岡山と高梁を事例にー」『キリスト教社

- 会問題研究』第 43 号、134-165 頁、1994 年
- 25 一色、前掲論文、154 頁
- 26 岡山女性史研究会編『近代岡山の女たち』、三省堂、1987 年、25-33 頁
- 27 『岡山市百年史 上巻』、105 頁
- 28 同前。石黒涵一郎は代言人として働き、岡山教会創立に尽力した。山陽自由党に加わり条約改正に際してボアソナードの意見に賛同、文書を配布して投獄された。山陽女学校の発起人の一人でもある。代議士に 4 回当選。
- 29 赤松力『近代日本における社会事業の展開過程－岡山県の事例を中心に－』、御茶ノ水書房、1990 年、8 頁
- 30 同前
- 31 『山陽新報』雑報、明治 12 年 5 月 14 日。同年 11 月 21 日附雑報には高崎県令から三百円の補助金を受けたこと、11 月 28 日附雑報には趣旨と改訂規則、明治 14 年 11 月 15 日附雑報には新たな役員名簿が掲載されている
- 32 赤松、前掲書、25 頁。『岡山市百年史 上』、721 頁。
- 33 赤松、前掲書、32 頁。
- 34 鈴木恒彌・若山晴子「タルカット書簡一訳および註（二）」『神戸女学院大学論集』第 25 巻第 3 号、1979 年、130 頁
- 35 *MH*, October, 1874, p.317
- 36 鈴木・若山前掲論文、85 頁
- 37 *MH*, April, 1875, pp.111-112
- 38 明治 13 年 4 月 23 日附『七一雑報』に、九日金曜日にタルカットが伝道のため岡山へ赴いた、との記事が掲載されている
- 39 鈴木・若山前掲論文、143-147 頁
- 40 Hariette Francis Parmelee(1852-1933)、ABC FM 派遣女性宣教師、1877 年来日、1924 年引退帰米まで日本伝道に尽力
- 41 *MH*, February, 1881, pp.56-57
- 42 *MH*, June, 1881, pp.223-224
- 43 *MH*, November, 1885, p.479
- 44 守屋、前掲書、122 頁
- 45 以後のタルカットの書簡の訳文については、筆者による
- 46 石井友愛記念会編『石井十次日誌』昭和 48 年～58 年、以下「日誌」と略記
- 47 1887 年には 3 回、1888 年には 2 回、1889 年には 3 回、1890 年には 6 回の寄附を受けている。他にも、着物、反物を寄附したとの記述も見られる。
- 48 『渡邊龜吉君自叙傳』「獄事叢書」第二十五号、明治 29 年、128-130 頁
- 49 日本基督教団岡山教会編『岡山教会百年史 上』、岡山、1985 年、24 頁
- 50 同書、40 頁
- 51 炭谷小梅と中川横太郎については、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良」におけるマーニー・S.アンダーソンの基調講演『「ヤソがワシの色女を奪りゃあがった」中川横太郎と炭谷小梅、19 世紀における生の変容』に詳しい。お茶の水女子大学ジェンダー

研究所『国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良」』、2017年、6-18頁

⁵² 同書、25頁

第5章 京都および広島における活動

1. タルカットの京都ステーションにおける活動

1890(明治23)年、タルカットは ABCFM 日本伝道団岡山ステーションから京都ステーションに転任する。これは、京都ステーションの管轄する、京都看病婦学校において、看護の専門教育に加えて行われていたキリスト教教育を担当する人材として請われてのことであった。京都ステーション在任中には京都看病婦学校での教育と近郊各地への伝道にあたった。特に1891(明治24)年に発生した濃尾地震の際は、同志社病院と京都看病婦学校が大垣を中心とする被災地での医療奉仕活動を実施したことに伴い、タルカットも被災者の慰問に赴くこととなった。その後、タルカットは1894(明治27)年に広島を訪問、当地の陸軍予備病院での活動の必要性を見いだす。おりしも京都看病婦学校の関係者がこの病院に派遣されることになったため、タルカットも活動の場を広島に移すこととなった。当時、広島には日清戦争開戦により広島大本営がおかれ、陸軍関係の病院施設が急遽設置されていた。それらの施設には、日本人のみならず捕虜となった中国人兵士を含む多数の傷病兵が収容されている状況であった。この状況に対応するべく、多数の看護婦が必要とされた日清戦争時は、日本赤十字社派遣の看護婦が初めて戦時救護にあたった事例とされている。医療関係者確保のため、各地の日赤支部に対しては医師や看護婦の派遣要請がなされた。日赤京都支部には、同志社創立者である新島襄の夫人、八重が篤志看護婦として奉仕しており、新島八重の指揮のもとに、京都看病婦学校の卒業生らが要請にこたえていち早く広島に向かうこととなった。タルカットも教え子の広島派遣を追って広島入りし、入院傷病兵の慰問などにあたるかわら、派遣看護婦の精神的支えともなり、病院内での伝道活動も行っていたとみられる。タルカットの広島陸軍予備病院における活動は、1895(明治28)年末まで続いたとみられる。

これまで、京都看病婦学校でのタルカットの働きに関しては、特に詳細に取りあげられてこなかった。京都看病婦学校については、岡山寧子、亀山美知子、小野尚香らにより日本の看護教育史における諸研究がなされているが¹、これらの先行研究の中でタルカットの役割や活動についての言及は限定的である。また、同時期に東京に設立された桜井女学校、有志共立東京病院の看護婦養成施設など他の看護婦養成機関については、卒業生のその後の活動に焦点を当てた研究などがあり²、日本看護教育史の視点からの先行研究は多いがキリスト教、女性宣教師といった視点からのものは少なかった。さらに、広島の陸軍予備病院を対象とする研究としては、日赤看護婦の派遣に関する千田武志の論考³のほか、コレラ予防といった医学的見地の先行研究があるが、キリスト教宣教師の活動に言及したものは皆無と言ってよい状況である。

本章においては、タルカットの京都ステーション在任中の活動、とりわけ京都看病

婦学校での働きに焦点を当て、特に、専門的な看護教育でないキリスト教教育の部分
を担ったタルカットの役割、貢献といった面に注目する。さらに、これまで明らかに
されてこなかった広島陸軍予備病院でのタルカットについて整理し、京都看病婦学
校での活動との連続性とその発展という視点からみてゆく。この広島でのタルカッ
トの活動が、当時の多くの女性宣教師が行ってきた教育分野を中心とする伝道活動とは
異なる、看護を通じた社会改良の方向性を持った伝道活動であった点を明らかにした
い。また、タルカットの志向した社会改良と当時のアメリカプロテスタントキリス
ト教会で起こっていた社会改良の関連について検討する。なお、文中では現在の職業呼
称である「看護師」を指す用語として、対象とする時期に用いられていた呼称の「看
病婦」または「看護婦」を用いる。

2. 京都看病婦学校におけるタルカットの活動

2-1 京都看病婦学校の設立

京都看病婦学校は、同志社病院と一体となって 1886(明治 19)年 9 月に、正式認可
に先立って看護教育を開始した。看護婦養成の構想は、ABC FM 宣教師のベリーによ
る病院設立計画の一環として進められてきたものであった。先の章でみたとおり、初
期の ABC FM 日本伝道においては、医師の資格を持つ宣教師による医療伝道も重要な
要素のひとつであった。ベリーは、1872(明治 5)年に来日、兵庫、岡山で医療、監獄
改良と伝道に携わり、特に日本の看護の現状が立ち後れていることを経験した。自身
で医療行為を行うのみならず、日本人への医学教育をも視野に入れていたベリーは、
医師だけではなく協働者である看護婦(当時の呼称は看病婦)の養成についても急務
であると考えていた。さらに、ABC FM の女子への教育事業の流れの一つとして、看
護婦のように女性に期待される職業のプロフェッショナル教育が注目され始めていた
ことから、看護の技術習得とあわせてキリスト教教育も行う専門教育機関設立の計画
が具体化することとなった。この計画は、京都において医学教育を構想していた新島
襄のそれと合致し、新島とベリーは協力して医学教育機関、病院、看護婦養成機関の
設立をめざした。

このころのベリーの看護教育に関する見解を示すものとして、1886(明治 19)年 9 月
20 日、大日本私立衛生会京都支部総会における講演「京都看病婦学校設立ノ演説」⁴お
よび LL に掲載された記事⁵がある。前者の講演では、ベリーは当時の日本の看護を「看
護旧法」として、看護に必要な知識もなく経験に頼り、人間性の低い人物が看護にあ
たっているため、患者にとって全く益のない状態であると述べた。そして、理想とす
る看護法を「看護新法」として示し、これを身につけた看護婦養成が急務であることを
説いた。さらに、京都看病婦学校を開設する意義として、地域への貢献、医学の進
歩への貢献、女性の自立できる職業の確立、キリスト教精神に基づいて貧しい人々を

助ける訪問看護婦の養成などをあげている。また、後者の記事は、“A Christian training-school for nurses in Kyoto, Japan”と題され、日本における看護の現状と看護婦の必要性を読者に訴えている。文中でベリーは次のように述べる。

(前略) 我々の女性宣教師たちは、日本人の母親たちだけでなく父親たちにも、病気の子供の世話をどうすればよいのかと、他のどんな質問にも増してしばしば問われる。だから、人あたりがよく専門的な知識の豊富なクリスチャン看護婦は、日本の家庭に入ってゆくに最も歓迎される訪問者となるであろう。

あるすぐれた男性宣教師がいみじくも語ったように、日本では、宣教医は宣教師1.5人分、熱意があつてまじめな看護宣教師 (missionary nurse) は宣教師2人分の働きをするであろう。

さらにベリーは、看護婦養成学校構想の実現に向けての具体的な方策として、①言葉が堪能で、クリスチャン女性に、伝道に出向くための聖書などの教育をほどこすことができる有能な女性宣教師、②看護法を熟知し、ミッションの病院でも勤務できる熟練した看護婦、③ステーションの医師による、看護に必要な医学知識の講義、④都市近郊をいくつかの地域に分け、トレーニングを始めて1年経過した看護学生を数人ずつ実習させる。2年間のトレーニング終了後は、地元で病院や個人の家で看護婦として働くか、看護宣教師として教会での伝道活動に従事するなどの職務に就く、という4項目を掲げている。

これらの記事から、ベリーの企図した看護教育においては、正しい先進的な看護知識の教授とともに地域への貢献、女性の職業的自立といった要素が重視されていたことがわかる。

ベリーは、自身の理想とする看護婦の専門教育にあたる適任者として、ボストン市立病院婦長であったリンダ・リチャーズの招聘を計画した。リチャーズは「アメリカ最初の有資格看護婦」と称される力量をもっており、当時のアメリカで最も優れた看護婦のひとりであった。リチャーズはベリーの招聘に応じて、1886(明治19)年1月、ABC FM 派遣宣教師として来日した。同年9月から1890(明治23)年3月ごろまで、リチャーズは京都看病婦学校で看護の専門教育、訪問看護の指導、さらに宣教師として伝道にあたり、ベリーのめざした看護婦養成機関の設立、充実に力を尽くした。しかし、その成果は必ずしも彼女にとって満足のゆくものではなく、ベリーの招請にこたえて日本での看護婦養成の熱意をもって来日したリチャーズにとっては、厳しい現実をつきつけられることとなった。心労が重なり不調となったりリチャーズは、1890(明治23)年10月、帰国を余儀なくされた。

2-2 タルカットの京都看病婦学校着任

タルカットが岡山から京都に転任し、京都看病婦学校に着任したのは、リチャーズが帰国したのとちょうど時を同じくする。1890(明治 23)年 4 月 12 日横浜発 ABCFM 本部宛書簡において、タルカットは「京都看病婦学校における心配事」について言及している。ここでタルカットが、「もしミス・リチャーズのあとにどなたか派遣されることになれば、その方は、ご自分のお仕事についての知識が深いだけでなく、ご自身の心のうちについてよくご存じで、また他の方の性格をすばやく理解できるような人物でなくてはならないでしょう」と述べていることから、リチャーズの問題点はこうしたところにあったとみられる。いみじくも、タルカットがここで指摘した問題点を克服できる人物として、タルカット自身がリチャーズの後任として京都に赴任することになったのである。

タルカットは来日して神戸に着任後、特に神戸の女学校開校までは、ベリーに同行し、ベリーが医療を実践する傍ら伝道を行うという医療伝道のスタイルを経験した。このベリーとの協働によって、タルカットは学校教育とは異なる医療伝道、地域伝道の方法に接することができた。さらに岡山においてもタルカットはベリーの医療伝道に同行、それをきっかけに地域の女性への伝道活動に携わり、また石井十次の設立した岡山孤児院の支援という社会的弱者を救済する先駆的な組織との関わりによって自身の宣教師としての活動の幅を拓けていく手がかりとしていった。

タルカットの赴任時、京都看病婦学校のスタッフとしてリチャーズとともにアイダ・スミス(Ida Victoria Smith, 1856-?) が看護の専門教育にあたっていた。スミスもアメリカで看護の専門教育を受けており、リチャーズの要請にこたえて 1888 (明治 21) 年 12 月に来日したのであった。しかし、タルカットが 1891 (明治 24) 年 6 月の 2 通の書簡⁶で言及したように、スミスもその年 7 月に帰国することとなった。タルカットの書簡によれば、スミスもまたリチャーズと同じ問題を抱えていた。タルカットは「(スミスの持つ) 問題を解決しようとミス・スミスに協力したが、成果を得られず、ミッション全体の意見として、現職にとどまらない方がよいと判断するに至った」と記している。そして、同年 9 月に、新たにヘレン・フレイザー (Helen Eliza Fraser, 1861-?) が着任したのである。フレイザーも看護の専門教育を受けており、リチャーズ、スミスと同様に看病婦学校の専門教育を担うために来日した。このフレイザーの通訳を担当したのは、神戸の女学校でタルカットの教えを受けた成瀬しずであった。成瀬は京都看病婦学校に入学、看護についても学んだ後、フレイザーの著書の翻訳も行った。このように看護の専門教育にあたる経験者が次々と交代する中で、タルカットは京都看病婦学校のスタッフとして生徒のキリスト教教育、訪問看護への協力に携わり、さらに京都を中心として近郊各地への伝道にも出かけていたとみられる。

タルカット着任の翌年 1892(明治 25)年は、京都看病婦学校の教員であり産婦人科

医の佐伯理一郎がのちに著した『京都看病婦学校五十年史』⁷⁾によれば、「本校全盛の一時代」であった。医師の増加、教場や病室の増築に加え、ベリーとフレーザーによって、巡回看護婦(district nurse)の事業が開始され、地域への貢献が具体的に実現することとなった。タルカットの担う伝道活動も、それと相まって活発に進められたとみられる。『京都看病婦学校五十年史』には、タルカットと看病婦学校卒業生の梶谷なか、不破ゆうの3名の女性らが大いに活動した、との記述がある。このころ、フレーザーの着任によって看護の専門教育体制が落ち着き、タルカットも看病婦学校においてキリスト教教育を担うという本来の役割を果たすことに専念できるようになったとみられる。1893(明治26)年4月25日附京都発 ABCFM 本部宛書簡でタルカットは、自身のはたらきについて「看病婦学校で、ミス・フレーザーと協力しております。学校での日々の聖書の授業のほか、時間を見つけて、市中にいる助けを求めている人々を訪問しております。かつての卒業生のひとりに助けてもらい、入院患者を見舞うこともいたしております。また京都の南方6マイルの町を定期的に訪問しております」と記しており、看病婦学校での活動と各地への伝道を並行して行っていたと記している。

また、タルカットの活動を記したものとしては1892(明治25)年3月の“The Sixth Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses”の“Religious Work”の項に、「この活動において、ミス・タルカットは特に力を発揮し、この組織(同志社病院及び看病婦学校:筆者註)の多くの者が忠実に彼女に協力した」とあり、病院内の入院患者、看病婦学校生徒、病院の職員のためにタルカットが行う職務の内容が記録されている。それによると、朝夕の祈祷、患者のうちで希望する者との面談や聖書の輪読会、日曜日の特別礼拝、月曜朝8時の医療スタッフ向け祈祷会、日曜学校、看護婦のための火曜夜のバイブルクラスと金曜夜の祈祷会があげられており、病院外の患者のための礼拝、患者の自宅での個人的な活動をおこなっている、とある。また、「かつての卒業生が、病院および家庭訪問の活動においてミス・タルカットの補助をしている」とあり、病院の関係者、看病婦学校生徒、卒業生の協力を得て伝道活動を進めていたことがわかる。それに加えて、“Nurses’ School”の項には「ミス・タルカットはキリスト教と聖書講義の仕事の他に、情報整理と看護婦雇用に携わる」とあり、京都看病婦学校の実務面も担っていたことがわかる。

2-3 濃尾地震被災地救援活動とタルカット

タルカット着任後間もない1891(明治24)年10月、現在の愛知、岐阜、滋賀各県を濃尾大地震がおそった。この地震発生に対し、日本赤十字社などから救護班が被災地に向かい救援活動に当たることとなった。京都看病婦学校、同志社病院からも医師、看護婦、生徒10~20名がベリーとともに被災地入りして活動、罹災者300名ほどの

救護を行ったことが知られている。前述の “The Sixth Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses” には、“Earthquake Sufferers”として1項目が設けられて、同志社病院と京都看病婦学校のチームが大垣で行った救護活動についての報告がある⁸。その中にはタルカットの名はないが、その後、クリスマス休暇中に被災地でボランティアな救援活動を行ったことを *MH* の記事から読み取ることができる⁹。*MH* はこの地震に関してしばしば報じており、発生約2か月後の1892(明治25)年1月号には早くも “The Earthquake in Japan” と題して、神戸、大阪、京都の各宣教師からの報告書簡をとりまとめた記事が掲載された¹⁰。記事によれば、救援活動は地震発生直後から開始され、ベリーの組織した3名の外科医、3名の看護婦と4名の同志社学生からなる “Doshisha Relief Corps” が大垣に臨時診療所を開設した。続く2月号の記事には、この診療所が岐阜県内で救援活動を続けている唯一の医療組織であることが、地震による死傷者や被害の規模、政府による復興資金の拠出、支援寄付の要請などとともに記されている¹¹。さらに3月号にはベリーをはじめとする ABCFM 京都ステーションの宣教師3名の連名による “Help for Ogaki, Japan. An Appeal from the Evangelistic Committee of the Kyoto Station” と題するアピールが掲載されている¹²。このアピールにおいては、未曾有の災害であるこの震災に対しクリスチャンの働きは大きく、日本人クリスチャンと宣教師がともに救援活動にあたり、その結果、クリスチャンたちは被災者らの間で受け入れられる存在となってきたとしている。そして、医療支援終了後の大垣での継続した活動のために500ドルの支援を訴えている。この記事に引き続き、前述のタルカットの活動に言及した、岡山ステーション所属宣教師のペティーによる記事が掲載されている。記事によれば、タルカットは神戸ステーション所属の女性宣教師バロウズとともにクリスマス休暇を大垣でのボランティア活動にあて、少人数の日本人看護婦とバイブル・ウーマンが彼女らに同行した。また、この活動に要する費用は特別な寄付で賄われ、ステーションの通常の予算からの支出ではなく、この地において、2、3人の伝道者が継続的に活動できる道筋がつけられるよう期待されている、とも述べられている。

MH には同年8月号および12月号にも大垣での活動のその後に関する記事が掲載されている。記事の掲載頻度や内容から、濃尾地震の被災者支援活動が ABCFM 日本ミッションにとって重要な伝道活動と位置づけられていたとみることができる。ここで、ベリーがいち早く開始した被災地での医療支援活動を自然にその後の伝道活動へと繋ぐ役割を果たしたのが、看護婦と女性伝道者を伴ったタルカットの活動であったと考えられる。タルカットが京都看病婦学校で手がけていたキリスト教教育を身につけた看護婦が引き続き活躍できる場が新たに開かれることになったといえることができる。

3. 広島におけるタルカットの活動

3-1 広島での ABCFM 伝道活動と日赤看護婦派遣

『京都看病婦学校五十年史』によれば、タルカットの京都看病婦学校での活動は 1894 (明治 27) 年 6 月までとされているが、この年の秋、タルカットは広島を訪ねた。ABCFM 日本伝道団の広島伝道については、MH1892 (明治 25) 年 12 月号に”Two New Centres of Work” と題して岡山ステーション宣教師のペティーによる報告があり、同年夏に福山と広島で同志社卒業生による熱心な伝道活動が始まったとしている¹³。そして同じ記事の中に、「女性たちはすでに個人的に祈りと伝道のグループに組織されており、その中にはアメリカで広く知られている熟練の幼稚園保母であるミス・コウカがいる」との記述がある。この記事中のミス・コウカは、神戸の女学校の第 1 回卒業生の甲賀ふじである。甲賀ふじは女学校在学中からタルカットの伝道活動を助け、卒業後は母校の舎監として働いた後に保母となることを決意、アメリカ・ケンブリッジの保母養成所で保育法を学んだ。帰国後、神戸の頌栄幼稚園で保母をしながら保母養成にもあたっていたが、1891(明治 24)年 9 月に広島女学校附属幼稚園に赴任、保母伝習所の教師も兼任していた¹⁴。広島を訪れたタルカットは、教え子の甲賀により広島でのキリスト教伝道の現状を詳細に知ることができたと思われる。

おりしも 1894(明治 27)年 8 月、日清戦争が起こり、広島には大本営がおかれて臨時首都の容相を呈していた。軍事の拠点となり戦場から近い広島に、傷病兵をまず収容するための「陸軍予備病院」が設置されることとなった。7 月以降、広島とその近郊に、既存の病院や施設を利用して、本院と 4 つの分院などからなる「広島陸軍予備病院」が開設された。この広島陸軍予備病院には、日本赤十字社から「救護員」として看護婦が派遣されることとなった。軍事施設に看護婦が派遣されるのは初めてのケースであり、その人選は慎重に行われたという。第一陣は東京から 8 月初旬に広島入りし、活動を開始した。その後 9 月にも第二陣が派遣されたが、患者が急増したため日本赤十字社に看護婦のさらなる増員要請があった。それに応えたのが、日本赤十字社京都支部であった。11 月、日赤京都支部は医師、看護婦等 29 名からなる救護員を広島に派遣した。日赤京都支部からは日をおかず追加の救護員が派遣され、全 40 名程度の陣容で、陸軍予備病院第 3 分院において主に伝染病患者の看護に当たった。この日赤京都支部派遣救護員の看護婦取締を務めたのが、日赤篤志看護婦人会員であった新島八重であった。そして、派遣者の中には京都看病婦学校の生徒および卒業生が 10 名程度含まれていた。タルカットが広島を訪問したころと時を同じくして、京都看病婦学校の教え子たちが広島陸軍予備病院で活動していたとみられる。

3-2 広島における伝道活動とタルカット

広島でのタルカットの活動に関して、まずタルカット自身の 1895(明治 28)年 7 月

広島発 ABCFM 本部宛の書簡について見てみると、その中には広島での具体的な活動については言及が少ない。しかし、前回の訪問後、入院中の兵士を見舞うことは急務であると感じたこと、4つの大きな病院がいっぱいになっていること、傷病兵は中国だけでなく台湾からも多く来ていること、ここには種まきのための広い土地が残されていること、つまり病院での活動は将来性があるなどを記している。

次にタルカット自身の記したものとしては、LL 1896(明治 29)年 1月号に掲載された”Letter from Miss Talcott”と題された記事がある¹⁵。これは前年 1895(明治 28)年の 7月と 8月にウーマンズ・ボードに寄せられた書簡を掲載したものであるが、そこでタルカットは広島での活動について以下のように記している。

読者の皆さんは、私が去る(1894年：筆者註)12月から広島に滞在していることをご存じないことでしょう。数日間の訪問の予定が、こちらに来てみると病院でのクリスチャンの活動がたいへん急を要していることがわかりましたので、今まで滞在しております。2人の日本人女性—うち1人はミセス・フォーク—と、ここ数か月は同志社卒業生の若い男性が私とともにたいへん熱心に活動しています。毎朝4人で集まって祈りをささげ、意見を交換して午後の活動の段取りをします。女性3人は一緒に1時半頃から6時まで病室を訪問します。現在、4つの大きな病院があり、1つは閉まっており、500人ほどの患者が収容されています。彼らは、病状が回復次第、それぞれの師団の病院に転院することになっています。当初は訪問先を赤十字派遣看護婦が活動する3つの病院に限り、特にクリスチャンの看護婦と協働するのがよいかと考えましたが、病状に従って患者が病院を移動することがわかったので、いまは順番に訪問することにしています。30ほどの病室のうち、1回に訪問できるのは3つか4つです。しばしば、患者たちは私たちに会うために別の病室の前にやってきて、夕食時になって私たちが帰ろうとすると、「次は自分たちの病室に来てください」という声を聞くことが少なくありません。私たちは本やトラクトを貸し、リーフレットをわたし、しばしば、質問のある人と一緒に聖書を読みます。ちょうど先日、足に副木を当て、頭も起こせず横になっている患者が、いまここに横たわってこれらの本を読み、大切な真理について話をきくことができるのは、自分の人生にとって最大のめぐみだと思っている、と話すのを聞きました。

私たちは、中国にいる軍隊に一時的にキリスト教のチャプレンを送ったことは、広くよい印象を残した運動だったということの証拠にしばしば出会っています。ちょうどいま、私はここにいる牧師と伝道者が兵舎での伝道のために協働するように全精力を傾けています。私たちは、福音の力を堅く信じる人がこのような働きのためにたちあがるようにという、本国のみなさまの熱心な祈りを必要として

おります。

この記事の直前に掲載されている同志社に関する記事の中の”Training School for Nurses”の項には、「秋学期の終了時、広島からの熱心なよびかけに応じて、上級クラスの4名の生徒がボランティアとして出かけた。卒業生7名も働いており、11名の同志社の看護婦が赤十字社の活動に従事している」とある。

他にタルカット自身の手になるものとして、*The Japan Evangelist* の1895(明治28)年12月号に掲載された記事 ”Hospital Work in Hiroshima” がある¹⁶。これは同誌編集部からの求めに応じてタルカットが投稿したものである。ここでタルカットは、院内での活動の進め方について具体的に述べている。

私たちは、当初は不信感を示していた病院関係者にもしだいに受け入れられるようになり、今では家族も面会を断られる病室に長時間の立ち入りを許されるようになりました。患者はせいぜい5分ほどしか飽きずに話を聞くことができませんので、会話を交わすのも15分から20分程度です。最初は少しの励ましの言葉をかけ、決してキリスト教に関わる内容を強制しないように注意を払っています。そして患者がその気になれば、戦地での話を聞くなどして彼らの信頼を得、こちらの話したいことを話したり、本を貸したりします。いくつかの病院では、小説を貸すことを禁じられています。それよりも、空き瓶に活けた少しの花のほうがより慰めになることをしばしば経験しました。

病院にいる時間は短く傷病兵と話す機会も限られていて、風の中に種をまくように思えますが、この種はいつか水辺に落ちて何日も後になって芽を出すと確信しております。また、長く入院している患者のうち少なからぬ者が熱心に聖書を学ぶようになり、とても貴重な宝を見つけることができたと感じています。彼らがキリストの兵士になる道へと導かれたことは、大きな喜びです。

広島でのタルカットの活動について記したのものには他に、*LL* の1896(明治29)年5月号の”Hiroshima”と題する記事がある¹⁷。この記事の筆者は不明であるが、前半部分は広島の紹介、後半に「私たちの広島訪問の主要な目的は、軍病院にいるミス・タルカットの働きをみること」とあり、タルカットのことがふれられている。この記事の中では、タルカットは患者を訪問する許可を政府から得ている、としている。また、タルカットはメソジストの女性宣教師ミス・ゲーンズの学校¹⁸に滞在しており、この学校はすばらしい幼稚園を併設している。幼稚園は神戸の女学校卒業生のミス・コウカが統括している、とも記している。本章初めに述べたとおり、タルカットが広島に来るきっかけを作ったのが甲賀ふじである。

また、広島での兵士に対するキリスト教伝道活動について言及したものとして、*MH*の1895(明治28)年4月号に掲載された ABCFM 宣教師ペティーによる記事”A Special Mission in Japan: Christian Work in Behalf of Soldiers”がある¹⁹。この記事によれば、当時、広島ではプロテスタントの主要な4派、組合派、長老派、メソジスト、聖公会がこの特別なミッションのために協働しており、組合派からはミス・タルカット、ケリー、ローランド (George Miller Rowland, 1859-1941)、ペティーが参加していた。同志社の市原氏、岡山孤児院の石井氏、神戸女子神学校卒業生の松本夫人²⁰など数人の日本人もいた。京都の新島夫人と8から10人のクリスチャンの看護婦も引き続き病院での価値ある働きを行っていた。3つの礼拝堂が日々の礼拝のために開かれており、状況に応じてほかにも開かれている。そしてたくさんのキリスト教出版物、すなわちポケット版の新約聖書、福音書が配布されており、兵士たちのために作成された新しいトラクト集もあった。いくつかの集会があり、クリスチャンの兵士が友人と会うのに使うための施設がまもなく出来上がるようになっていた。兵士に対する伝道活動はとても困難な仕事で、如才なさ、忍耐力そして集中力が求められる、という。結果を数字で示すことができず、結果がわかるのは後になるとしても、いくつかのよい種まきができている。説教の多くは手当たり次第のものだが、少なからぬ数の兵士が聖書をもって何度も聞きにきては、「先日何某さんのおっしゃったことは決して忘れません。このことについて、もっとお話を聞きたい」という。クリスチャンの看護婦が病院の中でもっとも忠実で忍耐強い働き手であることは多数証明されている、としている。この、兵士に対する特別な活動は、広島市民にも深い印象をあたえたようである。集会は主に兵士のために開かれているが、市民たちも参加する気持ちが十分であるといい、仏教徒さえも、この分野ではすっかり立ち後れていると認めているという。これが、現在の日本で行われているキリスト教徒の特別な働きである、と書かれている。そして、この活動に対して今少しの献金と多くの祈り、共感をもっていただきたい、と締めくくっている。

同じく *MH*の1896(明治29)年2月号では、American Bible Society のヘンリー・ルーミス (Henry Loomis, 1839-1920) によるタルカットに関する著作について紹介している²¹。記事によればルーミスは、「ミス・タルカットは広島で病院の病室に自由に入出入りすることを許され、日本軍の外科医長が彼女の働きを高く評価している。兵士たちは、彼女のことをナイチンゲールのように思っている。日本人だけでなく中国人の尊敬も集めている」といい、威海衛で捕虜になった中国人兵士の話を紹介して、タルカットの活躍ぶりを紹介している。

日清戦争と広島での兵士への伝道については、濃尾地震の場合と同じように *MH*にしばしば記事が掲載されている。前述の記事に加えて、開戦直後の1894(明治27)年11月号には”War in Japan”と題して明治維新時の戊辰戦争と日清戦争が日本人にも

たらしたものについて批判的に述べた記事が掲載された²²。続いて同年12月号から翌1895(明治28)年4月号まで毎号に關係記事がみられる。3月号の記事には、ある岡山在任宣教師の家で開かれた働き手(Christian workers)たちの非常に興味深く有益な集まりに40名の参加者があり、その3分の1は女性であったと記されている²³。このことからみて、陸軍予備病院の傷病兵慰問から始まった広島での伝道活動は、ABCFM日本伝道団において次第に重要な活動となっていたと思われる。

4. 小括

京都看病婦学校は、医師でもあるABCFM宣教師のベリーによる構想に基づき、当時のアメリカで行われていた先進的な看護専門教育を施すだけでなく、キリスト教の精神をもって看護にあたり、患者に慰めを与えることのできる看護婦の養成をめざして設立された。また、看護婦の地域での活動を重視していた点、卒業生が次の看護婦養成のリーダーになることができるように配慮している点も大きな特徴である。タルカットは、京都看病婦学校において看護婦のキリスト教教育にたずさわることにより、看護婦という、職業に就いて社会で活動し自立できる女性の育成と、看護を通してのキリスト教伝道を両立させる可能性を見いだすことができた。さらに、京都看病婦学校が進めていた巡回看護婦制度によって傷病者やその家族という社会的弱者への新たな伝道が開拓され、これまでにはなかった伝道の形態への展開があったということができよう。そしてこの展開が、のちの広島での活動へとつながったと考えられる。

広島では、神戸の女学校の教え子、京都看病婦学校の教え子、また岡山、京都の宣教師、日本人の働き手と協働して、陸軍予備病院という大規模な施設で傷病兵への心身両面への癒しを与える活動を実践した。タルカットのこれまでの日本での教育・伝道活動の結実ともいえる広島での活動は、傷病兵への伝道というまた新たな活動の扉を開くこととなった。MH誌上で他の宣教師たちが指摘したように、日清戦争は明治になって開国した日本が初めて経験した外国との戦争であり、それまでの日本社会にはなかった新たな問題が生み出されたと考えられる。多数の傷病兵、外国人捕虜の出現もそのひとつであった。これらの人々にどう対処してゆくのか、傷病を治療するだけでなく精神的な癒やし、人道的な処遇が必要であり、当時の日本社会においてはそうした問題に対応できる力は乏しかったと思われる。タルカットの広島での活動は、その点をいち早く汲み取りこれまで培ってきた日本での伝道の経験と人脈を生かしたものであったということが出来る。

さらに本国アメリカでの社会改良運動の展開を背景に、タルカットの日本での活動の場も当初の学校教育から家庭にある女性への伝道、看護婦養成の場でのキリスト教教育、病院での活動と広がりをもたせたと考えられる。アメリカで運動の担い手とな

っていたのは主として都市部の中流家庭の女性たちであったが、タルカットが日本で協働したのは自身の教え子たちであり、伝道先の女性たちであった。タルカットは、日本での女性への伝道の成果を、看護を通して女性による社会的弱者の救済という社会改良の方向へとつなぐ役割を果たしたと言えるのではないだろうか。

最後に、広島での兵士への伝道活動には日本で活動するプロテスタント諸教派が協力してあたっており、はからずも看護の場がアメリカプロテスタントの日本伝道に対する共通の注力ポイントとなっていた点も付け加えておきたい。

註

- ¹ 岡山寧子「同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育」『京都府立医科大学誌』第119巻2号、2010
亀山美知子『近代日本看護史』、I-IV、ドメス出版、1985
小野尚香「京都看病婦学校と宣教看護婦リンダ・リチャーズ」、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890—』、1999
同「医療宣教師ベリーの使命と京都看病婦学校」、同志社大学人文科学研究所編『アメリカンボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』、2004
- ² 亀山美知子『女たちの約束—M.T.ツルーと日本最初の看護婦学校』、人文書院、1990
上坂良子、辻幸代「看護婦大関和の著述から見た社会活動の今日的意義」『和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要』第6巻、2003
- ³ 千田武志「日清戦争期における広島の医療と看護」『広島医学』62巻6号、2009
- ⁴ 同志社社史史料編集所『同志社百年史 資料編一』、学校法人同志社、1979、393-399頁
- ⁵ *LL*, November, 1885, pp.375-377
- ⁶ 6月3日附福井発、6月30日附京都発、いずれも ABCFM 本部宛
- ⁷ 佐伯理一郎『京都看病婦学校五十年史』、京都看病婦学校同窓会、1936
- ⁸ 同志社社史史料編集所『同志社百年史 資料編二』、学校法人同志社、1979、213-230頁
- ⁹ *MH*, March, 1892, p110
- ¹⁰ *MH*, January, 1892, pp.12-13
- ¹¹ *MH*, February, 1892, p.45
- ¹² *MH*, March, 1892, pp96-97
- ¹³ *MH*, December, 1892, p.522
- ¹⁴ 高道基『幼児教育の系譜と頌栄』、頌栄保育学院、1996、16頁。
- ¹⁵ *LL*, January, 1896, pp.12-13
- ¹⁶ *The Japan Evangelist*, Vol.III, No.2, pp.84-85
- ¹⁷ *LL*, May, 1896, pp.230-233
- ¹⁸ 現在の関西学院大学教育学部の源流の一つである、広島英和女学校。広島出身で南メソジスト監督教会牧師の砂本貞吉により 1886(明治19)年に創立、すぐに宣教師ゲーンズ(Anne

Elizabeth Gaines, 1860-1932)に委ねられる。附属幼稚園は 1891(明治 24)年開設。甲賀ふじは開設にあたり神戸の頌栄伝習所より転任。

¹⁹ *MH*, April, 1895, pp.143-144

²⁰ 神戸女子神学校第 1 回卒業生の松本荻江。東京女子師範学校卒業後、地方の女子教育に従事、開校間もない女子神学校の教師を務めた。

²¹ *MH*, February, 1896, p.49

²² *MH*, November, 1894, pp.499-502

²³ *MH*, March, 1895. pp.110-111

第6章 休暇帰米中およびハワイにおける活動

1. タルカットの休暇帰米とハワイ伝道支援

タルカットは日本派遣宣教師として38年間在任したが、その間に2度、休暇により帰米した。最初は1883(明治16)年末から1885(明治18)年8月までの1年半余り、2度目は1896(明治29)年2月から1902(明治35)年末までである。2度目の帰米には、日清戦争時に広島での活動中にコレラに罹患、以後体調不良となったことが関係している。1895(明治28)年末には仕事に差し支えるほどの疲労で休暇帰米勧告されるに至り¹、翌1896(明治29)年2月に帰米の途についた²。5月にサンフランシスコに到着し³、当初は半年程度の休暇を予定していたようである。しかし体調の回復が思わしくなく⁴、1897(明治30)年末ごろから翌1898(明治31)年4月まで、ニューヨーク州クリフトン・スプリングスの保養施設に滞在して休養することとなった⁵。帰米して4年目となった1899(明治32)年7月、日本伝道団の年次総会においてタルカットの京都ステーションへの帰任が決議される⁶。それに対してタルカット自身は、ハワイで伝道にあたっているO.H.ギュリック夫妻らの要請を受けて、ハワイを経由して日本帰任をしたいとの意向を示した⁷。こうしていったんはタルカットの日本帰任が決まったが⁸、「腕の腫物」のために出発延期を余儀なくされた⁹。その後、1900(明治33)年2月に予定された日本帰任は再度延期され¹⁰、1900(明治33)年6月ようやく日本帰任の運びとなった¹¹。この間、タルカットは通常の休暇期間より長く、足掛け5年をアメリカで過ごすこととなったのである。

タルカットはしかし、そのまま日本に赴任したのではなかった。前述のように、ハワイの日本人伝道に協力するためまずホノルルに向かい、1900(明治33)年6月12日にホノルルに到着した¹²。ハワイでの活動は、同じABC FM 宣教師のゴードンが着任するまでの短期間のはずであったが、ゴードンが急死したことによりその後任者が決定するまでの2年半近くに及び¹³、最終的にタルカットが日本に帰任したのは1902(明治35)年12月であった。

休暇帰米というには長い、6年にわたり日本を離れることになったタルカットにとって、このアメリカとハワイで過ごした期間は前後の日本での伝道活動においていかなる意味があったのであろうか。在米中、タルカットは休養するばかりでなく各地の教会で日本での伝道活動について講演したり、LLに投稿するなど、他の宣教師と同じように支援者に向けて活動の報告・宣伝に努めた。そこでタルカットが特に力を入れていたとみられるのは、バイブル・ウーマンと呼ばれる現地の女性伝道者の活動とその養成の重要性を訴えることであった。タルカットが神戸、京都で女性への教育・伝道に携わる間に会った教え子らが日本各地で女性への伝道に直接間接に関わり、またタルカット自身の活動の協力者として重要な位置を占める存在となったことは、バイブル・ウーマン

が伝道地で果たす役割の大きさを実感させる事実である。ここでは、タルカット在米中の活動からバイブル・ウーマンへの言及を中心に uptake、タルカットの 20 年以上に及ぶ日本での伝道活動から得られた成果が自身の伝道観形成とさらにはアメリカ本国のクリスチャン女性への還元につながっていったかについて検討したい。

さらにハワイ伝道支援については、当初は一時的なものであったはずが不慮の事情があったとはいえ長期間となり、タルカットは期せずして日本伝道ともアメリカ国内伝道とも事情の異なる日本人移民女性への伝道に関わらざるを得なくなった。しかしここでもタルカットは自身の教え子の協力を得ることができ、それは日本人移民女性への伝道の大きな助けとなったと考えられる。ハワイにおける日本人移民女性への伝道を通じて、タルカットはこれまでの日本女性への伝道活動の経験を生かしつつ、これまでになかった伝道経験を積み重ねる機会を得たと言つてよいであろう。このハワイ伝道支援について検討し、タルカットの伝道活動のこれまでになかった一面について考察を加える。

2. 休暇帰米中のタルカットの活動ーバイブル・ウーマンをめぐって

帰米中のタルカットの活動について資料から跡づけると次のようになる。1896 (明治 29) 年 5 月に帰米したタルカットは、その年 11 月に開催されたウーマンズボードの年次総会で、広島 の 病 院 での 日 本 人 兵 士 と 中 国 人 捕 虜 対 する 活 動 について報告した¹⁴。記事の中でタルカットは “Florence Nightingale of Japan” とたたえられ、病院での活動は病人のみならず医師や看護婦にも歓迎された、と記されている。

1897 (明治 30) 年 10 月にはコネティカット州ニューヘブンで開催されたアメリカン・ボードの年次総会に出席¹⁵、この年と翌 1898 (明治 31) 年のアメリカン・ボード年次報告書に、ニューヨーク州、ニュージャージー州、コネティカット州などの教会を訪問したとの記載がある。

1897 (明治 30) 年末から 1898 (明治 31) 年 4 月にかけては、休養のためニューヨーク州クリフトン・スプリングスの保養所に滞在したことは前述の通りである。しかしその年の夏には、帰米していた他の日本派遣女性宣教師とともに、日本から帰国した 2 名の女性宣教師を訪問してもいる¹⁶。

1899 (明治 32) 年 3 月にはウーマンズボード太平洋支部の Quarterly Meeting に招かれて日本における教育活動について講演し¹⁷、5 月には同支部の例会の来賓として出席した¹⁸。

休暇帰米中の宣教師にとって、アメリカン・ボードの年次総会に出席する、地域の教会で伝道活動について語ることは必須の重要な活動であり、それに加えて女性宣教師たちには所属するウーマンズボードの集まりに招かれて語ることが求められていた。タルカットも例にならい、体調回復を図りながらこれらの会合に出席したものと思われる。そうした活動の合間、1897 (明治 30) 年 3 月に発行された *LL* にタルカットは “The Work

of Bible Women in Japan” と題した長文を寄稿している¹⁹。この休暇帰米の直前、タルカットの広島での活動が非常に大きく取り上げられ、注目を集めていたことは第5章にみたとおりである。実際にタルカットが招待された会合でまず語ったのは、広島での経験であった。それに次いでタルカットが LL 読者にアピールした話題が、バイブル・ウーマンについてである。この投稿について検討しながら、タルカットの考えるバイブル・ウーマン観を明らかにし、日本伝道での経験とバイブル・ウーマンに着目、重視するに至ったところを整理していく。

まずタルカットは日本におけるバイブル・ウーマン誕生の経緯²⁰とその特徴について述べる。

日本伝道の初期にキリスト教に改宗した人々の中に、いくらかの聡明で熱心な女性がいました。当時から、その女性たちの助言や協力は、宣教師たちの働きが成功を収めるに大きな妨げとなる、伝道地の人々の習慣や考え方についての知識不足と、言葉を上手に操る能力の不足を補い、伝道の大きな助け手となっていました。年とともに、伝道の場の実情や女性たちの示す能力により、彼女らへの依存度が高まっていることが明らかになり、宣教師と協働するにせよ単独で活動するにせよ、よりよく訓練されたバイブル・ウーマンを養成しようという機運が醸成されました。そして 1881 年、神戸にミス・バロウズとミス・ダッドレーによって女子伝道学校 (Women's Bible School)²¹ が開かれました。この学校はこれまでに 50 人以上の卒業生を出し、彼女らは日本各地に散らばって教会の創立のために貴重な働きをしています。何人かは、単独での活動において我々の期待以上の能力を発揮するまでに成長しました。伝道団が牧師とバイブル・ウーマンを支援してきたある教区では、最近その削減が議論された折、信徒たちが、もしこれらの働き手の一人でも諦めねばならないのなら、とにかくバイブル・ウーマンには残ってもらわねばならない、とされています。

それはクリスチャンの信仰の力を示し、女性たちを生活習慣を超えて善へと導く力でもあります。さらに、彼女たちがバイブルスクールに在籍した際の指導者たちの、自由と教育の素晴らしさの成果でもあります。また生徒の選考、教育を行う間に彼女らに常に与えている影響の証左でもあります。

「その女性たちは何をしているのか」と読者は尋ねるでしょう。彼女らはコミュニティに入っていく、できる限り多くの人々と知り合いになり、自分たちの生き様と言葉で、キリストが彼女らに何をなしたかの話に耳を傾けてくれる人々を勝ち取っていきます。彼女らはしばしば、女性たちに理性的に学ぶことを教えます。偏見や妬みを取り除く努力をし、教会の女性たちに、自分たちの家庭の外にもそれを広めていく特権と責任を持っているという気持ちをかきたてます。通常、彼女らはバ

イブスクールにいるときは簡単な讃美歌を教わるなどして、出かけて行ったクリスチャンのコミュニティに幸いにも小さいオルガンがあれば、彼女らは曲を演奏し、礼拝での讃美歌歌唱に奉仕します。

ここでタルカットは、バイブル・ウーマンが女性への伝道について非常に重要な役割を果たしうることを示唆している。

続いてタルカットは、写真付きで日本のバイブル・ウーマンを紹介する。

2人、あるときは3人のバイブル・ウーマンが、中国との戦争の間、軍の病院に入院している兵士たちを訪問しました。この号の表紙には3人²²のバイブル・ウーマンの写真がありますが、みな子供のいない未亡人です。

写真の左側の二人は約8か月の間、病院で活動しました。中央がミセス・フォークで、ご夫君はかつてアメリカ海軍大尉、その後3年前に亡くなるまでは京都の同志社大学で数学の教授でした²³。彼女と、右隣のミセス・カトウは兵士に対する活動に最も長けていました。彼女たちは常に病人たちの感謝の念を集め、医師や看護婦らに謝意を示されていました。ある日、彼女らはちょうど戦地から帰ったところの病人のベッドサイドに立っていました。病人が会話するには弱りすぎているのを見て取ると、わかりやすい慰めの言葉をかけ、差し支えなければ、お友達に電報かはがきを送るお手伝いをしましょうと申し出ました。次にその病院を訪問した時、先の病人の母親が遠く離れた家から看病に来ていました。訪問者たちが病室に入ってくるのを見ると、彼はすぐに母親を呼んで、「前に私に親切にしてくれた、このイエスの婦人たちにお礼を言ってください」と言ったのです。

ここで取り上げられている2人はいずれも前段で紹介した女子伝道学校の初期の卒業生である。ミセス・フォークは旧姓名を村瀬かね²⁴といい、1895(明治28)年に女子伝道学校を卒業後、三田、小樽、多聞の各教会で伝道師として奉仕した。ミセス・カトウは1894(明治27)年に女子伝道学校を卒業した加藤常子²⁵である。加藤は現在の鳥取県倉吉市の出身で、倉吉教会において受洗したのち女子伝道学校に学び、卒業後は神戸、津山、米子、札幌、仙台、奈良と各地で伝道師として活躍した。フォーク、加藤はともにその後半生を伝道に捧げたバイブル・ウーマンであるが、タルカットが続いてあげた2人は、同じバイブル・ウーマンでも伝道だけでなく多様な働きをした人物としてさらに詳しく紹介している。

ミセス・ソウも子供のいない未亡人で、2年間、ミセス・ギューリックに協力してホノルルの日本人教会でともに働いてきました。不幸な状況にあるハワイの日本人

女性は多くが貧しい地区に住んでおり、その国籍の故に低俗な人々に侮辱されがちです。彼女は主の名において、また彼女が関わっていかうとする女性たちのために、勇気を持って接していきます。彼女は午前中、ハワイのウーマンズボードの経営する幼稚園で教え、子供たちの助けとなるだけでなくその両親に接する機会も得ています。

ミセス・ソウこと宗えい子²⁶は福岡の出身で早く夫と死別、それをきっかけにアメリカン・ボード宣教師 O.H.ギュリック夫妻との出会いもあってキリスト教に入信し、1891（明治 24）年に女子伝道学校に入学した。2年間の学業ののち福岡に戻った宗は、ギュリック夫妻を助けて伝道活動に携わることとなった。記事には宗について記した箇所を挟んで、写真が挿入されている。なお、宗とタルカットは後述のハワイ伝道支援で大きく関わることとなる。

日本人バイブル・ウーマンの最後に、タルカットは炭谷小梅について最も紙幅を割いて紹介する。

最も有能なバイブル・ウーマンの一人は、岡山出身のミセス・スミヤです。彼女は学校で聖書について特別に学んだことはありませんが、しばらくの間、神戸の女学校で学び、それ以来何年も宣教師たちと深くかかわってきました。ミセス・ペティーの活動の大切な助け手です。生来の豊かな才能とエネルギーをすべて救い主に捧げて、彼女はその地域の政治家の家にも貧しい農民の小屋にも等しく入っていくことができます。キリストに出会った時、彼女は裕福で影響力のある男の愛妾でしたが、込み入った関係を断ち、清貧の生活を選びました。彼女は養父のもとに戻りましたが、養父は信仰を持たず、彼女が縁を切った男にずっと強く依存してきたので、彼女の新たな決断に猛反対しました。彼女は黙って養父の反対に耐え、その小汚い家をきちんと整え、自身の存在によって明るいものとしたのです。老人はついにキリストの愛と義に心を開きました。彼女は何年もの間、石井氏の岡山孤児院で最も優れた助言者であり、石井氏は彼女を「孤児院の母」と呼んでいます。彼女の名は、熱心で賢明、有能な働き手として広く遠く知れ渡っています。

宣教師のステーションから離れたところにある小さな教会が、非常に残念なことに何年かの間、現実的な対立問題から活動が停滞していました。どちらのグループも牧師を助けようとしないうばかりか、離れていったグループの指導者たちに従うことはプライドが許さず、彼らの支持者たちは当然付き従っていきました。ミセス・スミヤは教会を訪れ、両方のグループと接触しました。彼女はこの対立を収めるために神から遣わされたと感じ、そして彼女の信仰と愛がついに勝利を得たのです。プライドを捨てられなかった人々は譲歩し、教会は再び一つになって、それ以来調

和を取り戻して歩みが続けています。

炭谷小梅は第4章で見たように、タルカットが岡山伝道で出会った女性である。岡山県の有力者、中川横太郎の妾であったところタルカットとの出会いによってキリスト教に入信、岡山教会の主要メンバーとして岡山で活動する宣教師に協力するだけでなく、石井十次の運営する岡山孤児院の活動を支えた重要な人物である。タルカットが特に炭谷小梅を有能なバイブル・ウーマンとして紹介したのは、当初から自身が深く関わった人物であるからというだけでなく、タルカットが指向するバイブル・ウーマンの理想を彼女が体現しているからであると考えられる。文中にあるように、特に聖書やキリスト教について深い知識を持たなくても人々の心を捉え、接する人の身分や主義主張にかかわらずその心情を理解できる人物が、バイブル・ウーマンとして理想的な活躍ができるとみているのである。また、たとえそのような性質が生来備わっていなかったとしても、伝道学校での学びや他のバイブル・ウーマンから学ぶことによって、より優れたバイブル・ウーマンになることができるとも考えている。

投稿の最後をタルカットは次のように締めくくっている。

こうした女性たちと協働する特権を、宣教師たちはたいへん重んじています。そして、もしこの国（アメリカ：筆者註）に寛大にもこうした女性たちを教育する手伝いをしてくださる方々があるならば、あるいは今まさに彼女たちの愛の働きを助けてくださっている方々は、すでに何が行われてきたかを知ることができるでしょう。このようなよい活動について共有できることは喜びであり、より多くのこうした優れた働き手が訓練され、主のぶどう園に遣わされるように熱心に祈っていただけることでしょう。

タルカットの投稿が掲載された2年後、LLの1899（明治32）年4月号には、各伝道地のバイブル・ウーマンに関する記事がまとめて掲載されている。その最初に、ウーマンズボードのディレクターの一人である S.B.カプロン夫人による”The Bible Woman”と題された記事がある²⁷。その中でカプロン夫人は「バイブル・ウーマンは読者の現地の姉妹であり、外国伝道場で皆さんを代表して働いている」と記した。さらに、「バイブル・ウーマンは宣教師にとってなくてはならない協働者」であり、「活動が停滞している伝道地の教会や伝道そのものがうまくいっていない場所で、現地の人々に関わり、再び活動を盛んにすることができる強い味方」と述べる。そして、「長く外国伝道に携わっている宣教師ほど、バイブル・ウーマンの必要性を強く語る。伝道地の習慣を知り、適切な方法で伝道を進めるためにバイブル・ウーマンは欠かせない存在である」という。さらに、「バイブル・ウーマンが聖書の教えや伝道について学ぶことのできる

教育機関を整えていく必要がある」とも記している。このカプロン夫人の言説はまさにタルカットがその2年前に投稿した内容と一致するものであり、ウーマンズボードもバイブル・ウーマンの活動とその養成に関心を示し、組織的に関わっていかうとする姿勢を明確に見てとることができる。

3. 19世紀後半のハワイ

次に、タルカットのハワイでの活動を見るにあたり、19世紀後半のハワイの社会状況について概観しておく。

ハワイは1778年にイギリス人クック(James Cook, 1728-1779)が到着した後、1810年にカメハメハ大王がハワイ諸島全土を統一してハワイ王国が成立した。1820年、ABC FM 宣教師団がハワイに至り伝道を開始、同時にハワイ王国の近代化に貢献することとなった。近代国家をめざしたハワイは、捕鯨、農業を中心として発展したが、一方で疫病の流行によってハワイ人の人口が激減、農業振興のために労働力として海外移民の受け入れが始まった。日本からも移民を迎えるべく徳川幕府との間に協定が結ばれていたが、明治維新により無効となり、その後移民事業は途絶えていた。1881(明治14)年、ハワイ王国カラカウア国王が世界周遊旅行の途中に来日、日本人移民の再開を申し入れた。当時、経済不況に見舞われ日本国内では地方農民の出稼ぎ労働が深刻になっていたこともあり、日本政府はこの移民要請を受け入れた。1885(明治18)年から1894(明治27)年までの間に、政府が派遣するいわゆる官約移民約28,000人がハワイに渡航した。以後、移民業務は民間会社に取り仕切るようになり、1900(明治33)年までに約46,000人が送り出された。日本人移民は約8割が男性で、家族で来布する例はまれであった。主として砂糖プランテーションの労働者となった日本人移民だったが、労働条件は厳しく、生活環境も整わない状態であった。ハワイ社会の中でも日本人の評判は芳しくなかった。ハワイには日本人の他に中国、フィリピン、ポルトガルなどの移民がそれぞれの移民社会を形成、支配階級であるアメリカ人も含め、非常に複雑な社会構成となっていた。

ハワイ王国は1893(明治26)年にハワイ革命により君主制が倒れ、臨時政府がたてられた。この政変によってハワイはアメリカとの統合への道を進むこととなった。臨時政府は共和制を宣言してハワイ共和国となったが、アメリカとの合併については議論が続いていた。しかし1897(明治30)年、太平洋へのマニフェスト・ディステイニーを主張するマッキンレー大統領の就任によりハワイ合併の動きが加速し、翌1898(明治31)年アメリカ議会はハワイ併合案を可決、ハワイはアメリカに併合され、準州となったのである。

4. ハワイにおけるタルカットの活動—教え子との協働と新たな伝道形態の模索

1900 (明治 33)年 6 月、タルカットは休暇帰米を終え日本に帰任するべくサンフランシスコを出発した。タルカットは帰任にあたり、ABCFM 日本伝道団の要望により京都ステーションへの赴任が決まっていたが²⁸、前述のようにハワイで短期間の伝道にあたることになっていた。ハワイでの活動予定期間が当初はごく短いものであったことは、タルカットの乗った客船の到着を報じたハワイの英字新聞各紙が、タルカットを「神戸行きの船客」としていた²⁹ことから読み取ることができる。これら英字新聞および邦字新聞には、タルカットのハワイ到着後の活動についての記事が掲載されている。それらを順に見ていくと以下の通りとなる。

- ・ 1900 (明治 33)年 7 月 9 日 禁酒会月次会において日本語で講演³⁰
- ・ 8 月 7 日 ハワイウーマンズボード月次会においてホノルルの日本人に対する活動について報告³¹。併せて、中国で活動中のホノルルに馴染み深い宣教師の消息について報告³²。
- ・ 9 月 19 日 日本人教会において慰労と送別の会開催³³、150 人出席。9 月 29 日出港の日本丸にて日本へ向かう予定。
- ・ 9 月 28 日 Punahou College の新任者歓迎パーティー出席者名簿に名前あり³⁴

これらの記事に見る通り、タルカットは当初、約 3 か月の予定でホノルルでの日本人伝道にあたり、9 月末に日本に向かうことになっていたようである。しかし、送別会まで行われたにもかかわらずタルカットはさらにハワイにとどまることになった。この間の事情は、ハワイアン・ボード (Hawaiian Evangelical Association、以下 HEA) の記録からたどることができる。10 月 1 日のホームミッション委員会³⁵においてギュリックがゴードンからの書簡について報告、その内容は、体調不良のためハワイ赴任を取りやめさせてほしい、というものであった。これに関連して、2 件の提議がなされた。1 件目は、タルカットに 1900 (明治 33)年 7 月 1 日から月給 50 ドルを支払い、さらに今から 6 か月の滞在延長をしてもらうこと、2 件目はゴードンの代わりにシドニー・ギュリックを、2000 ドルの俸給と子供一人につき 100 ドルの手当、赴任旅費と 250 ドルの支度金を以て当地での活動のために招聘することである。2 つの案件は可決され、タルカットの月給は 60 ドルに訂正されている。この決定をいち早く報じた 10 月 3 日の英字紙記事³⁶によれば、来布予定であったアメリカン・ボード宣教師ゴードンが、健康上の理由から残念ながら日本で活動することとなり、タルカットが日本帰任を延期してしばらくの間その任に当たる、と記されている。同記事には、タルカットがギュリック夫妻不在の間の有能な働き手であったことから、当地での活動を続けることになったとある。この決定の直後、10 月 12 日附でタルカットは ABCFM 本部に報告の書簡を送っているが、その中では「ハワイアン・ボードの招請によって、6 か月間残ることになった」、「まだ日本行きの途中下船チケットを持っている」と書いている。一方、ハワイでの活動については次のように記している。

最近はプランテーションに出かけております。そこには福音に熱心に耳を傾ける準備のできている人々が多数おります。散らばって単独で活動している伝道者³⁷たちが協力し、そうした場所を定期的に巡回しなければならないのですが、有能な働き手を確保するのが難しい状況です。ですから、私は当面の働き場所はここだと思いました。ホノルルにも仕事はたくさんありますが、私は伝道者たちとともにほとんどの時間をハワイ島で過ごし、マウイ島でも過ごすつもりです。伝道者たちから丁寧な招請が来ており、私が出向くことは無駄にならないと思っております。

実際に、後日 11 月 20 日、ヒロに向かう船客名簿にタルカットの名があり³⁸、このヒロ行きに関する支出 25 ドルが 1901 (明治 34) 年 1 月 31 日のホームミッション委員会において承認されている³⁹。このハワイ島での働きについては、タルカットが 11 月 30 日附でコハラから ABCFM 本部へ送った書簡に記されている。その中でタルカットは、「近いうちに日本の友人たちと合流したい」と書きつつも、「ゴードン博士が残念なことに来布かなわず、さらに実際、この地での仕事はたいへん多いので、私が多少なりともその間を埋めなければならないと感じている」としている。そしてハワイ島での活動については次のように報告している。

ここでは一人の伝道者がそれぞれ 2, 3 マイル離れたプランテーション 5 箇所をまわっています。私は容易に歩いてゆける距離のキャンプにとどまっています。そこには 300 人ほどの日本人がおり、毎日彼らに接しています。他の場所でも 1, 2 回特別に集会を開いています。私は、思ったより元気に活動できていることを喜ばしく感じております。そして伝道者たちが、地道で忠実な活動の結果として豊かな実りが期待できるという、新たな喜びを感じられるようにと願っております。

しかし、続く 1901 (明治 34) 年 1 月 21 日附の書簡で、タルカットはハワイでの伝道について困難を感じているかのような報告を送っている。

当地の伝道者たちは熱心なクリスチャンと親密な関係を持つことがほとんどなく、彼ら自身が癒しと気付きを必要としているように見えます。あちらこちらで、私は心からの歓迎と協力を受けました。信頼関係を築くことが、たちまち成果をもたらすでしょう。心身の幸福に関心を持っていると示すことが、日本でよりももっと、見知らぬ土地で過ごすよそ者にとっては喜ばれるでしょう。(中略) 偶然にも、キリスト教国からきた人々の中に素晴らしい人々がございます。この人たちに、日本人への働き準備をする機会を見つけてもらえるようにできれば、と思います。

一週間前にホノルルに戻り、休養のために帰米するミス・ダッドレーと楽しい時を過ごしております。今は前を向き、近時に日本に向かうことを期待しております。次便は間違いなく日本からお送りすることでしょう。

この数か月後、5月13日附ホノルル発の書簡でタルカットは、自身の現状について次のように記した。

これまでと同じように、こちらでの切迫した事情のために日本への出発を遅らせることをお許しいただかねばなりません。こちらに残らなければならないのは明らかです。

(中略) ギューリック夫妻がすべての責任を負うべきではありません。ですが、それにかわる新しい人材がどれくらい早く見つかるかは誰にもわかりません。ここでは、霊的であることと同じくらい、知恵と経験を併せ持った人物が求められております。そのような人物こそ、この異国のコミュニティで歓迎され、幸いをもたらす有益な働きをなすでしょう。当地では、非常に重要な働きのためにこのような人物が必要であると確信しております。

当地滞在の延長をご辛抱いただき、何か月もしないうちに日本からご挨拶をお送りできることを期待しております。

書簡の最後は日本への早期帰任の期待をもって締めくくられたが、次便が神戸から発出されたのはそれから2年近く経過した1903(明治36)年3月であった。この間のタルカットのハワイでの活動については ABCFM 年次報告書、*MH* 等の記事、ハワイ地元紙の記事からたどることができる。それらを日付順にまとめると、以下の通りである。

- ・1901(明治34)年4月25日 日本人クリスチャン婦人会の年次大会で“Ethics”について講演⁴⁰
- ・6月18日 婦人労働者ホーム設立事前集会に出席⁴¹
- ・1902(明治35)年2月19日 YWCA で行われた金採掘に関する講演会に出席
- ・3月 ハワイの宣教師の集まり Cousin's Meeting 例会に出席
- ・6月4日 ハワイウーマンズボード年次総会に出席、10月に講演予定
- ・8月2日 “Japanese Homes”と題して投稿
- ・10月7日 ウーマンズボード月次会で“Forward Movement in Japan”のタイトルで講演
- ・11月25日 クラウディン号でヒロを出航
- ・11月29日 ヒロから到着
- ・12月2日 ハワイウーマンズボード月次会で日本人に対する活動について講演、こ

こでもなく日本に帰任することを明かす

・12月10日 チャイナ号で日本に向け出航

1901(明治34)年前半の段階では日本帰任を待ち望んでいたタルカットであるが、その後はここで見るように日米双方のクリスチャン女性と関わりながら、日本人移民女性への伝道に力を尽くすこととなった⁴²。

ここで、タルカットが伝道支援に参加するまでの、ABCFMのハワイ日本人移民に対する伝道について概観しておきたい⁴³。ABCFMのハワイ伝道は、サンドイッチ諸島ミッションとして1820年に始まり、ハワイアンに対する伝道が学校教育活動を入り口として行われてきた。その後、ABCFMの伝道方針の変化に伴い、1853年にサンドイッチ諸島ミッションはABCFMから独立、1854年にはHEAが創設された。HEAはハワイアンだけでなく中国、ポルトガル、日本からの移民に対する伝道をも担う組織であった。日本人移民伝道に関しては1885(明治18)年に着手され、1894(明治27)年にO.H.ギューリックがABCFMジャパンミッションに在籍しながらハワイでの伝道にあたることになり、HEAの日本伝道部長に就任した⁴⁴。ギューリックは1911年までハワイでの伝道活動を続けたが、その間、日本人移民の増加により同じABCFM日本派遣宣教師のゴードン、D.スカッター(Doremus Scudder, 1858-1942)らの来援を受けた⁴⁵。タルカットの活動期間はゴードン不在、スカッター着任の間ということになる。吉田によれば、当時のハワイ日本人移民社会では子弟の教育及び醜業婦が大きな問題となっていた⁴⁶。日本人移民の大多数は男性であったため、飲酒、賭博、買春などの社会問題が多発し、日本人移民社会の風紀問題は深刻であった。教育問題については、特に低年齢の子どもたちの教育環境として幼稚園、小学校が念頭に置かれ、両親の多忙の故に家庭教育を十分に受けることができない日本人移民の子どもたちに、日本語と日本の文化・習慣をきちんと身につけさせることが急務であった。日本人移民の子どもたちは言語や生活習慣を習得する幼児期に放置されてしまい、日本語がおぼつかないままになるばかりか、英語やハワイの言語を中途半端に身につけてしまっていた。このような子どもの成育状況は、日本人移民家族がハワイに定住するにせよ日本に帰国するにせよ、子どもの将来に悪影響を及ぼすことは明らかである。それはもう一つの問題である醜業婦と同様、日本人移民社会全体の評価を下げ、日本人がハワイ社会で生活することをますます難しくする大きな問題となっていた。

これらの問題の解決に、タルカットの教え子たちが重要な役割を果たしていた。タルカットがハワイで日本人女性への伝道に従事した時期には、これまでの日本での教育活動における教え子の女性4人が、ハワイ日本人社会で一目置かれる働きをしていた。甲賀ふじ、宗えい子、岸本つる、谷村かつである。

甲賀ふじは第3章でみたように、神戸におけるタルカットの最初の教え子のひとりであり、すでに幼児教育のエキスパートとして活躍してきた。1897(明治30)年9月、甲

賀ふじはホノルルの無償幼稚園組織の一つである日本人幼稚園に招聘されて赴任した⁴⁷。勝村とも子によれば、甲賀の招聘については、無償幼稚園を運営する The Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands (以下 FKCAAH) が、ハワイの日本人移民社会の状況に鑑み質の高い幼稚園教員を広く求めていたところに、O.H.ギュリック夫人を通じて名があがった。日本人だけでなく中国人、ポルトガル人などの移民とハワイ現地人というさまざまな人種の入り混じる子供の教育に当たらねばならない無償幼稚園においては、経験が豊かで最先端の幼児教育も学んできた教師が特に求められていた。FKCAAH がハワイウーマンズボードから派生独立した組織であったことから、甲賀のような最適な教師を招聘することができたと勝村は指摘している。甲賀は宗えい子とともに日本人移民の子どもたちの幼稚園教育に携わり、幼稚園の母の会を通して日本人移民女性の家庭環境の改善にも尽力した。さらに甲賀は日曜学校の教師として、また日本人教会のメンバーとしても活発に活動し、重要な働きをしていた。日本人の子どもの多くは両親ともに長時間の労働によって家庭でのしつけに余裕のない状態であったため、幼稚園に通っている間だけでなく、日本人教会の日曜学校やディスクールで常に子供たちと接することができる甲賀は、伝道と社会福祉の側面を持つ活動の両方を一貫して行える立場にあったのである。

宗えい子は前述の通り、来布以前から O.H.ギュリック夫妻を助けてバイブル・ウーマンとして活動してきた。日本からハワイでの伝道に転じたギュリックは、醜業婦問題を中心とした当時のハワイ社会における日本人移民女性の劣悪な生活環境を改善するべく、日本人移民女性への伝道の必要を強く感じていた。また同時に、日本人移民社会の多くを占める労働者階級の女性に対して社会福祉の要素を含んだ活動をも行うことのできる伝道者の招聘を考えていた。その候補者として、福岡とともに伝道活動をした宗えい子が念頭にあったとみられる。ギュリックはハワイウーマンズボードと連携して日本人女性伝道者の来布を進めた。その結果 1895 (明治 28) 年、宗はハワイにわたり、ギュリック夫妻の伝道活動を支援するとともに、ホノルル日本人教会婦人会のメンバーとして日本人婦人ホーム及び無償幼稚園の運営に携わることとなった。日本人婦人ホームは、弱い立場にある女性を収容保護する場所として 1901 (明治 34) 年に設立され、日本人教会婦人会が運営にあたり、宗がその責任者となった⁴⁸。これらの活動を通して宗は、キリスト教伝道にとどまらず、労働者階級の日本人女性に対する社会福祉につながる成果をあげることができた。また一方で、キリスト教という共通項からアメリカ人クリスチャン婦人との信頼関係を築き、日本人女性の中でも教会で活動する余裕のある婦人メンバーとも協力が可能であった。宗は女性でただ一人、HEA において日本人伝道に携わる伝道者として認められており⁴⁹、日米双方のクリスチャン社会でその立場を確立していたのである。タルカットは、先に見た通り在米中から宗の活動に注目して、バイブル・ウーマンの目指すべき姿とみなしていた。

岸本つるは、神戸の女学校を1884（明治17）年に卒業した第2回卒業生5名のうちの一人である⁵⁰。卒業後は学校に残って教鞭を取り、さらに梅花女学校でも英語を教えた。1900（明治33）年7月ハワイへ渡航⁵¹、ホノルルで結婚したが夫を亡くし、後半生はホノルルのY.W.C.A.で長年にわたって尽力した。岸本のY.W.C.A.での活躍を伝える消息は神戸女学院同窓会誌『めぐみ』にたびたび掲載されている。

谷村かつ⁵²は和歌山県の出身で、大阪で女中として働くうちにアメリカン・ボード宣教師のテイラーと出会った。テイラーを通じてキリスト教に接し受洗、テイラー夫妻の援助により看護婦の道に進むこととなった。1892（明治25）年、第5回卒業生として京都看病婦学校を卒業したのち、母校や伝染病隔離病院で働き続けた。1899（明治32）年、谷村かつは妹のすえの出産を助けるためハワイに渡った。すえはコハラ伝道・香蘭女塾での教育事業等に尽力した神田重英の妻である。同年7月にハワイに渡った谷村かつはホノルルにとどまり、以後、日本人病院の看護婦として、また助産婦として引き続き活動した。1904（明治37）年、40歳で病没した際はホノルル日本人教会で盛大に葬儀が執り行われ、花を手向けようと多数の人々が集まったという。谷村かつが京都看病婦学校に在学した期間はちょうどタルカットが教鞭を取っていた時期であり、スタッフとして産科専門の佐伯理一郎医師が指導してもいた⁵³。タルカットが谷村かつについて直接言及している記録は、現在のところ見いだせない。しかし、京都看病婦学校の教え子であり、ホノルル日本人社会でクリスチャンの看護婦として知られていた谷村かつとタルカットの間に全くかかわりがなかったとは考えにくく、タルカットはハワイ滞在中に何らかの協力を得ていたのではないかとみられる。

この4人の他に、実業家の尾澤忠元と結婚してホノルルに在住⁵⁴していた尾澤しづも神戸の女学校第3回卒業生である。尾澤は卒業後、創立時の松山女学校（現在の松山東雲学園）に無給奉仕を申し出て勤務、さらに熊本女学校で教鞭を取った⁵⁵。

4人の中には、タルカットが理想的なバイブル・ウーマンとして紹介した人物が2名含まれていた。甲賀と宗のハワイでの働きからは、タルカットが求めるバイブル・ウーマン像を描くことができる。それは、宣教師と協力して伝道を行うが主体的な伝道活動もでき、さらに伝道以外の社会活動ができる資質を持っている人物であると考えられる。同時期の日本における他教派、例えば米国婦人一致外国伝道協会（The Women's Union Missionary Society of America for Heathen Lands）の設立した偕成伝道女学校においては、養成されるバイブル・ウーマンの役割は宣教師に協力して伝道を助けることが中心であった⁵⁶。また、改革派の宮城女学校の事例においても、卒業生でバイブル・ウーマンとなった者は女学校で受けた聖書教育の知識を持って地域の伝道を補佐する働きを担っている⁵⁷。一方タルカットは、宣教師に協力するだけでなく、バイブル・ウーマン自身も社会に貢献できる技量を持っていることを重要視していたのである。つまり、バイブル・ウーマンは、伝道活動によってキリスト教の信仰を同じ日本女性に広めるだけ

でなく、社会での活動を通してより幅広い層、すなわち男性や普段は接することのない層の女性にもキリスト教の教えを伝えることのできる存在となるべきであるとみていた。

ハワイでのタルカットの活動についてはさらに、LL1902(明治35)年3月号に掲載されているタルカットの書簡抜粋からも知ることができる⁵⁸。この書簡においてタルカットは、自身の日本帰任はスカダー夫妻の来任次第であるとし、日本で起こっている大挙伝道と、この年始めごろからハワイで行われていた伝道活動について詳しく記している。

私たちは最近、年が明けて以降、路上伝道を行なって特別な伝道奉仕をしています。クリスチャン寄宿学校の男女生徒たちが、キリスト教の真理を記した明るい色の提灯や幟をもって、2つの行列の核となっています。路上で私たちがいちばんよく歌うのは「ジョージア行進曲」で、歌詞は路上伝道のために日本で作詞されたものです。人々が集まってくると行列は止まり、短いお話をします。そのあと、教会か礼拝堂まで行列についてくるように誘い、そこで長い礼拝を行います。数年間アメリカに滞在し、最近シカゴのムーディ・インスティテュートから日本に戻る途中の若い日本人のキニワ氏⁵⁹が幸いなことにこちらにいて、ほとんどの説教をしています。

4日間にわたるこの活動の成果を集計するようなことはもちろんできませんが、私たちは、「キリスト教について学びたい」と住所氏名を書いた250人の名簿を手に入れました。このことは個人への伝道活動につながるものです。60人以上が「キリストを救い主と認める」とサインをしましたが、私は、その全員がこのことが何を意味するか分かっているかどうかを疑わしく思っております。クリスチャンたちは人の心に訴える新たな神の力を感じて刺激を受け、私たちは収穫の年となることを期待しております。

詳しく紹介しているこの活動は、このころアメリカでモット (John R. Mott, 1865-1955) らによって組織された外国伝道志願学生運動 (Student Volunteer Movement for Foreign Missions) の一環であると思われる。文中の「キニワ氏」が学んでいたというムーディ (Dwight Moody, 1837-1899) の聖書学校などから海外伝道を志す若者が続出した。

また、いわゆる20世紀大挙伝道について、タルカットは地元英字紙に長文の投稿をした⁶⁰。また前述のように、この年の10月に開催されたハワイウーマンズボードの月次会で、日本の大挙伝道について講演し、その成果がいかによばらしいものであったかを強調して語っている⁶¹。タルカットは、実際に日本で体験していない大挙伝道についてなぜこれほどまでにハワイの日米クリスチャンに訴えようとしたのであろうか。その

理由として、タルカットが感じていたハワイでの日本人伝道の困難な要素—日本人伝道者と信徒との温度差や日本人移民社会の構造的問題—が、日本で成功を収めた大挙伝道という方法で取り除かれるとみたのではないかと考えられる。また、アメリカ人クリスチャンに日本の大挙伝道の盛況を伝えることによって、日本での伝道活動への理解と支援を訴える目的もあったとみられる。そうしてハワイの日米双方のクリスチャンに伝道に対する関心を引き起こし、ハワイでの伝道を成功に導く足がかりとしたのである。

5. 小括

日本での長く豊富な伝道経験を買われてハワイでの伝道応援を求められたタルカットにとっても、ハワイ日本人社会の様相は日本本土と全く異なり、伝道に困難を感じていたようである。その中でタルカットがバイブル・ウーマンとして信頼を置く甲賀ふじ、宗えい子の存在は、この2人がハワイの日米双方の社会で名を知られ、その活動が広く認められていたところから、タルカットの伝道活動にとって大きな助けとなった。彼女らは男性中心の日本人移民社会においても中心的な役割を果たしており、誰からも一目置かれていた。さらに、すでに深いつながりを持っている ABCFM 宣教師やハワイウーマンズボードを通じてアメリカ人社会とも自然と関係を作ることができており、当時のハワイキリスト教界の全方向に向いていたと言えることができる。タルカットはハワイにおいて、すぐれたバイブル・ウーマンが伝道地で重要な役割を果たしうることを実感し、甲賀ふじや宗えい子を理想としたバイブル・ウーマンの養成に自身の日本伝道の成果を還元するということを、日本帰任後の活動の中心に据えたのではないかと考えられる。

註

¹ 1895年12月22日附京都発

² *LL*, February, 1896, p.184

³ 旭光 1896(明治29)年3月5日号

⁴ 1897年8月11日付ニューロンドン発

⁵ 1898年5月13日付ニューロンドン発

⁶ *MN*, September, 1899, p.2

⁷ 1899年8月3日付オークランド発

⁸ *MN*, September, 1899, p.12, *MN*, December, 1899, p.12. *LL*1899年454-5頁には9月7日に開催された海外赴任宣教師の送別会の記事があり、日本赴任宣教師の中にタルカットの名前がある。

⁹ 1899年10月16日付オークランド発

¹⁰ *MH*1900年4月号161頁には、「2月9日にサンフランシスコから日本に向けて出帆予定であったミス・イライザ・タルカットは事故(accident)により引き留められ、後で出発となるで

あろう」とある

- ¹¹ *MH* 1900年7月号291頁に「6月6日サンフランシスコよりミス・イライザ・タルカット日本帰任」とある
- ¹² 1900年6月15日付 *The Hawaiian Gazette* には、6月12日入港の S.S.Gaelic 号でサンフランシスコから到着、神戸行の乗客の中に Miss E. Talcott の名がある
- ¹³ 吉田亮によれば、ハワイアン・ボードの書記エマーソンがゴードンに対しハワイ伝道への協力を求め、ゴードンはその要請を受け入れた。しかし健康上の理由からハワイ行きを辞退、その後急死したため、すでにハワイにいて伝道を助けていたタルカットがその任に当たることとなった。吉田亮「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」、同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』380-381頁、PMC 出版、1991年。
- ¹⁴ *LL*, December, 1896, p.553
- ¹⁵ *MH*, November, 1897, p.480
- ¹⁶ *MN*, November, 1898, p.12
- ¹⁷ *LL*, April, 1899, p.232
- ¹⁸ *LL*, June, 1899, p.421
- ¹⁹ *LL*, March, 1897, pp.98-102
- ²⁰ 日本のバイブル・ウーマンに関しては、鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン—失われた姿を求めて—」、『共立研究』第7巻第1号、2001年、1-10頁。栗原健「明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動～明治後期の年次報告から～」、『宮城学院資料室年報『信望愛』』第26号、2021年、36-49頁。
- ²¹ ダッドレーとバロウズにより創設された学校は当初は女子伝道学校 (Women's Bible School) と呼ばれており、1908(明治41)年、コザートが神戸女子神学校 (Kobe Women's Evangelistic School) と名称を改めた。
- ²² 表紙写真には”Bible Women in Japan”として3人の女性が写っているが、左端の女性については言及がない。
- ²³ Lieutenant George Clayton Foulk (1856-1893)はアメリカ海軍将校として東アジアで長年勤務したのち、1889年に同志社の数学教師として着任。1893年に不慮の死を遂げた。
- ²⁴ 村瀬かねについては竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』105-106頁、教文館、2000年。
- ²⁵ 加藤常子については竹中前掲書、103-105頁。
- ²⁶ 宗えい子については Kelli Yoshie Nakamura, “Yeiko Mizobe So and the Japanese Women's Home for Abused Picture Brides (1895-1905)”, *Amerasia Journal*, 36:1, pp.1-32, DOI: 10.17953/amer.36.1.456118723874082k に詳しい。また、竹中前掲書、85-89頁。吉田亮「ハワイ移民の母・宗栄子の生涯と信仰」『基督教世界』3420号、1985年。『故宗栄子女史と其の遺業』、私家版。
- ²⁷ *LL*, April, 1899, pp.146-148. Mrs. S. B. Capron はインド、セイロンで伝道に携わった宣教師の夫人でウーマンズボードの Director Member の一人
- ²⁸ ABCFM Japan Mission Annual Report
- ²⁹ 註12の *The Hawaiian Gazette* だけでなく *The Honolulu Republican* にも同様の記事がある
- ³⁰ やまと新聞 1900年7月7日号
- ³¹ *The Evening Bulletin*, August 8, 1900

- ³² The Hawaiian Gazette, August 10, 1900. このウーマンズボード月次会では、義和団事件に巻き込まれた宣教師をハワイに避難させて救援することが決定されている。タルカットは、そうした宣教師の消息を参会者に報告した。
- ³³ やまと新聞 1900年9月20日号、Evening Bulletin, September 20, 1900
- ³⁴ The Pacific Commercial Advertiser, September 29, 1900
- ³⁵ The Committee on Home Missions, October 1, 1900. この委員会はハワイで伝道を行っているキリスト教各派の超教派委員会である。
- ³⁶ The Pacific Commercial Advertiser, October 3, 1900
- ³⁷ 書簡の中では evangelist となっている
- ³⁸ The Evening Bulletin, November 20, 1900 等各紙に掲載
- ³⁹ The Home Committee, January 31, 1901
- ⁴⁰ The Pacific Commercial Advertiser, April 24, 1901
- ⁴¹ The Evening Bulletin, June 19, 1901
- ⁴² HEA Annual Report, 1901, 1902
- ⁴³ ABCFM の初期ハワイ伝道に関しては Albertine Loomis, *To All People : a History of the Hawaii Conference of the United Church of Christ*, Honolulu, Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1970 に詳しい
- ⁴⁴ O.H.ギュリックのハワイ着任に関しては、吉田亮「日本ミッション”支部”としてのハワイ伝道—O.H.ギュリックとハワイ日本人伝道—」、『キリスト教社会問題研究』36号、1988年、92-146頁。
- ⁴⁵ スカッターのハワイ伝道活動については吉田亮「ハワイ日本人移民とキリスト教越境伝道—来日アメリカ宣教師ドレマス・スカッターの事例—」、『同志社アメリカ研究』第45号、2009年、1-24頁
- ⁴⁶ 吉田前掲論文「日本ミッション“支部”としてのハワイ伝道」、127頁
- ⁴⁷ HEA Annual Report, June, 1898
甲賀ふじのハワイでの活動については勝村とも子「幼児教育史研究—無償幼稚園運動(1)ホノルルの日本人幼稚園と甲賀ふじの果たした役割[1897年~1902年]」、『樟蔭東女子短期大学研究論集』第9号、2006年、45-52頁。同「幼児教育史研究—無償幼稚園運動(2)甲賀ふじとハワイ島コハラ幼稚園[1902年—1904年]」、『樟蔭東女子短期大学研究論集』第11号、2010年、47-53頁。
- ⁴⁸ 吉田亮「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』、PMC出版、1991年、378-416頁
- ⁴⁹ また宗は1899年の日本人教役者会設立発起人として署名した8名の伝道者のうち唯一の女性である。杉井六郎『遊行する牧者—辻密太郎の生涯』、教文館、1985年、310-313頁。
- ⁵⁰ 『神戸女学院百年史 各論』209頁
- ⁵¹ 『めぐみ』第24号、明治33年7月発行、8頁
- ⁵² 谷村かつ(1863-1904)については飯田耕二郎「ハワイの日本人社会に尽力した基督者」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』、417-457頁、PMC出版、1991年に詳しい
- ⁵³ *LL*, September, 1892, pp.418-420 のベリーの記事

⁵⁴ 明治33年3月発行『めぐみ』第23号12-13頁に「在布哇 尾澤静子より」として書簡の抜粋が掲載されている。自身と甲賀ふじの近況について記しており、全文（かなづかい・漢字は現代のものに改めた）を以下に掲げる。

「(上略) 小妹事昨年九月夫の転業致候為共に渡航当地に移住致候 (中略) 当地にて同窓の友とては甲賀姉のみに御座候同姉は実に熱心に幼稚園の為御働き被為居候殊に昨年来ペスト流行に付同胞の悲境にある者の為には昼夜を別たず非常なる御働を被成しにより大に疲労せられ再度熱病に罹り一ヶ月前より病院に入りて治療なされ居候尤昨今は病熱大に減じ居候えども何分身体衰弱致居候何卒同姉のため御祈り下され度願上候小妹は当地に参りてより同姉に遇う毎に昔を語りて互に愉快を感じ申候実に同窓に養われし友ほどなつかしき者は御座なく候申上度事は山々御座候えども後の便にと申残候かしこ」

⁵⁵ 『神戸女学院百年史 各論』209頁

⁵⁶ 鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン—失われた姿を求めて—」、『共立研究』、第7巻第1号、2001年、1-10頁

⁵⁷ 栗原健「明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動～明治後期の年次報告から～」、『宮城学院資料室年報『信 望 愛』』第26号、2021年、36-49頁

⁵⁸ *LL*, March, 1902, pp.118-119

⁵⁹ 文中ではMr.Kiniwaとなっている。Kimuraの誤植とみられ、新潟県出身の木村清松か。

⁶⁰ *Friend*, November, 1902

⁶¹ *The Pacific Commercial Advertiser*, October 8, 1902

第7章 神戸ー日本伝道最後の9年

1. 日本伝道最後の9年ー再び神戸を中心として

ハワイで日本人移民伝道に従事したあと再び神戸に赴任することになったタルカットの日本伝道最後の9年を概観すると、神戸女子神学校での女性伝道者の育成、日露戦争に関わる活動、地方伝道応援の3点を特徴としてあげることができる。いずれも、タルカットの40年に及ぶ日本伝道の集大成となる活動であると同時に、明治最初期に来日した女性宣教師が、次世代の女性宣教師と日本人女性クリスチャンにその活動の成果を受け渡す場であったといえる。本章ではタルカットの日本伝道最後の9年間となる神戸を中心とした活動についてその内容を検討し、タルカットの宣教師としての活動に通底する女性に関わる要素が40年の間にいかに展開したかを解明してゆく。

2. 神戸女子神学校におけるタルカット

神戸帰任後のタルカットが活動の中心としたのは、神戸女子神学校¹であった。タルカットは、帰任後最初に神戸から ABCFM 本部に宛てた 1903(明治 36)年 3 月 6 日付書簡で、「ハワイでの活動を中止することは辛かったが神戸に来なければならない理由があった」と記している²。これは、神戸女子伝道学校での女性伝道者養成教育に関与することを指していると考えられる。同年 6 月の ABCFM 日本伝道団年次報告³には、すでに神戸ステーションメンバーの中にタルカットの名がある。女子伝道学校の項では、当時校長を務めていたコザド(Gertrude Cozad, 1865-1949)の帰米とタルカットの神戸帰任が報告された後、「ミス・バロウズ、ミス・タルカットの二人以上に尊敬され、愛されている女性宣教師は他にいないが、彼女らの年齢を鑑みると、もしミス・コザドが早く帰任できない場合は、手助けをする者が必要と思われる」とも記されている。

女子伝道学校は第 3 章に見たように 1880(明治 13)年に創立されたが、創立者のダッドレーとバロウズが神戸の女学校での活動に力を割かれることも多かったため、たびたび中断を繰り返しながら継続してきた。ABCFM の日本伝道 50 年を記念して発行された *Fragments of Fifty Years - Some Light and Shadows of the Work of the Japan Mission of the American Board* (以下、*Fragments of Fifty Years*) の神戸女子神学校の項の最初には、「神戸女子神学校はバイブル・ウーマンを養成する組織としては日本初であり、女性が教会に来ることが難しかった伝道開始当初には欠くことのできない機関であった」という記述があり⁴、ABCFM が女性伝道者養成のための教育機関を当初から重視していたことが明らかである。そのために、緒に就いたダッドレーとバロウズの活動を細々ながらも継続させていく必要があったと考えられる。

この女子伝道学校は 1889(明治 22)年に第 1 回卒業式を挙行、このとき卒業した 6 名は全員、伝道者となった。1892(明治 25)年、のちに校長となるコザドが着任、以後毎年数名の卒業生を送り出してきた。しかし 1890 年代後半には国家主義台頭の影響を受けて生徒数が減少し、再び休校を余儀なくされた。1897(明治 30)年に一時休校を脱し、1900(明治 33)年 3 月には卒業生 1 名ではあるが第 9 回の卒業式が行われた。次いで 1901(明治 34)年、長年にわたり女子神学校を支えてきたダッドレーが病気のため引退帰米せざるをえなくなり、コザドが後を引き継ぎ校長に就任した。タルカットが着任したのはこのような時期であった。タルカット着任の翌年 1903(明治 36)年の第 10 回卒業式では、5 名の卒業生を出すことができた。その後はほぼ毎年卒業生を送りだしており、1906(明治 39)年には寄宿舎の改築、1908(明治 41)年には新校舎の完成をみた。これらの施設整備に尽力したのは校長のコザドであるが、その間、教育面にタルカットが力を発揮していたと考えられる。1904(明治 37)年 1 月 4 日付けで神戸から ABCFM 本部宛発信した書簡⁵でタルカットは、神戸女子伝道学校の現況について述べた後、夏休みの間に教会をめぐり、各地にバイブル・ウーマンがいることを心強く思ったと記しており、神戸女子伝道学校での女性伝道者養成が着実に進められ、日本伝道の支えとなることに期待を込めていたと考えられる。

*Fragments of Fifty Years*によれば、神戸女子神学校の歴史は建物が確保された 1906-8(明治 39-41)年を境に 2 つに分けられるという⁶。

初期の生徒は年配の女性が多く、女子教育が高いレベルに達していなかったため総じて教育レベルが低かった。生徒の出自は上流家庭であり、意識や能力が高い女性たちであった。また、当時の神戸女子神学校の教育目標は、将来の伝道活動を担うための教育と、喫緊の伝道活動の継続を支えるという二面性を持っていた。修業期間は 3 年であったが、最初の 5 か月は座学、後の 7 か月は教師も生徒も自由に近郊や遠方への伝道に出かける、というものであった。

時を経て日本女性への教育が行き渡ると、女性伝道者に適当な年齢層の女子を見いだすことが難しくなった。より若い女性から尊敬されるに足る存在である、十分な教育を受けた層の女性の確保が難しくなっており、さらに女子教育の分野で女性伝道者があまり評価されない傾向になっている、という流れがあった。そのため、神戸女子神学校の修業年限は徐々に長くなり、入学者の年齢も引き上げられた。それによって、より学識が高く伝道に献身する意思の堅い女性が、キリストの名において、不人気であった女性伝道者への道に進んでくるようになった。

ここで指摘されている、より学識の高い女性の入学を期待するという点において、神戸女子神学校と当初から関係の深い神戸女学院との結びつきがタルカットによって

さらに強められたとみることができる。神戸女子伝道学校では、やむなく一時休校となった時期に在學生を神戸女学院で学びを続けさせる、という措置も行われていた。一方神戸女学院でも、伝道に関わる専門的な教育は行われていなかったものの、近隣教会や学校内日曜学校での奉仕が続けられるといった、キリスト教に関する活動は行われてきた。また『神戸女学院百年史』によれば、校内のキリスト教精神を高める活動として、1892(明治25)年ごろには個人が小集会を主催して信仰について語る「一個伝道」と称する催しが始められた⁷。これを経験した卒業生が家庭の主婦として、キリスト教主義女学校の教師として、自ら小集会を開く、あるいは知人を教会に誘うなどして各地で個人的な伝道活動を展開することとなった。こうした卒業生の活動が神戸女学院同窓会誌『めぐみ』に掲載され、在學生の愛校心、社会奉仕の精神、さらには信仰に至る道に刺激を与えてきた⁸。このような学内でのキリスト教精神の維持努力から、神戸女学院卒業後に神戸女子伝道学校に進む者も一定数続いてきた。神戸での最後の9年間、タルカットは神戸女学院でもしばしば講話を行ったり、矯風会など生徒の活動を支援したりしている。神戸女学院のキリスト教教育を支える活動も継続していたのである。タルカットは、神戸ステーション内で神戸女学院担当のボードメンバーにも名を連ねており、自身が関わる2つの学校の歩みを助ける存在として日本伝道団のなかでも認識されていた、とすることができる。

タルカットが神戸女子神学校に関わった9年間は、日本の女性をめぐる情勢が明治初期以降大きく変化した時期を経て、いまだ変わり続けている時であった。女性の教育機会の向上、家庭内での女性の役割の変化、女性の就業割合の増加、社会的立場の変化などが進行し、キリスト教の女性伝道者養成にもその波が及んだ。その中で、タルカット、ダッドレー、バロウズという、ABC FMの日本伝道初期に着任した女性宣教師によって基礎が作られた女性伝道者養成が、次の世代の女性宣教師へと引き継がれ、さらには日本人との協力関係の中で発展していく過渡期にあたる時期に、再びタルカットの経験と技量が必要とされていたと考えられる。創立期神戸女学院での教育、地域、家庭にある女性、監獄にある囚人、傷病兵、捕虜、移民といったさまざまな対象への伝道経験、看護を志す女性へのキリスト教教育など日本派遣宣教師の中でも非常に多彩な経験を持つタルカットの存在は、高齢になっていたとはいえ貴重であったといえるであろう。

後で述べるように、同じ時期にタルカットは鳥取、札幌、宮崎などへの伝道応援に従事することになる。その際に現地で協力したのは日本伝道最初と最後の神戸時代の教え子や関係者たちであった。自らが日本伝道によって構築したクリスチャン女性のネットワークの重要性や意義が応援伝道先で活用され、それを実地に示すモデルともなっていたといえることができる。

3. 日露戦争とタルカット

タルカットが神戸に帰任して1年あまり後の1904(明治37)年2月、日露戦争の戦端が開かれた。大国ロシアとの戦争は、日本の国内外情勢に大きな変化をもたらしたのみならず、日本のプロテスタントキリスト教界にも大きな影響をあたえることとなった。

日露戦争に直接関係する活動にタルカットの名が現れるのは、同じく神戸で活動していた宣教師アッキンソンによる *MH* の記事で、アッキンソンが神戸で発行されていたキリスト教新聞『旭光』5000部を出征兵士に送るための作業を、タルカットがバロウズと共に手伝った、というものである⁹。アッキンソンは記事の中で、出征兵士が戦地に向かうまで、あるいは戦地で読めるものを配布することは彼らにとっても好都合で、ふだんであれば手に取らないキリスト教関係の読み物も、出征兵士の心には格別に響くであろうと述べている。当時の『旭光』にはキリスト教界の記事だけでなく、出征兵士の関心を引くような記事も掲載されていた。例えば開戦直後の明治37(1904)年3月1日発行紙には、「広島通信」として次のような記事が掲載されている¹⁰。広島キリスト教界が協力して兵士慰労に努めていることがわかる。

去月21日当市の各派基督教徒連合して戦時基督教徒軍人慰労会を組織し将来書冊配布、特別説教会、軍人遺族、病者訪問等熾に運動せんことを決議し、会計に星野又吉、ブローカ前川、書記に武本喜代蔵、釘宮辰生、ヘーガ、庶務に村田里、木村竹次郎の諸氏当選、今や着々其運を初めつつあり過日は英国聖書会社の寄贈に係る聖書二万四千を配布し猶種々の方面に向て活動し初めたり。

また、同年に発行された紙面には「軍人とその信仰」、「軍隊通過と神戸奉公同士会」、「聖書を懐いて戦死」、「軍人慰労演奏会」、「勇ましき臨終」、「基督に在る二軍人の戦死」といった日露戦争関係記事が見られ、クリスチャンでない兵士の読み物として興味を持ってもらえるような記事を選び掲載していたと見られる。

ABCFM 日本伝道団もまた、1903-04年の年次報告で日露戦争について詳細に取り上げている¹¹。この年の日本伝道団書記のデフォレスト (John Kinne Hyde DeForest, 1844-1911) は、各地の宣教師から寄せられたさまざまな見解を含む報告を年次報告書の中に5ページにわたって紹介し、最後に、「この戦争はこれまで日本が経験したことのない高いモラルと精神性が要求されていくものとなるであろう。そしてこれまで閉ざされていたキリスト教の影響力という広い扉をすでに開いたと信じている」と記した。ここにみられるように、日露戦争は、日本において1890年代に国家主義の台頭によって後退したキリスト教の教勢を回復する機会として捉えられていたと考えられる。そのキーワードとして「モラル」と「精神性」が浮かび上がっているのである。

また、デフォレスト自身が、年次報告書にこれだけのページを割くのは多すぎると思われるかもしれないが、と断ってはいるものの、ABCFM 日本伝道団が日露戦争の開戦を日本伝道の重要なポイントになるととらえていたことは確かである。ABCFM 日本伝道団は、続く 1904-05 年も緊急委員会を設置し、日露戦争関連の伝道事業を継続することとしている¹²。

ABCFM 日本伝道団の日露戦争に関わる活動については、*Fragments of Fifty Years* の日露戦争に関する項に、次のような記述がある¹³。

日本とロシアの間に 1904 年に勃発した戦争は、多くの女性宣教師たちによって高められた伝道の有効性に対して、多くの扉を開いた。彼女らは 10 年前にミス・タルカットによって示されたものに勝るとも劣らない、向上する精神を持った女性宣教師たちである。ある者は、鉄道の駅に向かう一団に合流した。戦地に向かう兵士たちに、花やお茶や読み物を渡すのを手伝うためである。やがて戻ってくる列車は傷病兵でいっぱいになった。彼らは包帯を取り換えてもらったり、手厚い看護が必要であったりした。大阪やその他の場所の大きな病院でも、手助けや、直接の伝道活動の機会があった。傷病兵たちは退屈な時間を明るくしてくれる訪問者を歓迎し、病棟に入る許可を得るのはたやすかった。看護帽、毛布、患者用のきものにはすべて赤十字のしるしがついていて、そのことは傷病兵たちにそのしるしの本来の意味をたやすく語る機会をもたらし、温かい助けが必要としている人に与えられることを象徴するにふさわしい理由の説明をも容易にした。宣教師がある患者に語りかけ始めると、周りの人々が集まってきて、この外国人が何を語るのか知りたがり、彼のメッセージに静かに耳を傾け、その内容を理解した。大阪のミス・ダニエルズと松山のミス・パームリーがこの活動の中で際立っているだろう。ミス・パームリーは何人かの将校や兵士を 2 か月近く自宅に寄宿させ、またロシア軍の捕虜とも特別な関係を築いていた。

この記述については、ABCFM 日本伝道団で長らく活動した宣教師ケーリが日本のキリスト教史をまとめた *A History of Christianity in Japan* の中にも同じような内容の箇所がある。前述の文中で特に「タルカットの 10 年前の活動」に言及し、日清戦争時にタルカットが広島陸軍予備病院を中心に行った傷病兵や捕虜を慰問する活動が、日露戦争時の女性宣教師の活躍の原点になっている、としている。タルカットの日露戦争に関わる直接の活動がわかる記録はほとんどなく、この時期のタルカットの年齢、日本伝道団内での役割から見て、日清戦争時のような積極的な活動は難しくなっていたと考えられる。一方で、日露戦争へのタルカットの直接の関わりは薄い、すでに日清戦争時にその先鞭をつけ、そのことが日露戦争時に評価されていたことは注目に

値する。

日露戦争時には、日本のクリスチャン女性も積極的に活動した。1905(明治 38)年 5 月に開催された関西婦人大祈祷会における各教会の活動報告には、この 1 年は各教会とも軍人遺家族、傷病兵、俘虜等の慰問に忙しかった、とあり、キリスト教会にかかわる女性たちが慰問活動を行っていたことがうかがえる¹⁴。また関西基督教徒連合婦人会は「在露国日本軍人俘虜慰問寄附金」を募集、京都の共愛看護婦会に募金事務局をおき、ロシアで捕虜となっている日本兵士に慰問金を贈る活動を展開している¹⁵。

ここで、日本人クリスチャン女性の団体として見ておかねばならないのが日本基督教婦人矯風会(以下、婦人矯風会)である。1886(明治 19)年の創立以来、禁酒・廃娼運動を中心として活動してきた婦人矯風会は、日露戦争時には慰問袋の導入によって活動範囲を大きく広げることができた。慰問袋の原型は米西戦争時にアメリカの女性たちが兵士に送った *comfort bag* であり、アメリカのクリスチャン女性の活動にヒントを得たものである。婦人矯風会はこれに誰でも参加できる仕組みを作り、袋の中に聖書や讃美歌、パンフレットを入れることによってキリスト教の自然な浸透と本来の目的である兵士の慰藉の両立に成功したといえるだろう。婦人矯風会のこの活動は「戦争協力」の側面があることも否めないが、南北戦争を機としてアメリカのクリスチャン女性の団体活動が盛んになっていったことを考え合わせると、戦争が一つの大きなきっかけとなって女性団体の活動が活発化することは自然な流れであるとも言うことができる。

タルカットと婦人矯風会の間にも少なからぬ接点があった。タルカットは神戸帰任翌年の 1903(明治 36)年 4 月に神戸で開催された婦人矯風会第 10 回大会に出席し、ハワイの矯風活動について講演した¹⁶。また、1897(明治 30)年、婦人矯風会神戸支部の設立と時を同じくして神戸女学院内にも婦人矯風会神戸女学院支部が組織された¹⁷。これは婦人矯風会としては日本初の青年部支部であり、当時のソール院長 (Susan Annette Searle, 1858-1951) が中心となって活動、多数の生徒が参加していた。タルカットは婦人矯風会神戸支部及び神戸女学院矯風会の例会時に随時招待され、感話を行うなどしている。

以上見てきたように、タルカットの日露戦争に関わる活動は、ABCFM 日本伝道団が日本伝道再活性化の好機であると捉えて伝道活動を展開しようとしていた意気込みと比べると必ずしも深く関与していたとは言えない。特に、「日本のナイチンゲール」と称された広島での活動が評価された、10 年前の日清戦争時と比較するとその違いは大きい。タルカット自身の年齢などによるところも大きいですが、この 10 年間の日本女性を取り巻く社会的環境の変容により、タルカットが 10 年前に行ったような活動が日本の女性にも可能になったと考えられる。さらに、クリスチャンか否かにかかわらず、日本人女性が組織を結成したり、看護婦などの職業に就く自由度が増し、社会全

体もそれを否定的に見なくなるという変化が起こってきたといえることができる。のちに婦人団体の一大組織となる愛国婦人会が結成されたのもこの時期である。こうした日本社会での女性の立場の変容をタルカットは慎重に見計らい、自身の以前の活動とのつながりを保ちながらも次の世代の女性宣教師や日本人女性伝道者らへ伝道活動を引き継いでいこうとした。またそのなかで、日本の現状に即した伝道方法をも示していく過程であったとも考えられる。

4. 各地の伝道支援活動

タルカットは9年間の神戸在任中、タルカット本来の活動のあり方ともいえる、各地への伝道支援もしばしば行っている。1904(明治37)年7月には津山へ、1905(明治38)年は姫路、京都、琵琶湖対岸地方など近畿圏内への伝道、1906(明治39)年9月には札幌でのテント伝道に参加、1909(明治42)年4月には鳥取、そして1910(明治43)年10月から約半年、宮崎伝道の応援に赴く。このなかで、津山と鳥取はタルカットにとっては岡山ステーション在任時に伝道に携わっていた場所であり、近畿圏内各地も最初の神戸ステーション在任時に伝道に出かけていたところである。それぞれの場所には旧知のクリスチャンや教え子がおり、ABCFM 日本伝道団としてもタルカットはまたとない伝道応援となる人材であったと思われる。

1904(明治37)年7月の津山伝道については、*MN*に次のような記事が掲載されている¹⁸。

ミス・タルカットは津山に1週間ほどの伝道旅行に出かけた。モリタ夫人(筆者註:津山教会の守田幸吉郎牧師夫人か)とともに旧知の人々のつてを頼って伝道を行った。(中略)その結果、教会から離れていた男性が教会に戻ってくるようになった。

1905(明治38)年の近畿地方を中心とした伝道活動については、*LL*に掲載されたタルカットの書簡により知ることができる¹⁹。タルカットは次のように記している。

私が特に活動している活田教会は小さな教会です。ここでは我々の生徒がひとり、夏休みを利用して奉仕しています。この教会だけで90軒程の傷病兵家族を訪問しなくてはならず、いそがしい教会信徒の女性たちでそのうち4,50軒を、残りを我々二人で訪問することになるでしょう。私は最近、ここから40マイル離れた姫路にいますが、ここのバイブル・ウーマンは週に40回も呼ばれており、彼女には休息が必要です。けれども、私たちはこの状態をたいへん楽しんでいます。(略)

姫路では日本人の協力者しかおらず、私は宿屋に泊まっています。(略)2週間で、若い女性のバイブル・ウーマンは疲れ切ってしまいました。それで、土曜日

は休んで、私の古い友人たち何人かを訪問するようにしてもらいました。

それから、琵琶湖の対岸からの招来がありましたので、4 日半の間に3か所を訪問しました。それぞれの場所に知人がおり、私は一人で参りました。これはたいへん厳しい活動でした。というのも、日本の宿にはプライバシーというものがなく、私が会合に出席していない時はほとんど、誰かに声をかけられて話をしなければならなかったからです。(略)

タルカットによるこの伝道報告を見る限り、教え子や女性伝道者の働きもさることながら、タルカット自身もまだ伝道の現場で必要とされており、その上で日本人女性による伝道活動の支援を行っていたことがわかる。

1906(明治39)年9月には、札幌を訪問している。札幌では、産業博覧会場に設けられたテントでの伝道に参加したとみられ、当時札幌で伝道に当たっていた ABCFM 宣教師のローランドが「いつもと同じように、タルカットは求められていることをした」と *MN* に記している²⁰。

1909(明治42)年4月には ABCFM 女性宣教師で、当時岡山ステーション在任のウエンライト(Mary Ellen Wainwright, 1862-1918)とともに鳥取を訪れている。*MN* の記事²¹によれば、タルカットは東から西へ、ウエンライトは西から東へ進み、10日かけて伝道旅行を行った。タルカットは、かつて岡山ステーション在任中の1889(明治22)年秋から翌年3月にかけて鳥取で伝道しており、その当時関わりを持った女性たちが各地で集まった。鳥取で開かれた講演には多くの女性が参加したという。また、タルカットの来訪をきっかけに古いクリスチャンたちが再び集うことになった、とも記されている。

そして1910(明治43)年には、宮崎伝道の応援に赴くこととなった。タルカットの宮崎派遣は、この年5月30日に開催された ABCFM 日本伝道団年次総会の席上において要請された。*MN* によれば²²、伝道に当たっていた ABCFM 宣教師オールズ夫妻(Charles Bushnel Olds, 1872-1971 and Genevieve W. Olds) の賜暇帰米により宣教師不在となっていた宮崎に、タルカットとウエンライトが、他によい方法が見つかるまで一時的に所属のステーションから応援にあたることになった、とある。宮崎伝道応援について、タルカットは *LL* に寄せた書簡で次のように記している²³。

私が約8年前に日本に帰任してからの働きは、神戸にある女子伝道学校と関係するものでした。昨秋、ミス・バロウズが、30年前にミス・ダッドレーとともに始めた女子伝道学校に戻り、ミス・コザドとミセス・スタンフォードもそこでも働くようになったので、私はもはや神戸にとどまる必要がなくなりました。そこで、少なくとも4つのステーションから応援要請を受けていたのですが、宮

崎が最も急を要するところでしたので、10月の初めにこちらに参りました。宮崎は九州にあり、この地域は日本の中央からは遠いため何事も10年は遅れている状況ですが、進歩し続けています。

ここには小さな教会があります。日曜学校は、4か所で4つの異なる曜日に公立の学校の午後の授業が終わった後の時間に続けられてきました。これらの日曜学校は、神戸聖書学校の二人の生徒により行われております。神戸女子神学校の現在の教え子の一人が私の手伝いをしてくれていて、2つの病院の患者を訪問しています。私たちは医師らと良好な関係を保ち、このようにして知り合った医師のうち5名はすでにクリスチャンまたは熱心な求道者です。また、家庭で女性と聖書を読む会を週4日、1日1か所で開いており、そのうち2か所では近所の女性も集まってきます。また、求めにより週に1回、公立の中学校や高等学校の学生や卒業生に英会話を教えています。彼らは教会に集まり、英会話の授業の前には聖書を学んでいます。別の日には、同じ学校の5人の生徒がやってきて、英語と聖書を教えてほしい、と言ってきました。また、師範学校の生徒からも英会話を教えてほしいと頼まれていて、この要望を聞こうと考えています。

私は現在、クラーク夫妻²⁴と一緒に住んでおります。彼らはこの地域唯一の外国人宣教師で、唯一の外国人でもあると思われます。ミスター・クラークはほとんどいつも地域の外に伝道に出かけており、ミセス・クラークは病弱です。けれどもおよそ20人のさまざまな公立学校の若女子生徒が、敷地内に住んでいます。夜、彼女らにとって最初の聖書講義ができるのは私に与えられた特権です。今晚はマタイ福音書5章の幾節かを学びました。女性の中に一人だけ、信仰告白したクリスチャンがいますが、あとは初めて祈るような人たちです。週2回、1時間、彼女たちの幾人かに英語を教えることもあります。こうした決まった奉仕以外にも、私は時間と体力の許す限り召命に応えるようにしています。特に、教会に来ることができない教会員のため、また道のあるところにはどこにでも。また、敷地内にある幼稚園と、毎日2時間開かれる盲人のための教室²⁵についてもお知らせしなくてはなりません。後者は、クリスチャンで、教育を受けた盲人によって指導されています。日本でもここ何年かの間に「ブライユ・システム」が導入されました。幼稚園と盲人の教室について私は責任を持たなくてもよいのですが、これら2つの事業がキリスト教への偏見をなくす大きな役割を果たしていますので、特に言及しました。

どうか特にこの働きを覚えて祈りに加えていただき、私が役割を果たすことのできる強さが引き続き与えられますよう願っております。

タルカットは1910(明治43)年10月初めに宮崎に赴き、翌1911(明治44)年3月2日

に神戸に戻った²⁶。

宮崎は、タルカットにとってはこれまでの応援伝道地のようになじみの深い場所ではなかった。1894(明治27)年に日向伝道に向かったことはあったが、短期間であった。また、岡山ステーション在任中に支援していた石井十次が、宮崎県茶臼原に新たな孤児収容施設設立を企図した開墾事業を進めていた、というきっかけもあるが、ほぼ新しい伝道地と言ってもよいところであった。

ABCFMの宮崎伝道は、1891(明治24)年、タルカットの書簡にあるクラーク夫妻の着任によって宮崎ステーションが開設され、本格的に始まった。クラークは「巡回宣教師」と呼ばれ、宮崎の各地を巡回して伝道を行っていた。巡回先には日本人牧師が牧会を行う教会があり、その活動を支援するという形であった²⁷。クラーク夫人は宮崎にとどまり、5～30名程度の少女のためのホーム運営に携わった。このホームでは、少女たちは公立の学校に通い、学校から帰るとキリスト教の教えを学ぶことができるようになっていた。ホームで生活した少女らはクリスチャンになることもあり、また優れた家庭婦人、女性伝道者、ソーシャルワーカーとなった²⁸。タルカットが書簡の中で触れている「敷地内に住む若い女性」とは、このホームの少女たちのことを指していると思われる。

タルカットの宮崎での活動は、病院訪問、女性への伝道、英語の指導、寄宿形式のホーム運営など、これまでの日本伝道でのさまざまな経験を生かした多岐にわたるものであった。その活動に現在の教え子を伴い、後継者の養成をも進めた。さらに幼稚園や盲人教育にも関心を持ち、新たな伝道の方向を探ることも行っている。結果的にタルカットの伝道支援活動の最後となった宮崎において、長年にわたる日本伝道の成果が遺憾なく発揮されたと言えることができるであろう。

5. 小括

タルカットが日本伝道にあたった最後の9年間は、神戸女子神学校での女性伝道者養成を中心として、自らが創立に関わった神戸女学院や神戸地区の諸教会とも関わりをもつという、最初に赴任した神戸での活動が主体となった。その一方で、ABCFM日本伝道団の要請に応じて伝道応援の必要な日本の各地に出かけていく伝道スタイルも変わらず継続し、津山、鳥取、札幌、宮崎での伝道でその力を発揮した。ここでは、長年の日本伝道経験によって培った各地の旧知のクリスチャン女性とのつながりから、あるいは現在の教え子である女性伝道者を伴っての伝道活動を展開していった。タルカットが日本赴任直後の時期に経験した伝道とは異なり開拓伝道の要素は少なくなっていたが、タルカットが教育と伝道の両面で築いてきた女性のネットワークが生かされた新しいスタイルのキリスト教伝道が実践されたといえよう。

神戸女子神学校における女性伝道者の養成は、ABCFM日本伝道団の方針上も当初

から継続されてきた事業であった。ABCFM 日本伝道の最初期に来日したダッドレーとバロウズによって始められた女性伝道者養成教育は、学校として軌道に乗るまでに年月を要したが、確実に日本人女性の自立した活動として伝道者を位置づけていく機関となった。女性宣教師たちはまさに、伝道者を志す日本人女性のロールモデルとなり、女性伝道者によるキリスト教伝道を日本に定着させた。その中で、女性伝道者の数を増やし、各地にひろめ、さらにはそのネットワークを活用してキリスト教伝道を展開するという流れが作られていったのである。神戸女子神学校が女性伝道者養成機関として発展していく時期に、伝道経験が豊富でクリスチャン女性との広いネットワークを持つタルカットの力は貴重なものであった。

タルカットはまた、日露戦争という、プロテスタントキリスト教日本伝道にとって重要となった時期も経験した。タルカットが日露戦争に直接関わる活動を行った記録こそ少ないが、先立つ 10 年前、日清戦争時のタルカットの活動が日露戦争時のプロテスタントキリスト教宣教師および日本人女性クリスチャンの活動の先駆けとなっていたといえることができる。クリスチャンが戦争に直接加担しない方法で戦時にも活動し、クリスチャンとしての価値を高める方法は、兵士とその家族の慰藉、傷病兵の看護、広く戦争によって心身の傷ついた人々を敵味方双方にわたって支援するというものであり、これはアメリカでは南北戦争時に組織的に行われていたことであった。タルカットが日清戦争時にこれらの活動手法を実践し、日露戦争時にはさらに多くのクリスチャンが活動することとなった。また、特にクリスチャンに限らず日本の女性全体の活動としても広まっていったのである。

タルカットは 1907(明治 40)年、有馬で開催された ABCFM 日本伝道団第 35 回年次総会に、他の長年伝道を続けている宣教師らとともに出席している。また 1909(明治 42)年はプロテスタントの日本伝道開始 50 周年、ABCFM の日本伝道開始 40 周年にあたり、10 月に東京で行われた 50 周年記念会にタルカットは他の 3 名の女性宣教師とともに参加、聖書の教授法につき講演をした。このことも、タルカットが日本伝道で得た経験が尊重されていた証であるといえるのではないか。

一方、タルカット自身が書簡の中で述懐しているように、タルカットが日本に不在であった世紀転換期、さらにはこの神戸ステーション所属の 9 年ほどの間に、日本のクリスチャンを取り巻く状況は大きく変化した。特に、女性クリスチャンの状況の変化はより大きかったのではないかと考えられる。女性が教育を受け、職業に就く機会も増えた。また、アメリカや諸外国の事物や思想が自由に流入するようになり、それらの影響を受ける場面も増えた。婦人矯風会のようなアメリカのクリスチャン女性団体由来の組織が日本独自の展開を遂げ、日本人女性が自力で発信して社会的影響力を持つ団体も形成された。その根底には明治期日本社会全体の展開、キリスト教と日本人の関係の変化、さらには派遣宣教師自体の世代交代といった要因もあり、タルカッ

トが行ってきた社会改良の要素を持つ伝道の内容も変化せざるを得なかった。

そのような時期にあったタルカットの最後の日本伝道活動は、伝道の力が十分及ばない場所の人々、さまざまな意味での戦争の犠牲者、障害を持つ人々に向けられていた。その対象は変化したとはいえ、常に社会的弱者への伝道をめざし、そうした弱者をなくしていくことによる社会改良の実現を考えていたと言える。このようなタルカットのこだわらない伝道姿勢により、ABC FM の伝道方針から逸脱することなく伝道地日本の現状に合致した活動を行うことができたのではないか。タルカットのABC FM 最初の日本派遣女性宣教師としての経験とその成果が、伝道開始から半世紀を経たこの時期においても評価され重要視されていたのは、タルカットが常に実践してきた社会改良を根本に置く伝道活動によるものであった。

最後に、タルカットが女性クリスチャンに残した課題について触れておきたい。40年にわたってタルカットが目指した社会改良につながる伝道活動は、地域の面でも分野の面でも広くその成果が残された。タルカットが努めてきた女性伝道者の養成についても、ある部分では軌道に乗ってきた。しかし、それらが統合され完成した形態である、女性クリスチャンのネットワーク形成という点については、タルカット自身の作ったネットワーク活用にとどまっていたことは否めない。女性クリスチャンの社会的活動を継続的に展開する手段として重要なネットワーク形成を、タルカットは次世代に託したと言えるのではないか。

註

¹ 神戸女子神学校は1880(明治13)年10月、ABC FM 女性宣教師ダッドレーとバロウズにより女子伝道学校として6名の生徒をもって神戸に創立された。校名は、当初は女子伝道学校、1884(明治17)年から1908(明治41)年までは神戸女子伝道学校、以降は神戸女子神学校。以下、本章の神戸女子神学校に関する記述は主として『Thy Will Be Done 聖和の128年』による。神戸女子神学校に関しては他に、竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』、『神戸女子神学校五十年記念誌』を参照した。

² 1903年3月6日附神戸発

³ *Japan Mission Annual Report*, 1903

⁴ *Fragments of Fifty Years*, p.75

⁵ 1904年1月4日附神戸発

⁶ *Fragments of Fifty Years*, p.77

⁷ 『神戸女学院百年史 総説』p.95

⁸ 前掲書、p.107

⁹ “Letters from the Missions – Japan Mission; Military Enthusiasm” *MH*, June, 1904,

p.251

- ¹⁰ 『旭光』第10巻第3号、明治37年3月1日発行、柱部分
- ¹¹ *Annual Report of Japan Mission, 1902-1903*
- ¹² *Annual Report of Japan Mission, 1903-1904*
- ¹³ *Fragments of Fifty Years, pp.50-51*
- ¹⁴ 『基督教世界』1132号、明治38年5月11日発行、8頁
- ¹⁵ 『基督教世界』1134号、明治38年5月25日発行、8頁
- ¹⁶ 『旭光』第9巻第5号、明治36年5月1日発行、3頁。『基督教世界』1024号、明治36年4月9日発行、7頁。
- ¹⁷ 『神戸女学院百年史 総説』、106頁
- ¹⁸ “Changes in Tsuyama” *MN, Vol.VIII, No.1, 1904, pp.8-9*
- ¹⁹ “Missionary Letters – Japan; From Miss Talcott”, *LL, February, 1906, pp.73-75*
- ²⁰ “Sapporo Doings” *MN, Vol.X, No.2, 1906, p.20,*
- ²¹ “Misses Talcott and Wainwright’s Visit”, *MN, Vol.XII, No.8, 1909, pp.140-141*
- ²² “About Mission Meeting” *MN, Vol.XIII, No.9, 1910, p.190*
- ²³ “Missionary Letters – Japan; From Miss Talcott” *LL, April, 1911, pp.169-171*
- ²⁴ ABCFM 宣教師 Cyrus Alonzo Clark (1851-1933)と Harriet Mitchell Clark (1856-1922)。1887(明治20)年熊本に着任、1891(明治24)年宮崎に転任。
- ²⁵ 1910年に開設された日向訓盲院。京都盲啞院で学んだ関本健治が教鞭をとっていた。
- ²⁶ “Personalia” *MN, Vol.XIV, No.6, 1911, p.101*
- ²⁷ 塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教』、144頁
- ²⁸ *Fragments of Fifty Years, p.98*

結語

19 世紀後半期は、アメリカにとっても日本にとっても時を同じくして大きな時代の
変革を迎えた時期であった。本論文第 1 部でみたように、アメリカでは南北戦争が、日
本では明治維新がその転換点となった。本論文の視点の中心とした、女性をとりまく状
況についてまとめると、アメリカ国内においては南北戦争を機に女性の社会活動への参
加が急速に進展した。経済活動という点からは、都市化と諸産業の発展及び南北戦争中
の男性労働力の不足を補う必要から職業に就く女性が増加した。また文化的な活動とい
う点からは、世紀前半から進んでいた女性のボランティアな社会活動が全国的に組織化、
再編されてより強固なものとなって発展する機会となった。米プロテスタントの海外伝
道において、19 世紀後半期に女性宣教師の活動が盛んになっていく流れは、おおよそ
こうした状況の中で形成されていった。小檜山が指摘したように、女性宣教師を支援す
る女性団体が組織化されて積極的に支援活動を展開して女性宣教師が職業として成り
立つ環境が整い、また女性の就業機会が広がっていた社会状況から、女性宣教師という
職業選択が可能になったのである¹。一方の日本では、明治維新という社会体制の激変
のなかで、女性の社会進出は徐々に進んでいた。江戸時代の封建的社会秩序が解体され、
社会階層も制度上は緩やかになり、さらに諸外国から新思潮が流入すると、地域差はあ
るものの女性もその恩恵を受ける機会が増していたとみられる。寺子屋制度の普及によ
り、初等教育段階では男女の格差がそれほど大きくなかったと言われる日本では、女性
と社会との接触機会が多くなればその状況を理解することに関しては難しくなかった
と考えられる²。

タルカットは、このような日米の状況の中、女性宣教師として来日した。プロテスタ
ント宣教師の本分はあくまでも伝道活動であり、タルカットは特に日本女性への伝道を
担うという使命をもって赴任してきたのである。その初期の段階では、まずは日本語の
学習をし、前任宣教師たちの手伝いをして活動の範囲を広げていくのだが、その過程で
接する日本女性たちをタルカットは理解し、状況を把握しようと努めていた。その上で、
私塾の運営から女子のための寄宿学校設立へと進み、女性宣教師と生活を共にすること
で自分たちをロールモデルとして、家庭に、あるいは社会にキリスト教を広めていく女
性を育てようと企図したと考えられる。その一方で、いまだ「なかなか家から出られな
い」日本女性の存在も多いことを意識して、宣教師の側から出かけていく家庭訪問を行
い、女性が家庭にいながらでもキリスト教に触れ、家庭生活のなかで女性が核となって
キリスト教を広めるというかたちも重視していた。日本の女性の社会状況を知った上で
形態の異なる伝道活動を行っていたのである。

こうしてタルカットと理解を深めた日本女性が増えると、次の段階として、より宣教
師と日本女性たちを容易に結びつけて伝道活動を助け、キリスト教の教えを伝える役目

を果たせる存在、すなわちバイブル・ウーマンを育てることが可能となった。タルカットは、すぐれたバイブル・ウーマンを養成していくことが、日本女性への伝道の最適な方法とみたのである。ここでもタルカットは、日本女性として、また日本女性に接するにあたってどのようなバイブル・ウーマンがふさわしいのかに配慮した。その過程で、専門のバイブル・ウーマンでなく別に職業をもって自立している女性、特に社会改良活動に近い職種についている女性が適当という見解を持つようになったと思われる³。

神戸での女学校と女子伝道学校での女性への教育経験と岡山での実際の伝道活動から、日本女性にふさわしいバイブル・ウーマン観を形成していったタルカットは、京都において看護婦養成の学校での教育に携わり、そこでは社会改良活動と結びつく具体的なバイブル・ウーマン像を描くことができた。病院で、災害の被災地で、また家庭でも、病人という弱者のために働く看護婦は、日本女性にも適した職業であった。この流れはタルカットの本国アメリカでも身近なものであり、京都看病婦学校で教鞭をとったりチャーズら看護専門職の ABCFM 派遣女性宣教師がそのロールモデルとなっていたのである。さらにタルカットの育てたバイブル・ウーマンは、広島において男性への伝道活動をも実現した。女性が男性ばかりの伝道の現場で活動することは本国アメリカにおいても難しいところ、看護を通してタルカットとバイブル・ウーマンはそれに成功したのであった。「より伝道地にふさわしいバイブル・ウーマン養成」という考え方をタルカットは本国アメリカの支援者たる女性たちに積極的に訴えかけた。支援するアメリカの女性クリスチャンと伝道地の日本人バイブル・ウーマンの双方の意識を高めようとする試みと言える。

本論文の主題である、トランスナショナルなキリスト教伝道について、タルカットの伝道活動は次のような点においてその典型とみることができる。まず、日米双方の女性に伝道活動へのかかわりを深め、日米の女性クリスチャンに互いの理解を増す努力を行ったこと、そして伝道の場としてハワイの日本人移民という文字通りトランスナショナルな場所でなされたことである。日本でタルカットはさまざまな年齢、階層、職業の女性、さらには男性への伝道活動に携わったが、ハワイでは現地のハワイアン、支配層のアメリカ人、日本をはじめとする各国からの移民というさらに複雑な社会構成の中での伝道活動であった。タルカットが伝道対象としたのは日本人移民女性であるが、ハワイ社会では日本人移民女性は日本国内においてよりも総じて難しい立場に置かれており、日本人移民女性間の格差もあり伝道活動は容易ではなかった。そのような伝道活動の現場でも協力者として力を発揮したのが日本人バイブル・ウーマンであった。ハワイで、タルカットは日本人バイブル・ウーマンの手本としている甲賀ふじ、宗えい子とともに伝道活動を行ない、トランスナショナルの地ハワイで改めて優れたバイブル・ウーマンの力を確信したのである。

タルカットが試みたトランスナショナルなキリスト教伝道のその後の展開について

は、本論文では触れることができなかった。タルカットが育成した日本人バイブル・ウーマンの活動、ウーマンズ・ボードを通じたアメリカ本国でのバイブル・ウーマン支援の行方、さらには ABCFM のバイブル・ウーマン観の変化などについて検討し、タルカットの伝道活動が一事例にとどまらないことを、より明確にしていきたい。

註

- ¹ 小檜山ルイ、『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』、東京大学出版会、1992年、3頁
- ² 近年、明治維新史研究においてもジェンダーの視点が取り入れられている。例えば、明治初期の西洋文明受容と女性観、自由民権運動と女性、維新期の女性と政治の関わりといったテーマでの研究が進んでいる。明治維新史学会編『講座明治維新 9 明治維新と女性』（有志舎、2015）参照。
- ³ 小檜山によれば、アメリカでは南北戦争後、大都市に女性の福祉専門員を養成する超教派の機関が設立され、聖書と福祉の分野に関連する伝道手法を教授し、都市の貧民救済といった社会福祉活動を実地に体験させていた（小檜山、前掲書、54-55頁）。彼女らは都市の社会問題解決に実際に当たる働き手であった。このような機関で学んだ女性たちの活動手法は海外伝道におけるバイブル・ウーマンのそれと共通しており、小檜山の指摘するとおり、海外伝道地に女性宣教師が設立したバイブル・ウーマン養成機関のモデルとなったと考えられる（小檜山、前掲書、145-146頁）。従って、当初からバイブル・ウーマンの役割には社会福祉に関わる要素が含まれていたとみることができる。

関連年譜

	タルカット関連事項	ABCFM日本伝道団／日本国内キリスト教関連事項	日本国内関連事項	米国社会関連事項
1836	5: 米国コネチカット州ロックヴィルに生まれる		天保の飢饉	
1852	米国コネチカット州ファーマントンのミス・ポーターズ・スクールを卒業			
1853			ペリー来航	
1857	米国コネチカット州ニューブリテンのノーマルスクールを卒業			
1858			外国人居留地開設	日米修好通商条約
1859	ノーマルスクールにて教職に就く		ヘボンら来日	
1861				南北戦争勃発
1863	教職を退職			
1865				南北戦争終結
1868 (明治元)			兵庫開港 明治と改元	
1869		11: ABCFM日本派遣最初の宣教師グリーン夫妻来日	版籍奉還	大陸横断鉄道開通
1870		3: グリーン、伝道団の本拠地を神戸とする		
1872	ABCFMの集會に出席、宣教師に志願		学制公布	
1873	3: 来日 夏、有馬に滞在して伝道開始 10: 私塾開設	春、元町講義所(現在の神戸教会)開設 冬、同講義所の安息日学校開設	2: 切支丹禁制高札撤去開始	
1874	4: 私塾移転 8: 有馬に滞在 9: 播州伝道	この年、私塾を伝道団の事業とし、女子寄宿学校の設立を決議 夏、ダッドレー三田伝道		
1875 (明治8)	10: 女学校(神戸ホーム)開校	7: 攝津第三公会(現在の三田教会)設立 11: 同志社英学校設立	12: 七一雑報発刊	
1876		2: パロウズ着任		
1877		11: クラークソン着任	西南の役	
1878	5: 四国伝道 明石伝道	10: 明石公会(現在の明石教会)設立		
1879	夏以前: 校務から離れ、民間伝道に	クラークソンが女学校の校長に就任、校名を英和女学校とする		
1880 (明治 13)	4: 岡山の新伝道区訪問 秋: 岡山に転任 10: 岡山教会設立	10: ダッドレーとパロウズの女子伝道学校設立		
1881	7: 今治教会会堂開の式に列席		10: 国会開設の詔勅	
1882	1月末: 英和女学校校長代行に就任 12: 英和女学校第1回卒業式	この年、女子伝道学校一時休校		
1883	12: 賜暇帰米	北日本伝道団設立		
1884	7: 米国帰国 10: WBM・ハートフォード支部年次総会出席	11: 女子伝道学校再開	この年、デフレによる不景気、農民の生活苦が深刻化	
1885 (明治 18)	1: WBM年次総会出席、日本での活動報告 5: WBM記念例会出席、日本における熟練教師の必要性を報告 8: オークランド、プリマスの教会にて報告 9: 岡山に帰任		1: ハワイ第1回官約移民	
1886	3: 神戸女子神学校在職	6: 京都看病婦学校授業開始 9: 同志社病院デヴィス邸にて業務開始	6: 万国赤十字条約加盟 12: 婦人矯風会設立	
1887	岡山にて伝道活動	8: 京都看病婦学校設立認可 11: 京都看病婦学校開校式	9: 岡山孤児院設立	
1888		6: 京都看病婦学校第1回卒業式		
1889	高梁にて伝道活動 鳥取にて伝道活動(～1890年3月)	神戸女子伝道学校第1回卒業式	2: 大日本帝国憲法発布	
1890 (明治 23)	岡山に帰任 京都に転任、同志社看病婦学校において宗教教育に携わる傍ら、伝道活動		10: 第1回帝国議会招集、教育勅語発布	
1891	6: 福井へ10日間の伝道旅行 8: 比叡山滞在、石井十次と面会 濃尾地震被災地で救援活動	10: 京都看病婦学校・同志社病院関係者が濃尾地震救援活動に参加	10: 濃尾地震発生	
1892	1: 京都で石井十次と面会			
1893	4: 京都で活動 6: 岡山訪問 石井十次と面会 11: 岡山孤児院訪問		4: 婦人矯風会が全国組織となる	

1894	1: 日向伝道 炭谷小梅同行 6: 京都で石井十次と面会 秋、甲賀ふじと広島を訪ねる 12: 以後、広島の病院において伝道活動	10: 日清戦争傷病兵看護のため、京都看病婦学校生徒・卒業生を広島へ派遣 11: 新島八重、赤十字看護婦取締として広島へ	7: 日清戦争開戦	7: ハワイ臨時政府の共和国宣言
1895	広島で活動 日清戦争中国人捕虜や傷病兵を訪ねる 4: 岡山で石井十次と面会 8: コレラ罹患の石井夫妻を見舞う 9: 岡山で石井十次と面会 11: 岡山で孤児院のための特別祈祷会 11: 神戸女学院創立20周年にて感話 コレラに罹患するも回復 広島で活動続ける	5: 日本伝道会社がABC FMからの独立を決議	この年、コレラ大流行	
1896 (明治 29)	2: 賜暇帰米 5: 米国帰国 11: WBM年次総会出席、広島での活動について報告	8: 同志社在職のABC FM宣教師が辞職		
1897	10: ABC FM年次総会に出席			6: ハワイ併合
1898	この年前半、クリフトン・スプリングスに滞在、保養			
1899	3: WBMPのQuarterly Meeting出席、日本における教育活動について報告 5: WBMPの6月例会に出席 10: サンフランシスコより日本に向けて出発の予定を延期	7: ABC FM 日本伝道団次総会でタルカットの京都帰任要請	7: 条約改正 8: 私立学校令公布、訓令12号発令	
1900 (明治 33)	2: サンフランシスコ出発の予定を延期 6: サンフランシスコ出発、ホノルル到着 9: 在ホノルル府日本人基督教会よりハワイ風景写真集を贈られる			
1901	ホノルル在住日本人への伝道活動に従事			1: ホノルル・ベスト焼払事件
1902 (明35)	12: 横浜着、神戸帰任 以後、神戸女子神学校を拠点に、学校での指導と伝道活動			
1903	3: 神戸女学院において、ハワイにおける伝道活動について報告 4: 婦人矯風会第10回大会に出席・講演 10: 日本組合教会総会に日本伝道団代表の一人として出席		7: 日本基督教青年会同盟(YMCA)設立 前年の凶作により東北地方飢饉	
1904	2: 日露戦争出征兵士に「旭光」5000部を発送 5: 関西連合婦人大祈禱会で感話 7: 津山訪問		2: 日露戦争開戦	
1905	1: ABC FM宣教師O.H.ギュリック夫妻金婚にあたり、同D.C.グリーンと連名で祝い状を送る 11: 神戸女学院創立30周年記念式で講演 この年、活田教会を中心に活動、近畿地方各地へ伝道	10: 日本基督教会大会、日本組合基督教会総会で教会の日本伝道団からの独立自給を決議		
1906	6: 神戸女学院矯風会例会にて感話 9: 札幌訪問	10: 日本組合基督教会に婦人伝道会結成		3: カリフォルニア州議会が日本人移民制限に関する決議
1907	5: 日本伝道団年次総会に出席			2: 米国、新移民法可決
1908	6: 日本伝道団年次総会に出席			2: 移民に関する日米紳士協約
1909	4: 鳥取訪問 5: 神戸女学院にて講演 10: プロテスタント日本伝道50周年記念会出席、講演	ABC FM 日本伝道開始40周年	この年、プロテスタント日本伝道開始50周年	
1910	5: 日本伝道団年次総会に出席、宮崎伝道支援要請 10: 宮崎伝道		5: 大逆事件 8: 韓国併合に関する日韓条約調印	
1911 (明44)	3: 神戸に戻る 5: 神戸女学院にて感話 夏は軽井沢滞在、9月神戸に戻る 10: 日本伝道団年次総会に出席 11: 神戸にて逝去			

参考文献

一次資料

Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: ABC 16: Missions to Asia 1827-1919, Research Publications, Woodridge, ca.1983 (マイクロフィルム)

Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions

Board of Hawaiian Evangelical Assosiation Annual Report

Life and Light for Woman

Missionary Herald of the American Board of Commissioners for Foreign Missions

Mission News of the American Board of Commissioners for Foreign Missions in Japan

The Friend

七一雑報

基督教新聞

やまと

山陽新報

二次資料

著者	タイトル等
Ahlstrom, Sydney E.,	<i>A Religious History of the American People</i> , Hew Haven, Yale University Press, 1972
赤松力	『近代日本における社会事業の展開過程—岡山県の事例を中心に—』、御茶の水書房、1990年
Anderson, Marnie S.,	Women and Political Life in Early Meiji Japan: The Case of the Okayama Joshi Konshinkai (Okayama Women's Friendship Society), <i>U.S.-Japan Women's Journal</i> , No.44, 2013, pp.43-66
有賀貞、大下尚一	『新版 概説アメリカ史』、有斐閣、1990年
Beaver, Robert Pierce,	<i>American Protestant Women in World Mission: History of the First Feminist Movement in North America</i> , Grand Rapids, Eerdmans, 1968
Beaver, Robert Pierce,	<i>All Love Excelling: American Protestant Women in World Mission</i> , Grand Rapids, Eerdmans, 1968
Bendroth, Margaret Lamberts	<i>The Social Dimensions of 'Woman's Sphere': The Rise of Women's Organizations in Late Nineteenth-Century American Protestantism</i> , Ph.D. diss., Johns Hopkins University, http://www.jstor.org/stable/3177610
Berg, Barbara J.,	<i>The Remembered Gate: Origins of American Feminism, the Woman and the City, 1800-1860</i> , Oxford, Oxford University Press, 1978
Blair, Karen	<i>The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914</i> , New York, Holmes & Meier Publishers, 1980
Bordin, Ruth	<i>Woman and Temperance: The Quest for Power and Liberty, 1873-1920</i> , Philadelphia, Temple University Press, 1981

- Bowie, Fiona, Deborah Kirkwood, and Shirley Ardener, eds
Boylan, Ann, *Women and Missions: Past and Present: Anthropological and Historical Perceptions*, Providence, Berg, 1993
- Brusco, Elizabeth, and Laura F. Klein, eds
College of William and Mary, Department of Anthropology
Costelloe, Linda Cooper. *The Origins of Women's Activism, New York and Boston, 1797-1840*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2002
- The Message in the Missionary: Local Interpretations of Religious Ideology and Missionary Personality*, Williamsburg, College of William and Mary, 1994
- Women Missionaries and Cultural Change*, Williamsburg, College of William and Mary, 1987
- How Maine Women's Involvement in the Woman's Board of Missions Expanded the Lives of Women at Home and Abroad, 1873-1927*, MA Thesis, The Graduate School, The University of Maine, 2011
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood*, New Haven, Yale University Press, 1977
- DeForest, Charlotte, B. *The History of Kobe College*, Boston, Kobe College Corporation, 1952
- 同志社大学人文科学研究所 『北米日本人キリスト教運動史』、PMC出版、1991年
- 同志社大学人文科学研究所 『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890—』、現代史料出版、1999年
- 同志社大学人文科学研究所 『石井十次の研究』、同朋舎、1999年
- 同志社大学人文科学研究所 『アメリカン・ボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』、教文館、2004年
- 同志社社史史料編集所 『同志社百年史 資料編一』、『同志社百年史 資料編二』、学校法人同志社、1979
- Douglas, Ann *The Feminization of American Culture*, New York, Knopf, 1978
- Drachman, Virginia G., *Hospital with a Heart: Women Doctors and the Paradox of Separatism at the New England Hospital, 1862-1969*, Ithaca, Cornell University Press, 1984
(邦訳：バージニア・G. ドラックマン著、依田和美編『ホスピタル・ウイズ・ア・ハート 女性のための女性による病院の物語』、明石書店、2002年)
- DuBois, Ellen Carol and Dumenil, Lynn *Through Women's Eyes : an American History with Documents*, Boston, Bedford/St.Martin's, 2005
(邦訳：エレン・キャロル・デュボイス、リン・デュメニル著、石井紀子他訳『女性の目から見たアメリカ史』、明石書店、2005年)
- Eder, Elizabeth K *Constructing Opportunity: American Women Educators in Early Meiji Japan*, Ph.D. diss., University of Maryland College Park, 2001
- Epstein, Barbara Leslie *The Politics of Domesticity: Women, Evangelism, and Temperance in Nineteenth-Century America*, Irvington, Columbia University Press, 1981

- Fuchs, Lawrence H *Hawaii Pono: A Social History*, New York, Harcourt Brace & World, 1961
- 藤本大士 医学とキリスト教：日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教、法政大学出版局、2021
- Gallagher, Mark E. *No More A Christian Nation: The Protestant Church in Territorial Hawaii'I, 1898-1919*, Ph.D.diss., History, University of Hawaii, 1983
- Goodsell, Fred Frelid *You Shall Be My Witness*, Boston, American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1959
- Grimshaw, Patricia "Christian Woman, Pious Wife, Faithful Mother, Devoted Missionary": Conflicts in Roles of American Missionary Women in Nineteenth-Century Hawaii, *Feminist Studies*, Vol.9, No.3, pp.489-521, 1983
- 濱田栄夫 『門田界限の道—もうひとつの岡山文化—』、吉備人出版、2012年
- Hill, Patricia Ruth *The World Their Household The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation, 1870-1920*, Ann Arbor, University of Michigan Press, 1985
- 廣部泉 来日アメリカ人宣教師の越境と日米関係：シドニー・L・ギュリックにみる越境と文化変容、『同志社アメリカ研究』第45号、25-88頁、2009年
- 細井勇 『石井十次と岡山孤児院—近代日本と慈善事業—』、ミネルヴァ書房、2009年
- Hutchson, William R. *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions*, Chicago, University of Chicago Press, 1987
- 一番ヶ瀬康子 『アメリカ社会福祉発達史』、光正館、1980年
- 飯塚久栄、佐藤亜紀 資料紹介 『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』ヘンリー・K・ミラー編集、宮城学院資料室年報『信望愛』第26号、5-35頁、2021年
- Imai, Konomi The Women's Movement and the Settlement Movement in Early Twentieth-Century Japan: The Impact of Hull House and Jane Addams on Hiratsuka Raicho, *Kwansei Gakuin University Humanities Review*, 17, pp.85-109, 2013
- Ion, Andrew Hamish *American Missionaries, Christian Oyatoi, and Japan, 1859-73*, Vancouver, UBC Press, 2009
- Ishii, Noriko Kawamura *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909*, New York, Routledge, 2004
- 石井友愛記念会 『石井十次日誌』
- 一色哲 「キリスト教と自由民権運動の連携・試論—岡山と高梁を事例に—」、『キリスト教社会問題研究』第43号、134-165頁、1994年
- 岩波書店編集部 編 『近代日本総合年表』第3版、岩波書店、1997
- 亀山美知子 『近代日本看護史』、I-IV、ドメス出版、1985
- 亀山美知子 『私たちの約束—M.T. ツルーと日本最初の看護婦学校』、人文書院、1990

- 勝村とも子 「幼児教育史研究－無償幼稚園運動(1)ホノルルの日本人幼稚園と甲賀ふじの果たした役割[1897年～1902年]」、『樟蔭東女子短期大学研究論集』第9号、45-52頁、2006年
- 勝村とも子 「幼児教育史研究－無償幼稚園運動(2)甲賀ふじとハワイ島コハラの幼稚園[1902年～1904年]」、『樟蔭東女子短期大学研究論集』第11号、47-53頁、2010年
- 小檜山ルイ 『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』、東京大学出版会、1992年
- 小檜山ルイ 「海外伝道と世界のアメリカ化」、森孝一編『JIIA現代アメリカシリーズ5 アメリカと宗教』、財団法人日本国際問題研究所、95-127頁、1997年
- 小檜山ルイ 「アメリカにおける海外伝道研究の文脈とその現在」、国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第30号、79-108頁、2005年
- 神戸女学院百年史編集委員会 『神戸女学院百年史 総説』、神戸女学院、1976年
『神戸女学院百年史 各論』、神戸女学院、1981年
- 倉敷基督教会 『倉敷基督教会略史』、1935年
- 栗原健 「明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動～明治後期の年次報告から～」、宮城学院資料室年報『信望愛』第26号、36-49頁、2021年
- 黒沢文貴、河合利修 『日本赤十字社と人道支援』、東京大学出版会、2009年
- Lublin, Elizabeth Dorn *Reforming Japan: the Woman's Christian Temperance Union in the Meiji Period*, Vancouver, UBC Press, 2010
- 明治維新史学会 編 『講座 明治維新』、有志舎、2010
- Melder, Keith, *Beginnings of Sisterhood: The American Woman's Rights Movement, 1800-1850*, New York, Schocken Books, 1977
- 森本あんり 『アメリカ・キリスト教史 理念によって建てられた国の軌跡』、新教出版社、2006
- 守屋茂 『近代岡山県社会事業史』、岡山県社会事業史刊行会、1960年
- 守屋友江 『アメリカ仏教の誕生 ニ〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』、現代史料出版、2001年
- 守屋友江 「アウトステーションからステーションへー岡山ステーションの形成と地域社会」、同志社大学人文科学研究部編『アメリカンボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』、99-127頁、2004年
- 室田保夫 『留岡幸助の研究』、不二出版、1998年
- 室田保夫 『近代日本の光と影－慈善・博愛・社会事業をよむー』、関西学院大学出版会、2012年
- Nakamura, Kelly Yoshie, Yeiko Mizobe So and the Japanese Women's Home for Abused Picture Brides (1895-1905), *Amerasia Journal*, 36:1, pp.1-32, 2010
DOI: 10.17953/amer.36.1.456118723874082k
- 日本基督教団岡山教会 『岡山教会百年史』、1985年
- 日本基督教団鳥取教会 『鳥取教会百年史』、1990年
- お茶の水女子大学ジェンダー研究所 『国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良」』、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、2017

- Ogawa, Dennis *Kodomo no tame ni : the Japanese American experience in Hawaii-For the sake of the Children*, Honolulu, University Press of Hawaii, 1978
- 岡山県史編纂掛 『岡山県史稿本 下』、岡山県地方史研究連絡協議会、1967年
岡山寧子 「同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育—リンダ・リチャーズの日本での活動から—」、『京都府立医科大学雑誌』第119巻2号、89-98頁、2010年
- 岡山女性史研究会 『近代岡山の女たち』、三省堂、1987年
岡山市百年史編さん委員会 『岡山市百年史 上巻』、ぎょうせい、1989年
小野尚香 「京都看病婦学校と宣教看護婦リンダ・リチャーズ」、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869~1890—』、327-354頁、1999年
- 小野尚香 「医療宣教師ベリーの使命と京都看病婦学校」、同志社大学人文科学研究所編『アメリカンボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869~1890年』、272-297頁、2004年
- Patessio, Mara *Western Women Missionaries and their Japanese Female Charges, 1870-1890*, *Women's History Review*, Vol.16-1, pp.59-77, 2007
- Prang, Margaret *A Heart at Leisure from Itself: Caroline Macdonald of Japan, Vancouver*, UBC Press, 1995
(邦訳：マーガレット・プラング著、鳥海百合子訳『東京の白い天使 近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド』、教文館、1998年)
- Putney, Clifford and Burlin, Paul T. Eds *The Role of the American Board in the World Bicentennial Reflections on the Organization's Missionary Work, 1810-2010*, Rugene, Wipf and Stock, 2012
- Reeves-Ellington, Barbara, Sklar, Kathryn K. and Shemo, Connie K. eds *Competing Kingdoms: Women, Mission, Nation, and the American Protestant Empire, 1812-1960*, Durham, Duke University Press, 2010
- Reeves-Ellington, Barbara *Women, Protestant Missions, and American Cultural Expansion, 1800 to 1938: A Historiographical Sketch*, *Social Sciences and Missions* 24, pp.190-206, 2011
- Robert, Dana Lee *The Influence of American Missionary Women on the World Back Home*, *Religion and American Culture: A Journal of Interpretation*, Vol.12, No.1, pp.59-89, 2002
- Robert, Dana Lee *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice*, Macon, Mercer University Press, 1996
- Robert, Dana Lee *The Last Fifteen Years: Historians' Changing Views of American Women in Religion and Society*, *Women in New Worlds*, edited by Hilah F. Thomas and Rosemary Skinner Keller, Nashville, Abingdon, pp.48-68, 1981
- Robert, Dana Lee *Gospel Bearers, Gender Barriers: Missionary Women in the Twentieth Century*, Maryknoll, Orbis Books, 2002
- Rohr, John von *The Shaping of American Congregationalism 1620-1957*, Cleveland, Pilgrim Press, 1992
- Rosenberg, Carol Smith *Beauty, the Beast and the Millitant Woman: A Case Study in Sex Roles and Social Stress in Jacksonian America*, Nancy F. Cott ed., *History of Women in the United States*, Vol.17, pp.3-25, 1994

- Ryan, Mary *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865*, Cambridge, Cambridge University Press, 1981
- 佐伯理一郎 『京都看病婦学校五十年史』、京都看病婦学校同窓会、1936
- 坂本清音 「ウーマンズ・ボードと日本伝道」、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869~1890—』、119-152頁、1999年
- 更井良夫 『岡山県の生んだ4人の社会事業家：留岡幸助、石井十次、山室軍平、アリス・ペティ・アダムス』、日本基督教社会事業同盟、1973年
- Schenk, Wilbert R. ed *North American Foreign Missions, 1810-1914*, Grand Rapids, Eerdmans, 2004
- Schlesinger, Jr., Arthur *The Missionary Enterprise and Theories of Imperialism*, John K. Fairbank ed., *The Missionary Enterprise in China and America*, Cambridge, Harvard University Press, 1974
- Scott, Anne F. *Natural Allies: Women's Associations in American History*, Urbana and Chicago, Univeristy of Illinois Press, 1993
- Seat, Karen K *Providence Has Freed Our Hands Women's Missions and the American Encounter with Japan*, Syracuse, Syracuse University Press, 2008
- 聖和保育史刊行会 『聖和保育史』、聖和大学、1985年
- 聖和史刊行委員会 『Thy Will Be Done 聖和の128年』、関西学院大学出版会、2015年
- 千田武志 「日清戦争期における広島医療と看護」『広島医学』62巻6号、2009
- 茂義樹 『明治初期神戸伝道とD.C.グリーン』、新教出版社、1986年
- スミス、ページ 東浦めい訳『アメリカ史のなかの女性』、研究社出版、1977年
- Snow, Jennifer C. *Protestant Missionaries, Asian Immigrants, and Ideologies of Race in America, 1850-1924*, New York, Routledge, 2007
- 杉井六郎 『遊行する牧者—辻密太郎の生涯』、教文館、1985年
- 杉本良男 「帝国の夢、国家の軛 福音と文明のパラドックス」、『国立民族学博物館調査報告 31』、2002
- 住谷悦治 「キリスト教徒の社会改良思想と実践—明治社会問題史の一側面—」、『同志社大学経済學論叢』第8巻第6号、1-33頁、1958年
- 鈴木恒彌、若山晴子 「タルカット書簡—訳および註（一）」、『神戸女学院大学論集』第24巻3号、70-107頁、1978年
- 鈴木恒彌、若山晴子 「タルカット書簡—訳および註（二）」、『神戸女学院大学論集』第25巻3号、127-156頁、1979年
- 鈴木正和 「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン—失われた姿を求めて—」、『共立研究』第7巻第1号、1-10頁、2001年
- 高道基 『幼児教育の系譜と頌栄』、頌栄保育学院、1996
- 竹中正夫 「岡山県における初期の教会形成」、『キリスト教社会問題研究』第3号、1-32頁、1959年
- 竹中正夫 『真人の共同体』、新教出版社、1962年
- 竹中正夫 『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』、教文館、2000年
- 田中智子 「明治初年の神戸と宣教医ベリ—医療をめぐる地域の力学—」、『キリスト教社会問題研究』第52号、31-57頁、2003年

- 田中智子 「明治初期における医学・洋学教育体制の形成とキリスト教界—岡山県とアメリカン・ボード—」、『キリスト教社会問題研究』第54号、25-64頁、2005年
- Taylor, Sandra C. *Advocate of Understanding Sydney Gulick and the Search for Peace with Japan*, Kent, Kent State University Press, 1984
- Thelen, David *The Nation and Beyond: Transnational Perspectives on United States History*, *The Journal of American History*, Vol.86, No.3, pp.965-975, 1999
- Tyrrell, Ian *Transnational Nation: United States History in Global Perspective since 1789*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, 2007
(邦訳：イアン・ティレル著、藤本茂生他訳『トランスナショナル・ネーション アメリカ合衆国の歴史』、明石書店、2010年)
- Tyrrell, Ian *Reforming the World: the Creation of America's Moral Empire*, Princeton, Princeton University Press, 2010
- Tyrrell, Ian *Women and Temperance in Antebellum America, 1830-1860*, Nancy F. Cott ed., *History of Women in the United States*, Vol.17, pp.116-140, 1994
- 若山晴子 「ダッドレー書簡一訳および註(一)」、『神戸女学院大学論集』第28巻3号、59-77頁、1982年
- 若山晴子 「ダッドレー書簡一訳および註(二)」、『神戸女学院大学論集』第29巻1号、31-50頁、1983年
- 渡辺久雄 「タルカッタ女史の鳥取伝道と鳥取英和女学校」、『学院史料』第6号、1-22頁、1988年
- 渡辺久雄 「京都看病婦学校とタルカッタ女史」、『学院史料』第7号、1-14頁、1989年
- Welter, Barbara *She Hath Done What She Could: Protestant Women's Missionary Careers in Nineteenth-Century America*, *American Quarterly*, Vol.30, No.5, pp.624-638, 1978
- White, Ann *Counting the Cost of Faith: America's Early Female Missionaries*, *Church History*, Vol.57, No.1, pp.19-30, 1988
- Yasutake, Rumi *Transnational Women's Activism: the United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1850-1920*, New York, New York University Press, 2004
- 吉田亮 「ハワイ移民の母・宗栄子の生涯と信仰」『基督教世界』3420号、1985年
- 吉田亮 「日本ミッション”支部”としてのハワイ伝道—O.H. ギューリックとハワイ日本人伝道」、『キリスト教社会問題研究』第36号、92-146頁、1988年
- 吉田亮 「アメリカン・ボード日本ミッション宣教師の「越境」伝道：一九世紀末期日布間の宣教師ネットワークとハワイ日本人移民」、国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第30号、33-50頁、2005年
- 吉田亮 「ハワイ日本人移民とキリスト教越境伝道—来日アメリカ宣教師ドレマス・スカッターの事例—」、『同志社アメリカ研究』第45号、1-24頁、2009年